

---

# 輪廻は転生しました

叶衣 綾町

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

輪廻は転生しました

### 【Nコード】

N4506V

### 【作者名】

叶衣 綾町

### 【あらすじ】

江戸時代の女盗賊、緒神輪廻は光る泉に落ちて、異世界に転生してしまう。しかも転生したのは男の体だった！ 居合の達人である輪廻は軍人となり、戦場でめざましい活躍をする。しかしあるとき、輪廻は戦場で、最強の敵と対峙する。

## 1・生まれ変わりの輪廻

更場さらば武術団ぶじゅつだんが一つ、緒神おがみりんね輪廻。更場武術団の中でも異彩を放つ女剣士である。江戸時代、いかな輪廻が盗賊とはいえ、女人が刀を持つのは目立つことこの上ない。だから輪廻は、杖に見せた特注の仕込み刀を愛刀として使っていた。

真夜中、輪廻が仲間と共に町の金貸しの屋敷を襲った帰り、山奥のねぐらへの道中、森の中に光る何かを見た。

「おい、気を付けるよ」

団長の斧原一心が声をかけたが輪廻はそれを無視した。

一人で森の奥に。

そこには光る泉があった。

何だこれは、と思ったときには、足を滑らせていた。輪廻を飲み込んだ泉はたちまち光を失ってしまった。

気がついたときには、輪廻は別の世界にいた。しかも、彼女は輪廻ではなくなっていたのだ。

その世界に生まれた輪廻に、両親はラデイと名付けた。ラデイは男である。

赤ん坊のときは何も分からなかったが、成長し物心がついたころから、次第に自分のおかれている状況が見えてきた。

( 一体これはどういうことだ…？ そもそもこの世界は一体何だ？ )

人々の顔かたちや目の色、服の形、どれもが輪廻の知っているものとは違っていた。

言葉も違うようだが、改めて世界に生まれしてきた輪廻は物心つくころにはこの国の言葉をすでにマスターしてしまっていた。

さらに驚いたのは、この世界には魔法と呼ばれる不思議な力がある、ということだった。

魔法を使えるのは魔女だけで、魔女は輪廻の生まれたサントラン王国には一人しか居なかった。

（わたしはあのときに死んだのだろうか。そもそも、あの泉は一体何だったのだ？ わたしはもう、江戸には帰れないのか？）

しかし不思議と、輪廻は故郷に帰りたとはあまり思わなかった。輪廻の家族はみな死んでいるし、江戸に戻ったところで、また岡っ引きに追われながら強盗を繰り返すだけの生活が待っている。

（しかし…どうせ生まれ変わるなら、せめて女に生まれたかったな。わたしが男とは）

輪廻は無口な子供だった。他の子供の親からはよく、大人びた子供だと言われた。

輪廻は他の子供たちを遠ざけるようなことはせず、着かず離れずの距離を保っていた。

輪廻が再び剣を取ったのは12歳になったときだった。  
輪廻を王国軍に入隊させようと考えた父が、輪廻に剣の稽古をしたのだ。

輪廻の両親は平民だった。暮らし向きも、決して楽とは言えない。  
サントラン王国で平民が豊かな暮らしをするには、商売で稼ぐか、  
軍に入って出世するくらいしか、方法がない。

晴れた日に、家の庭で父から剣を手渡された。木で作られた訓練用の剣である。

輪廻は手の中で木剣を馴染ませる。

「ラデイ！ まずは剣に慣れることだ！ さあ、どこからでもいいから、お父さんにかかってきなさい」

「わかりました、お父様」

輪廻は剣を構えた。最後に剣を握ったのは10年以上前だ。しかし、  
剣の心得は輪廻の魂に刻み込まれていた。

「いいぞ。なかなか様になっているじゃないか」

父が喜ぶ。輪廻はじっと相手を見ている。

ふっ、と一息で踏み込む。

一瞬で距離を詰め、輪廻の剣は父の胸にピタリと当てて停止した。

「え？ あ…」

父が困惑している。輪廻の父は素人だったが、初めて剣を持った子供の一撃を、受けるどころか反応すらできなかったのだ。

遅い、と輪廻は思った。少年の体はまだまだ輪廻の意思に追い付いていなかった。

その日、受けの練習だと言って、父は輪廻に何度も剣を打ち込もうとしたが、とうとう一度も剣を合わせることなく、輪廻は父の剣をすべて避けてしまった。

夜、父は酒を飲みながら、ラディは剣の天才だと嬉しそうに母に語った。

その後、輪廻は父の紹介で町の道場へ入れられたが、初日の鍛練で先生を負かしてしまった輪廻は、一月もしないうちに道場を追い出されてしまった。

輪廻は14歳の春に、王国陸軍の入団のために王都まで来た。

町の賑やかさを見て、輪廻は江戸の風景を思い出した。望郷の気持ちちはもう薄れつつある。

「ラディ！ お前なら絶対に騎士になれる！ 自分に自信を持って！」

輪廻を送り出した父は力強く言った。

輪廻は徒歩で兵舎の前まで向かう。  
係の人間に入団を申し出ると、輪廻が拍子抜けするくらいあっさり  
と中に通された。

宿舎には木の二段ベッドが部屋いっぱい敷き詰められていた。お  
世辞にも広いとは言えない。

「おい！ ラディ・ダールトンと言ったな」

輪廻を案内した中年の男が言った。

「俺はディオル・バールトン。お前たちの訓練教官だ。俺の命令に  
は絶対に従え。でなければここを追い出すぞ。分かったら自分のベ  
ッドを決めて荷を解け。あと一月もしないうちに募集が締め切られ  
る。そうなれば訓練開始だ。今のうちに自由の空気を味わっておけ」  
「剣は支給されるのですか？」

「ひよっこが生意気なことを言うな！ お前たちなど木の棒で十分  
だ！」

耳元で怒鳴られたので、輪廻はしおらしくうつむいてみせる。

訓練教官がいなくなつてから、輪廻は一番清潔そうなベッドの、下  
の段の中に荷物を入れた。

「よお、お隣さんが」

となりのベッドからにゅつと手を伸ばした。輪廻はその手を取る。

「ヴィセンテだ。東部出身か？」

「ラディ。北だよ」

「はっ…同郷のやつがいなくて寂しいぜ」

(それを言うなら、わたしと同郷の人間なんて、この世界にはいないのに)

ヴィセンテは日に焼けた肌と筋肉質な腕を惜しげもなく晒している。握手をしただけでヴィセンテの熱量が輪廻にも伝わってくる。背もラディよりずっと高い。

ラディは同世代の青年たちよりも小柄な体格だった。

「お前、貴族か？」

「平民」

「ああそう。俺は貴族だがな。まあ貧乏貴族で、平民と大して変わらない」

「邪魔だ。そこをどけ」

横柄な台詞に輪廻が振り向くと、そこには女が立っていた。

髪は首の上でバツサリと切られており、意思の強そうな切れ長の目をしている。体は全体的にスリムで、身長はラディよりもありそう  
だ。

輪廻が腕をひっこめると、女はベッドのへりに足をかけて上に登った。どうやら上のベッドの持ち主らしい。

「僕はラディ。よろしく」

女に言って、ヴィセンテのように手を差し出したが、そっけなく無視される。

諦めて下段のベッドに戻ると、ヴィセンテが輪廻を見て笑いかみ殺していた。



「振られたな。お前の勇氣は認めよう。でも今のところ俺の方がリードしてるぜ。あんな態度だが名前は聞き出した。ヴァージニア・キャスカート。あのキャスカート家の次女だそうだ」

「キャスカート？」

「何だ、知らないのか？ 世間知らずな坊主だな」

輪廻にはなんの関わりもない、異世界の事情に興味を持てるはずもなかった。

ヴィセンテは声を潜める。

「キャスカート家ってのは超名門だよ。何人も有能な軍人を出してる。最近は景気が悪くて火の車らしいがな。爵位を売ったとかいう噂まで流れてるくらいだぜ」

「爵位があるのか？」

「さて。ヴァージニア本人は持ってないと思うが。にしても、あいつはすげえ美人だ。お前もそう思わないか？」

「まあ、ね」

輪廻は曖昧に頷いた。

心は女で、体は男である。心体の不一致に、輪廻は男と女のどちらも好きになれない性質になっていた。

（このヴィセンテって男も、まあ悪くない見てくれだけど…さすがに男同士ってのは、わたしの趣味じゃないね）

訓練教官の言った通り、それから一月後に、輪廻たち新兵の訓練が始まった。



## 1・生まれ変わりの輪廻（後書き）

応援感想叱咤激励要望批評いずれも募集中です！  
お気軽にどうぞ！

## 2・訓練開始

新兵の訓練は、まずは単純な団体行動の練習から始まり、続いて戦術の基礎部分を模擬戦形式で身につけてゆく。

転生してからそれなりに鍛えてきた輪廻だったが、彼女ですら一日の訓練が終わると疲れ果てて口を利くのも億劫になっていた。

輪廻は団体行動が苦手だった。

江戸にいたころは更場武術団の一人として仲間と共に江戸を血の海にした経験があったが、それはあくまで背中を任せるに足る仲間がいたからできたことであって、戦いのことを何も知らない素人のレベルに合わせて行動するのは輪廻にとって非常に苦痛だった。

輪廻は自然と、ヴィセンテと行動を共にすることが多くなってきた。というよりもヴィセンテの方から、孤立しがちな輪廻に声をかけてくるのだが。

珍しい女性の兵士ということで輪廻はヴァージニアのことを気にしていたのだが、彼女は輪廻以上に他人を寄せ付けなかった。

しかし訓練の成績は常に彼女がトップで、その少し下にヴィセンテが位置し、輪廻は鼻屑目に見ても中央がいいところだった。

二ヶ月ほど王都の兵舎で訓練を済ませた後、王都の西にある森に野営地を設けてさらに本格的な訓練を始めた。

この日、森の中を半日も走り回らされ、輪廻を含めた訓練兵たちは皆顔に汗を浮かべ、荒い呼吸を繰り返している。

野営地の周囲は木ばかりで、最寄りの村からは徒歩で半日は離れている。

訓練生の呼吸に混ざって、シユクと呼ばれる四足獣の高い鳴き声が時折遠くから聞こえてきた。

「ようし！ 今日はいこれまで！ 鍛えが足りんぞ！ 明日からは本格的に剣術をやるぞ！ 今夜のうちによく休んでおけ！ 解散！」

訓練教官のディオルが大きな声を飛ばす。

ディオルも輪廻たちと同じだけの距離を走っているはずだが、顔に浮かんでいるのは汗だけで、疲労はまったく感じられなかった。

（体が重い……。でも、このまま鍛え続ければ、前のわたしよりも体力がつくかも。せっかくの男の体だし、有効活用しなければね）

輪廻がラデイの肉体の状態を確認していると、ヴィセンテが話しかけてきた。

「おう。お疲れ。大丈夫か？ 鍛え方が足りんぞ」

「教官と同じ事を言わないでよ…あんたも、よくあんだけ走って平気だね」

「まあ、体力には自信があるんでね。というかお前、なんか話し方が女っぽいな」

「うえ！？ ……そ、そうかな。疲れてたからかも」

「大体、体力っていうなら、ヴァージニアの方だろう。あいつ、ずっと先頭走ってたぜ」

輪廻はヴァージニアを見た。

さっきまで荒い息を繰り返していたが、すぐに調子を取り戻すと、いつもの凜とした雰囲気をもとって、タオルで汗を拭き始めた。

「ヴァージニア。お疲れ様。足、早いんだね」

「……………」

ヴァージニアは輪廻にじろりと視線を送ると、目障りだと言わんばかりに背を向けて行ってしまった。

「振られたな」

へへへへ、と楽しそうに輪廻の方をヴィセンテが叩く。

「何だ何だ？ だらしなのは訓練だけじゃないみたいだな。戦争が終わるとヴァージニアが微笑むのとどっちが早いかな」

「その2つだったら戦争を終わらせる方が簡単そうだよ……」  
「違うない」

輪廻が嘆息すると、ヴィセンテは豪快な声を上げて笑う。

輪廻はむくれて、ヴィセンテに言い返した。

「ヴァージニアに無視されてるのは認めるけど、訓練でだらしないうつてのは訂正してよ」

「ん？ けど、今日の持久走じゃ思いっきりへばってたじゃねえか」

「戦うのと走るのとは違うよ」

「お前にしちや珍しく自信あげだな」

「そんなことはないけど」

（少なくともわたしの刀で殺せなかった人間は江戸には三人しかいなかった）

輪廻は自分の剣術には自信があった。だが、その理由を説明したところで正気を疑われるだけだ。

輪廻は曖昧に濁すしかなかった。

「あー、もしかして剣術の訓練のことを言ってるのか？ やめとけよ。剣術ならゴアーシュが一番だぜ」

「ゴアーシュ？ あいつが？」

「おい！ シュトラウス！」

ヴィセンテが呼びかけると、木の根元で雑談をしていたゴアーシュ・シュトラウスが輪廻たちの方に歩いてきた。

ゴアーシュは目鼻立ちのはっきりとした色男で、金色の長い髪を後ろで縛っているのが特徴だった。

シュトラウス家は王都の名門貴族なのだが、噂によるとゴアーシュは女遊びが過ぎて父に軍隊に入れられたらしい。

何でもシュトラウス家は国内では五本の指に入るほどの大富豪で、軍に入るまでは働くこともせず毎日金を湯水のごとく使っては女を囲っていたらしい。

「何だい？ 僕に何か用かい？」

「ゴアーシュは剣術に自信があるの？」

「君、ゴアーシュなどと馴れ馴れしく呼ばないでくれ」

「……そうだったね、ミスターシュトラウス」

そのくせ、ゴアーシュはやたらとプライドが高いのである。

ゴアーシュは輪廻に自慢気に言った。

「僕は5歳のころから剣の英才教育を受けてきたからね。リン・カナベル將軍の教育係をしていた男に剣術を習ったのさ。うちで開いた剣の大会で優勝したこともあるよ」

「ああ、あの、相手の体に当てたらポイントがもらえるっていう

」

「貴族の嗜みだよ。君のような平民には理解出来ない優雅な武術さ」  
「んあ？ 俺も競技剣術ケル・ルなんてやったことねえぞ？」  
「それはきみが野蠻だからだよ！」

ゴアーシュが睨みつけても、ヴィセンテは違いないと笑い飛ばした。

「まあ、見物だな。貴族の剣と、平民の剣、どちらが強いか」

ヴィセンテは冗談交じりに漏らした。

「ようし！ 剣術の基本的な形は、すでに習ってきたと思う。これからは実践形式で、一対一で打ち合わせてもらう。順番に前に出る！」

教官が訓練生の名前を2つ読み上げると、全員が見守る中央に歩み出て、剣を持って構える。

訓練生に配られているのは木剣ではなく、鋼鉄の剣である。これも訓練用の剣で、刃は潰してある。しかしこの種類の幅の広い剣は打撃力で相手を切る武器なので、切れることがないとはいえ殺傷力は十分に秘めている。

それゆえに、訓練生は全員金属の防具を身につけていた。

輪廻はこの世界に来て初めて触った鉄の剣を何度か振るい、その感触を確かめていた。

(こりやずいぶんとなまくらだね……。愛刀が懐かしい。でも、木剣よりはずいぶんマシか)



久しぶりの柄の感触に、輪廻は震えていた。

中央では訓練生同士が激しく剣を打ち合わせていた。

やがて一方が剣を取り落とししてしまい、その時点で勝負は終了。

負けた方は出て行き、代わりに別の訓練生が入り、勝った方は二戦目に入る。

訓練生の実力は似たり寄ったりで、勝てる方でも三連勝あたりが限界で、勝利が続くたびに息が上がってどんどん動きが鈍くなるのが普通だった。

「いやあ、まいったまいった。惜しいところまで行ったんだがなあ」

ヴィセンテは四連勝に手をかけながらぎりぎりのところで一本を討ち取られていた。

「ヴィセンテ、剣の経験は？」

「剣術ってほど大層なもんは習ってねえが、ガキのときに兄とふざけて打ち合ってたくらいだ。乗馬の方がまだ経験があるぜ」

「その割には様になってたよ」

「殴り合いなら10人だつてぶつ倒せるんだがな」

ヴィセンテは握りこぶしを作った。

女子供の首なら一瞬でへし折ってしまえそうな筋肉である。

「次！ ゴアーシュ・シュトラウス！」

呼ばれてゴアーシュが前に出る。不敵な笑みを浮かべていた。

ゴアーシュが一瞬だけ輪廻の方を見た気がしたが、すぐに相手の方

に向き直っていた。

試合が始まると、互いに剣を掲げて一礼。すぐに構えて動き始める。

二度、三度、軽く剣先を合わせる。

互いに様子を見ている状態。

相手がゴアーシュに深く踏み込んだ。右から左から、剣を叩きつける。

ゴアーシュは冷静にそれを捌ききった。大振りな相手に対して、ゴアーシュは小さく短い動作。

ゴアーシュは相手の剣を払いのけ、流れるような動作で相手の胸先に剣を寸止めした。

相手は剣を落とす。降参の合図である。

それを見ていた訓練生たちがざわめいた。

「さすがだ」

「強ええ……」

「シユトラウスか……」

一礼の後、対戦相手が下がり、別の訓練生が呼び出される。

二戦目が始まったが、ゴアーシュは苦戦することなく再び相手を倒してしまう。

あっという間に6人まで倒してしまった。

輪廻の隣でヴィセンテが唸った。

「さすがだな……。ありゃそうとうやっってるぜ、剣」

「慣れてるよね」

「ラディはまだ呼ばれてないよな？ あいつに勝てるか？」

「どうだろう」

「期待してるぜ。戦友の仇を取ってくれ」

「いやヴィセンテを負かしたやつはもう負けてるし。そもそもゴア  
ーシュだって僕らの戦友でしょ」

軽口を返しながら、輪廻はゴアーシュの剣筋を冷静に分析していた。

（足運びが軽い…まるで羽みたいだね。防御も柔軟で、相手をよく  
見ている。技量はそれなりにあるみたいだ。一対一なら、もう一人  
前かしらね）

しかし、輪廻が呼ばれる前に、ヴァージニアが呼び出された。

ゆっくりと中央に出てくる。表情はいつもの鉄仮面である。

一礼してから二人は構える。ヴァージニアの構えは、両手で正面に  
剣を構える、とてもオーソドックスなものだった。

「フフ…ヴァージニア・キャスカート。君のことはいつも見ていた  
よ」

「……………」

「君に剣の手ほどきをしてあげよう。さあ、いつでもおいで」

ゴアーシュの構えは片手で持った剣を水平に構えたものだ。これは  
侮っているわけではなく、相手の剣をいなし、その隙を突くための  
柔軟な防御の体勢なのだ。

（行く…！）

輪廻がそう思うのと同時に、ヴァージニアが突進した。体重を載せた重い一撃。

ゴアーシュはそれを冷静に対処するが、二の次、三の次と、次々に繰り出される一撃を支えるのに精一杯だ。とても攻撃に転じる隙などない。

ヴァージニアの剣は恐ろしいほどにまっすぐだ。仕掛けもフェイントもない。

ただ相手を切り伏せるための、どれもが致命傷になりうる正統な剣術。

ゴアーシュは小手先の技術でヴァージニアの剣をぎりぎりのところで処理し続けていたが、とうとう限界が来てしまう。

ヴァージニアの剣が、ゴアーシュの剣をたたき落とした。

「そこまで！」

訓練教官が二人を止める。

ゴアーシュは呆然とした表情でヴァージニアを見つめていた。

「すげえ……おい、ラディ今の見たか!？」

「……うん」

輪廻はヴィセンテに頷いた。

憔悴した表情でゴアーシュが戻ってきた。

ヴィセンテはゴアーシュの肩を叩く。

「おい、そう落ち込むな。相手が悪かったんだよ」

「そんな、あり得ない……僕の剣が……馬鹿な……女なんか……。あんな相手がいるなんて、僕は知らないぞ……」

「はっ。油断したのか？」

「違うと思うよ」

ゴアーシユの代わりに輪廻が答える。

手加減したわけではないだろう。単に、相手が規格外だったというだけだ。

(完成度の高い……隙のない剣術だな。ゴアーシユも上手かったけど、しよせんは競技の規則に合わせて組み立てられた剣術……。ヴァージニアのあれは、戦場で敵と切り結ぶための剣だ)

その後も、ヴァージニアは訓練生相手に連勝を重ねた。

その連勝数がゴアーシユを超えたあたりで、輪廻の番がやって来た。

「次！ ラディ・ダールトン」

名前を呼ばれて輪廻はびくりと震えた。

ヴィセンテが輪廻の肩を強く叩いた。輪廻は視線を送って返事をする。

ヴァージニアの正面に立って、その気迫に驚いた。

鋭敏になりすぎた感覚に、輪廻の全身がギリギリと悲鳴を上げている。

作法にのっとり一礼をしてから剣を構える。

輪廻は剣先を地面にだらりと下げる。

それに構わず、ヴァージニアは勇猛に突貫する。

ヴァージニアの剣が届くよりも先に輪廻の剣が走っていた。訓練生のほとんどの目にその剣は鮮明ではない。瞬きの時間が永遠に思え

るほどの高速。

このとき初めてヴァージニアが防御に回った。

(よく見えた)

輪廻はヴァージニアの一撃を、わずかに身を低くして回避する。

(ダメ。これは無用心)

ヴァージニアの剣を跳ね上げた。一步踏み出して切り落とすが、空振り。すでにヴァージニアは後退していた。

しかし輪廻はヴァージニアの動きを完全に見切っている。

(はい、わたしの勝ち)

さらに前進して、すれ違いにヴァージニアの胸を切った。

綺麗な抜き胴。

剣と鎧のぶつかる耳障りな音すら気にならない。

「そこまで!」

訓練教官の声に、ヴァージニアが呆然と剣を落とした。

その日の最後、残っていたのは輪廻だった。

呼び出されたのが最後の方だったから、ヴァージニアほど勝ち星を重ねることはできなかったが。

最初に輪廻が呼び出されていても、最後に中央に立っていたのは輪

廻だっただろう。

「ラディ！　　すげえじゃねえか！　　お前、剣の腕は抜群だな！」

「うわっ、ちよっと！」

ヴィセンテに頭をぐちゃぐしゃと撫でられて輪廻が抗議した。  
輪廻を苦々しい表情で見っていたゴアーシュが話しかけてきた。

「おい平民、その剣は誰に習った？」

「ええと」

輪廻の師匠の名前が出かかったが、この世界の住人に江戸の人間の  
名前を教えるのははばかられた。表向き、輪廻は平民のダールトン  
家の長男なのである。

「自己流」

「嘘をつくな！　　あんな剣……平民ごときが、あんな剣を振るえる  
はずがない！」

「そんなことを言われても。あ！　　ヴァージニア！」

ぶつぶつと言いがかりをつけ続けるゴアーシュはヴィセンテに任せ、  
輪廻は宿舎に戻ろうとしているヴァージニアを呼び止めた。

ヴァージニアは立ち止まり、輪廻に振り返る。

輪廻はヴァージニアに駆け寄った。

「ヴァージニア、すごく強かったよ。うん、訓練生の中では一番」

「……私に何の用？」

輪廻はヴァージニアの声を初めて聞いた。意外なほど普通の少女の

声。

「ええと、ヴァージニアが強かったって、言いたくて」

「でも、あなたは私に勝った」

「ただついてただけだよ」

「ふざけないで」

ヴァージニアにピシヤリと言り返された。

輪廻は不用意なことを口走ったと思った。輪廻はたとえどんなに不運だったとしてもヴァージニアを剣で殺せる自信があった。

ヴァージニアも、輪廻と自分との実力の差をしっかりと認識している。

「……悪い」

「認めない。絶対に認めない。私は、負けるわけにはいかないの」

ぎろりと輪廻を睨みつけて、ヴァージニアは宿舎に入ってしまった。



## 2・訓練開始(後書き)

ヴァージニア「か、勘違いしないでよね！ 本当に強いのはわたしの方なんだからっ！」

### 3・真夜中の決闘

それからもしばらく剣の訓練が続いたが、剣を持った勝負では輪廻は一度も負けなかった。

剣を持った輪廻は生き生きとしていた。

仲間と共に江戸中を駆けまわった記憶が蘇る。

面白くないのは他の訓練生である。

特にゴアーシユは、他の訓練生の注目をすべて輪廻がさらってしまったため、乱戦形式の訓練などでは執拗に輪廻を狙っていた。

しかし、乱戦形式の、言い換えれば何でもありの戦場こそが輪廻がもっとも輝く舞台であった。

馬鹿正直に真正面から突つかかるゴアーシユを、輪廻はろくに見ることもなく、ことのついでのように切り伏せてしまう。

ゴアーシユの挑戦は連日続いていたが、輪廻は特に苦戦することもなくそのすべてを退けていた。

「おい」

訓練の終わったある日、ゴアーシユが輪廻を呼び止めた。喧嘩でも始めるのではないかと、ヴィセンテがさりげなく輪廻の横に回る。輪廻はこっそりと目で合図を送り押しとどめた。

「君、ラディと言ったね」

「ああ」

「姓は何というんだい？」

「ダールトン」

「ラディ・ダールトン……。覚えておこう、その名前」

ゴアーシユは爽やかな顔で言つて、輪廻の肩を叩いて去つて行つた。

「何だつたんだらう」

「ありゃ、お前の実力を認めるつてことなんじゃないのか？」

「ああ、なるほど」

「あのプライドの高い男が認めたつてことだぜ。こりゃすごいことだ。けど、お前を認めてるのはあいつだけじゃないぜ。訓練生はみんなお前に一目おいてる。もちろん俺もな」

「僕だつてヴィセンテを尊敬してるよ」

「よせよせ。褒めたつて何も出ないぞ」

口ではそう言つていたが、ヴィセンテは照れくさそうに輪廻から顔を背けた。

しかし、輪廻に対抗心を燃やしていたのはゴアーシユだけではない。最初の敗北以来、ヴァージニアも訓練中は輪廻に対して敵意を剥き出しにして迫つてきた。

一対一で勝ち抜き形式の、剣の訓練である。

輪廻とヴァージニアの、どちらが先に呼び出されたとしても、二人は必ず最後までに立ち会うことになった。

「フツ　　セイッ！」

ヴァージニアが斬り込む。

輪廻が見ているのは彼女の足運びだった。移動を読んで、少し上半身を下げれば、ヴァージニアの剣は容易に空ぶる。

ヴァージニアの切り返し。

低い軌道の、胴体を払う攻撃。

輪廻は軸足で体を回転させるように移動し、ヴァージニアの側面に回りこんだ。

「くっ！」

輪廻の攻撃を予見し、ヴァージニアは構えを捨てて飛び退く。

しかし輪廻の高速の剣は後ろに下がったヴァージニアを正確に打ち抜いた。

「そこまで！」

ヴァージニアは悔しさに唇を噛み締めながら退場した。

その日も、輪廻は最後まで勝ち抜き続けた。

訓練生の朝は早い。

夜明け過ぎに当番の者が鐘を鳴らして宿舎の訓練生をたたき起こす。食事当番はそれよりも先に起きて朝食の準備をする。

屋根だけが張られたテントの下で、40人ほどの訓練生が朝食を食べる。

パンと野菜のスープだけの質素な食事であるが、昼食には肉も出る。

輪廻は朝食をすぐに食べ終わり、水で顔を洗いうがいをしていた。

朝の森は騒がしい。虫と鳥の鳴き声がうるさく耳に入る。

宿舎からヴァージニアが出てきたのを見て、輪廻は声をかけた。

「おはよう……」

「……………」

「今日は雨が降りそうだね。空模様がすごく怪しいし」

「……………」

「ヴァージニア？」

「わたしに何か用？」

「え？ 別に、用があるわけじゃないけど…」

輪廻が言葉を詰まらせているうちに、ヴァージニアは立ち去ってしまった。

その様子を見ていたヴィセンテが、やってきて輪廻の肩に腕を回した。

「相変わらずだな。ま、女を落とすには根気が一番だ。もう話しかけないでくれと言われてからが勝負だぜ」

「まさか。別に僕はヴァージニアを落としたいわけじゃない」

「じゃあ何で話しかけてるんだ？ 好きでもなきゃあ、あの態度は我慢できないだろう、普通」

「でも、仲間だし。ヴァージニアと剣で打ち合うのは楽しい」

「そりやお前がいつも勝ってるからだろ。……まあ、仲良くなるのも、落とすのと同じくらい難しいだろうけどな」

「ヴィセンテは詳しいの？ その、女の子を落とす方法」

「いや？ そういふのはゴアージュが専門だろう。自慢じゃないが、俺は女にモテたことがない。いつも振られてばかりだよ」

「そうなの？ たぶん、ヴィセンテのまわりの女は見る目がなかったんだね」

「おいおい、やめてくれ、気色悪い言い方は」

輪廻は慌てて口を閉ざした。少し油断すると、すぐに女の考え方をしてしまう。

しかしヴィセンテは気にした風でもなく話を続けた。

「俺は剣術はできないし、女にもモテないし、頭だつて良くない。しかし、世界にはいくらでも剣の上手い奴がいて、上を見上げればきりがない。せめて、戦場で生き残るくらいの剣術と、伴侶を捕まえられるくらいモテればそれで十分だろう」

「頭の良さは？」

「それは次の課題だな。けど今は、とりあえずお前に剣術を教わることにする」

「僕に？ それよりもディオル教官に特訓してもらった方がいいんじゃないかな」

「……お前さ、俺の勘だけど、訓練教官より強いだろう」

輪廻の心臓がドキリと跳ねた。

「そんなことは、ないと思うけど」

「嘘つけ。お前一度も本気で戦ってないだろ。俺は剣術はできないが喧嘩の経験なら玄人だ。必死になってるやつと、適当に手を抜いてるやつの違いくらい分かる」

「……」

「おいおい、別に責めてるわけじゃないぜ。お前のは手を抜いてるというよりは、相手に合わせてるって感じだな。そういうわけで、俺はお前に剣を教わるのが一番だと思う」

「……教えるのは、苦手なんだけどね」

「別に教える必要はないさ。俺が勝手にお前から学び取る」

「ほんと、ヴィセンテのまわりにいた女は、みんな揃いも揃って見る目がない」

「よせて。お前なあ、たまに冗談じゃなく言ってるみたいに聞こえてヤバいぜ」

ヴィセンテが半笑いで言った。

二人のそばを通りかかった訓練生たちが挨拶をした。

ヴィセンテは片手を挙げて大きな声でそれに答える。

ゴアーシユも通りかかったが、以前とは違い、無愛想ではあるがゴアーシユの方から挨拶をしていた。

「……みんなお前に一目置いてる。お前は間違いなくエースだよ」

そう言われると、輪廻は戸惑った。

その日の訓練の終わり。

良い汗をかいて満足している輪廻の横を、ヴァージニアが通りかかった。

何か話しかけようと考えていた輪廻だったが、ヴァージニアの方から話しかけられた。

「……ラディ・ダールトン。お前と決着をつけたい」

「え？」

「深夜、剣を持って、ここに一人で来い」

「承知」

ヴァージニアとて、ただの少女ではない。

その声に滲んでいた本気に、輪廻も本気の声で返した。

すれ違いに交わした、ごく短い会話である。

顔を向きあわせることもなく、互いに知らない顔をして別れた。

「……ラディ？ どうした？」  
「大丈夫だ」

輪廻は短く答える。

短く交わしたヴァージニアとの会話が輪廻の頭にこびりついていた。精神の高揚を顔に出さないのは難儀だった。

真夜中、輪廻は教官の目を盗み、一人で宿舎を抜け出す。倉庫から剣を一本拝借した。鎧は、もともと輪廻の趣味ではないので、身軽なままである。

昼間は大勢の訓練生がいたが、今そこにいたのはヴァージニアだけだった。

彼女も剣を携えている。

祈りを捧げているかのように、ヴァージニアは神聖な雰囲気を感じていた。

昼間とは違い、真夜中の森は静かである。

輪廻の瞳孔が拡大し、月明かりだけでヴァージニアの姿を細部まで捉えていた。

輪廻が前に立つと、ヴァージニアはまっすぐに見つめ返す。

「ルールは？」

「ない」

輪廻の問い掛けに、ヴァージニアは短く答える。



それで十分であった。

ヴァージニアが動く。

（申し分ない速度だ）

輪廻がこれまで見てきたヴァージニアの中で、今がもっとも尖っていた。

あと半歩でヴァージニアの剣の間合い。

すでに剣を振るう体勢に入っている。

距離の猶予がゼロになったと同時に、ヴァージニアの暴力が輪廻を切り捨てるだろう。

そのゼロの隙間に、輪廻は強引に割り込んだ。

「！」

ヴァージニアは驚愕する。

構えてすらいなかった輪廻の剣が、一瞬の後に、切っ先をヴァージニアの喉元に向けていた。

喉元に突き立てる寸前で、止めていた。

ヴァージニアの剣は、空ぶるところか、切り下ろす、その遙か手前の段階である。

斬り合いにすらなっていない。それ以前の問題だ。ヴァージニアは、ラディにとって、自分はただ的にしかなくていないということを理解する。

これが、居合の達人、緒神輪廻の実力であった。

「……………」  
「……………」

暗闇の中で二人はしばらく見つめ合っていた。  
交わす言葉もなく。

しかし、様々なものが交差する。

やがて、ヴァージニアがふっと頬を緩める。

「……………参りました」

はっきりと、清々しい表情で、ヴァージニアは敗北を認めたのである。

訓練生の朝は早い。

今朝もパンと野菜のスープだけの質素な食事であった。今日も、昼食には肉が出る。

輪廻が宿舎から出てきたのを見て、ヴァージニアは声をかけた。

「おはよう、ラディ」

「うん。おはよう」

輪廻は寝ぼけ眼で短く返事をした。ヴァージニアは入れ違いに宿舎に入る。

その様子を見て、ヴィセンテが輪廻に駆け寄った。

「おい。おい！ 寝ぼけてる場合か」

「何だよ、朝から騒々しい」

「一体どういうことだ。何があった。何でそんなに親しくなってるんだお前らは!？」

「別に。僕とヴァージニアは互いに実力を認め合った戦友だからね。朝の挨拶くらいは普通にするよ」

「おいおい何だその言い回しは。最近のラディはずいぶん口が上手くなったな」

「口の上手さはヴィセンテに学んだんだよ」

「いやそんなことはどうでもいい。お前たち、一体どういう関係なんだ!」

「どつって、普通の」

ヴァージニアが宿舎から出てきた。

輪廻に近づく。

「ラディ。今日の夜も剣を教えてほしい」

「いいよ。あとで教官に言って、演習場の使用許可をもらおう」

「それはわたしの方から話しておく」

「うん」

「ありがとう」

礼を言つて、ヴァージニアは別れた。

そのやりとりを、ぽかーんと馬鹿みたいに口を開けて見ていたヴィセンテ。

「お、お、お前たち、一体どういう関係なんだ!？」

「ええと、戦友」

輪廻は短く答える。



### 3・真夜中の決闘（後書き）

引き続き応援感想叱咤激励要望批評いずれも募集中です。  
親友に話しかけるようにお気軽にどうぞ。

#### 4・前世との遭遇

基本的に王国軍では兵士たちの自主的な訓練は歓迎されている。夕食が終わってから就寝までの僅かな時間が、輪廻たちの「特訓」の時間である。

「はあっ!?!」

ヴァージニアの剣を輪廻は片手で捌いている。薄暗い森に剣のぶつかる音がリズムよく響く。

「せいっ!」

輪廻がわざと作った隙に、ヴァージニアは真正直に切り込んだ。輪廻は姿勢を下げて、ヴァージニアの横に切った剣をくぐる。

「はい」

輪廻はヴァージニアの目の前でピタリと止まる。ヴァージニアは慌てて下がった。これで仕切りなおし。こんな訓練を二人はずっと続けていた。

「おい。そろそろ代わってくれ」

ヴィセンテが不満の声をあげる。輪廻がヴァージニアに構っている間はやることがないのでずっと腕立て伏せをしていた。

「ちょっと待って、今終わらせ」

のんきにヴィセンテの方を向いた輪廻だったが、ヴァージニアはその瞬間に斬り込む。

輪廻はヴァージニアを見もせず、素早く身をかわすとヴァージニアの背後に回った。

それを追いかけて、すぐにヴァージニアが横に剣を振った。

それが輪廻に届く前に、ヴァージニアの剣は輪廻に叩き落される。

「……………参った。どうしてもお前から一本が取れない」

「ヴァージニアはまっすぐすぎるんだよ。ま、それが長所でもあるんだけどね」

「まっすぐ……」

「わたしがわざと隙を作ったとき、正直にそこを突いてきたでしょう？ あれ、いつどこに斬り込んでくるかが分かるから、避けるのがすごく簡単なの」

「……………わたし？」

「違った。僕でした。訂正」

「それで、私はどうすればいい？」

「うん。まあ、基本的には今のままでいいと思うよ。武術は王道が一番強いからね。このまままっすぐに進めば、小細工なんて粉碎できるようになると思う。ただ、王道じゃない剣がどういうものなのかは知っておいた方がいいかも」

「……………お前の剣は、王道ではないのか？」

「まあ、かなり自分でねじ曲げてるところがあるからね。それに

」

事情が事情である。

大勢の人間を相手に立ちまわることが多かった輪廻には、ヴァージニアのような剣は向いていなかったのである。

ヴィセンテが歩いてきて、輪廻とヴァージニアの間に立つ。

「ほらほら。いちゃついてないで変われ」

「だ、誰がいちゃつくなど　ば、馬鹿なことを」

「そうだよ。そういうのを持ち込むのは良くないよ」

「……………」

「え、何？　どうしたのヴァージニア？」

「いや、別に。気にするな。指導ありがとう」

ヴァージニアは礼を言って、ヴィセンテと交代する。

さんざん待たされたヴィセンテはやる気満々である。

「オラオラオラ！　行くぜ！」

「ヴィセンテはまず、基本的な足捌きからやった方がいいよ。力任せに振り回すだけの剣は　」

ブン、と凄まじい風圧をまとった剣が、輪廻の鼻先をかすめた。

ヴィセンテが外したのではない。攻撃を見切った輪廻が、半身を少しだけ下げたのである。

「ほら、避けるのなんて簡単なんだよ。だからヴィセンテは、まず動きの精度を上げるのを　」

「セイッ！」

(聞いてないし)

輪廻はヴィセンテの剣をかわし続け、ときおりヴィセンテの隙に一撃を差し込んでわざと防御に回らせたりした。



その日の「自主訓練」が終わった後、輪廻は息も上がり、額に汗を浮かべていたが、ヴィセンテはそれ以上に疲労していた。

「使え」

ヴァージニアが輪廻とヴィセンテにタオルを手渡す。

輪廻は礼を言ってお受け取った。ヴィセンテは礼を言うのもしんどいようだ。

やがて野営地での訓練が終わわり、訓練生たちは王都に戻った。

王都に戻っても訓練が終わったわけではない。

むしろこれから本番とも言える。

また、これまではひとつの部屋で寝泊まりをしていた訓練生たちが、ここに至り個室を与えられた。

王都に戻ってからも、輪廻とヴァージニアの特訓は続いていた。

「はっ！ せいっ！ やっ！」

輪廻とヴァージニアが激しく打ち合う。

ヴァージニアの上達は早かった。

以前のように、輪廻に一方的に切り捨てられることは少なくなった。

「うん。今日はここまでにしようか」

輪廻は剣を下げる。

ヴァージニアが、呼吸を整えながら頷いた。

「剣筋が前よりも見えにくくなった。この調子だと、すぐに抜かれそうだね」

「まさか。私では到底お前に及びそうにない」

ヴァージニアは首を振る。

輪廻は剣を鞘に納め、防具を外した。

「以前から聞きたかった。お前は、どうしてそんなに強い？」

「…強くなる必要があったから」

「強くなる必要があって、強くなれるのは幸運だ」

「そうなのかな」

「ああ。…大抵は、それを乗り越える前に、終わる」

輪廻自身は、自分の剣術を、自慢に思うことも、逆に負い目を感じることもない。

剣術はただの技術だというのが輪廻の見解である。

ヴァージニアはふっと微笑んだ。

金色の髪を片手でかき上げる。

「お前は自分のことをあまり語らないな」

「ヴァージニアだって」

「…そうだな。私には、自慢できるような過去がないからだろうな」

「僕も同じだよ」

（まあ正確には、まとも信じてもらえそうな身の上話がないってことなんだけど）

「ところで、明日はどうする？」

「ああ、そういえば」

明日からしばらく休暇である。

訓練生によつては帰郷する人間もいると聞くが、輪廻は王都で過ごすつもりでいる。

ラディ・ダールトンの両親には未だに愛着を持たずにいたし、休日を楽しく過ごすような趣味も持ち合わせていない。

ヴァージニアはそうかと頷いた。

「お前さえよければ、明日も剣の指導を、と思ったのだが」

「熱心だね。でもせっかくの休暇なんだから、家に帰ればいいのに」

「…そうだな。そうするのが、いいのだろうな」

ヴァージニアは含みをもたせた言い方をした。

しばらく何か考えていたようだが、やがて輪廻に礼を言つといつものように別れる。

「それじゃあ俺は行くぜ」

「行ってらっしゃい」

「本当に良いのか？ 娼館はいいぞ？ 金次第でどんな女も抱ける最高にフェエな場所だぞ？」

「いいよ、興味ないし」

「それもそうだな。娼館には男はいないし」

「殴るよ？」

「冗談。それじゃあ行ってくるぜ。お前も、ずっと引きこもってちや体に悪いぜ？ 街に出て女の一人や二人引っ掛けてこい」

ヴィセンテは余計な一言を残して輪廻の部屋を出ていった。

今日は休日であるが、輪廻は普段通りの時間に起床していた。部屋で簡単に体を動かしていると、すぐにドアがノックされる。

「……ラデイ」

入ってきたのはヴァージニアだった。

訓練の時に見た地味な服ではなく、女性の貴族が着る立派な服である。スカートを履いたヴァージニアは想像以上に様になっている。美しさにしばらく見とれていた。

「……ラデイ、そんなに見るな。は、恥ずかしい」

輪廻が黙っていると、ヴァージニアが顔を赤くして抗議する。

（う、美しい……負けた……いやいや、今のわたしは男で、この子と張り合っても仕方ないんだけど、でも、この年で、そ、その色気とか、む、胸とか、う、畜生。畜生！）

「……あの。この格好、何かおかしいか？」

「いや。服は問題ないよ。綺麗だと思う」

「き、綺麗………」

ヴァージニアはさっと顔を背けた。輪廻は敗北感に打ちひしがれている。

「もとい。それで、ヴァージニア。どうしたの？ まさか、その服を僕に見せに来たとか？」

「うん。あ、いや違う。そうではなくてだな……お前、もしかして休みの日は行く場所がないのか？」

「今のところ予定はないけど」

「そうか……。もしよかつたら、その、うちに来ないか？」

「うちって、キャスカートの？」

「ああ。その、屋敷はそんなに遠くないし、お前が来てくれたら、ちゃんともてなしはする。悪い思いはしないと思う」

「うーん。悪いけど辞退するよ。僕が行ったら邪魔だろうし、それに僕は平民だし」

「いや、私は身分など気にしない」

「でも、いきなり家に行くのは、ちょっと気がひけるよ」

「……。そうか。いや、無理にとは言わん。変なことを言ってますまなかつた」

「今から行くの？」

「迎えの馬車が来る」

「行ってらっしゃい」

ヴァージニアは短く返事をして輪廻の部屋を出た。

昼を過ぎてから輪廻は街に出ることにした。  
ずっと城にこもっているのは気が滅入る。

輪廻が王都をしっかりと観光するのは今日が初めてである。  
輪廻の故郷である北の街と比べればずいぶんと賑やかだが、しかし江戸と比べればまだまだ閑散としている印象があった。改めて思い

出すと、江戸のせせこましさが懐かしく感じる輪廻である。

輪廻が王の城を眺めながら歩いていると、前方から走ってきた少女に正面からぶつかった。

「きゃっ」

二人して悲鳴を上げる。

と、尻餅を付きそうになった少女の手を輪廻がつかんだ。

二人はじつと見つめ合う。

桃色の長い髪の少女だった。緩やかなカーブを描くさらさらの髪が肩に流れている。白い大きな帽子をかぶっていた。

「あの、いつまで握ってるんですか……？」

「ああ、それは悪かった」

輪廻は手を離す。

少女は少し頬を染めて輪廻をじつと見ている。  
ふっ、と少女は笑みを浮かべた。

「何か可笑しかった？」

「す、すみません。いえ、今お兄さん、女の子みたいな声を出した  
ものですから、思わず」

「ああ…癖なんだ」

「ぶつかってすみませんでした。急いでいたもので」

「こちらこそ、ちゃんと前を見ていなかったから」

そのとき、人混みの向こうから何人かがばたばたと輪廻たちの方に走ってくるのが見えた。

ひっ、と少女の顔がひきつる。

「あの！ お城へはどうやって行けばいいのでしょうか？」

「お城って、王城？ ダメだよ、勝手に中には入れない」

「わたし、どうしてもお城に行かなきゃいけないんです！」

「待て！」

二人は一瞬で男たちに囲まれる。輪廻は全員が武器を持っているのを確認した。

輪廻に緊張が走る。

無意識のうちに手が刀を探していて、今が丸腰であることを思い出した。

「探したぜ。さあ、俺たちと来てもらおう」

「嫌です！ あ、あなたたち、こんなことをしてただで済むと思っているの!？」

「さて……どうだろうね」

男の一人がとぼけて言った。

顔に、波状の赤い刺青を入れた細身の男だ。腰に巻いた帯の左右に三本の刀を差している。さらに背中に交差するように二本。

(あれは………日本刀!?)

輪廻の目は男の武器に釘付けになった。

男が身につけている武器は、装飾や細部の構造は少し怪しいが、形状は明らかに日本刀を模している。

「おい、その男」

赤刺青が輪廻を指さした。

「俺たちは……………まあ、これからこの女を無理やり連れて行く。で、問題はお前だ。俺たちの顔は忘れて、すぐにどこかに行ってしまう。俺たちも面倒は御免だ」

「……………」

輪廻が答えずにいると、少女が叫ぶ。

「答えなさい！ あなたたちは何者なのです!?!」

「秘密。言ったら俺たちが殺されちゃう」

ひっひっひ、と男は笑っている。

少女の手が輪廻の服を握った。震えている。

「……………」

相手は五人。

赤刺青の得体の知れなさが輪廻には不満だった。

「おい、さっきから黙ってるが、お前」

男が言いかけたとき、輪廻は少女の手を握って、赤刺青とは逆の方に走り出した。

正面にいた男が懐のナイフを取り出す前にその手を蹴り上げる。悶絶した男のそばをすり抜けて、二人は走った。

「待てやアアアアアッ！」



赤刺青の怒声。

最も輪廻から離れていた彼が、もっとも先に動き、輪廻たちに肉薄していた。

輪廻は後ろを振り返らずに走る。

人混みの中に入り、裏路地をデタラメに曲がる。

「こつちに！」

路地裏から商店の裏口を開け、勝手に中に入って表に抜けた。大通りでしばらく身を潜めていたが、追手の姿は見えない。

「とりあえず安心ですね」

息の上だった少女が輪廻に言う。  
かなり際どいところだった、と輪廻は思った。

「ところで、君、名前は？」

「あの、わたしの名前は、シャ　シャロと呼んでください。あの、あなたの名前は？」

「緒神輪廻」

つい本当の名前を名乗った。

「リンネ…」と、少女は反芻するようにつぶやいていた。

「シャロ、あいつらは一体何だ？　あの、剣を五本差していたやつは？」

「わかりません。わたしも、今日初めて襲われたんです」

「君は一体……？」

「すみません。答えられないんです」

シャロはぺこりと頭を下げた謝った。

（日本刀……あの男も、わたしと同じで江戸の人間の生まれ変わりなのかね？）

輪廻の手に、存在しない日本刀の感触が蘇った。

#### 4・前世との遭遇（後書き）

「シャロ」吸いましてー

## 5・一日だけの逃避行

輪廻たちはまっすぐに王城へ向かうことができなかった。一度向かおうとしたところで、通りに赤刺青の姿を見つけ、慌てて引き返してきたのである。

「駄目だ……正面から城に向かうのは危ない。遠回りするしかない。シャロ、街には詳しい？」

「すみません。わたし、街に来たのは初めてなんです」

「僕もだ」

「リンネさんは、何をしている方なんですか？」

「僕は……王国陸軍兵士」

まあ、とシャロが目を大きく見開く。

シャロはしばらくじっと輪廻のことを見る。

「まあ、まだ訓練中なんだけど」

「そうでしたか。さぞ名のある家の方なんでしょうね」

「どうしてそう思うのかな？」

「どうしてって、その……リンネさんはすごく強いですし、それに親切です」

「僕はただの平民だよ」

(江戸にいたときも、身分はただの町人だった)

「すみません。わたしが間違っていました。強さに平民や貴族も関係ありませんよね」

「……シャロは良い子だね」

「そうですね？ えへへ」

シャロは子供っぽく笑う。

輪廻にはシャロの子どもっぽさがとても新鮮に感じられた。

「…リンネさんは、どうして軍人になろうと思ったんですか？」

「僕は平民だからね。偉くなるためには軍に入るのが一番てつとり早いんだ」

「でも軍隊に入ったら、戦ったりしなきゃいけないんでしょ？」

「そうだよ。でも僕は、人を殺しても平気だから」

シャロの足が止まる。

輪廻をじっと見ている。

「リンネさんが、人を？」

「うん。まあその、この国に来るずっと前だけど」

「どうして？」

「お金を奪うためだよ」

「そんな……嘘です！ リンネさんがそんなことするはずがないです！」

「本当だよ。僕は　わたしは、お金のために人を殺したことがある。何人もね。わたしを捕まえようとした岡っ引き　じゃないや、ええと、兵士を殺したときもある」

「どうしてそんなことができるんです？　お金のために、殺すなんて……」

「シャロは、お金で困ったことがあるのかい？」

「……ありません」

「まあ、言い訳はしないよ。わたしの家族には、殺してまで生きるくらいならと潔く首をくくった奴もいるからね……。殺すくらいなら死ぬのが、本当は正しいのかもしれないよ」

「そんな、ことは……」

シャロが涙声になっていた。  
輪廻は慌てて声を明るくする。

「別にシャロが悪いわけじゃないよ。それに、殺したっていうのもずっと昔の話だし。今はこうして、ちゃんと真面目にやってるんだから」

「そうですか…」

「あ！ シャロ、お腹空かない？ 何か買ってきてあげよ」

輪廻は近くの屋台に走って行き、二人分の食べ物を買った。

香ばしい肉を香草で包んだものが木の串に刺さっている。

平民の住んでいる地区ではこのような食べ物売る屋台を見かけることが多い。

屋台で買い物をしている間、輪廻は、自分が戻ったとき、そこにはシャロはもういないのではないかと思った。

しかし輪廻が元の場所に戻ると、そこにはさっきと同じように、輪廻の帰りを待つシャロの姿があった。

シャロに串肉を渡す。

「あの、お金……」

「必要ないよ。シャロに嫌な話を聞かせちゃったお詫び」

「でも聞いたのはわたしですし」

「そう言わないで。給料の使い道が見つからなくて困ってたんだ」

いただきます、と心の中で唱えて輪廻は肉を頬張る。

シャロは輪廻の食べる姿をまじまじと見て、恐る恐る肉に噛み付いた。

「おいしい。すごくおいしいです!」

「シヤロは、こういうのを食べるのは初めて?」

「はい。街に来るのが初めてなので」

「ああ、そういえばそうだった……」

「リンネさんは?」

「前に住んでたところで、似たようなのは食べたことがある」

はふはふと言いながら、二人はすぐに串肉を食べ終わる。

食事を終えてから、また歩き始める。

「リンネさん、年はいくつですか?」

「14だけど」

「わたしと同じ年です」

「そうなんだ」

(わたしはてつきり、もっと年下なのかと思った……。ヴァージニアとは、その…えらい違いだね)

主に胸が。あと身長。

とはもちろん言わないが。

「リンネさんてすごく大人っぽいです」

「そうかな」

(まあこっちで生きた時間も合わせれば、あんたの年の軽く二倍以上は生きてるんだけどね)

「わたしまだ子供っぽくて……早く大人になりたいです」

「大人になって何をしたいの?」

「この国を良くします!」

シャロは胸を張って答えた。  
吹き出した輪廻を見て頬をふくらませる。

「……笑うなんてひどいですう」

「ごめんごめん。あまりにも突飛なことを言うものだから。……そうだね、シャロがこの国を良くするなら、僕がこの国を守らないとね」

「はい! 約束ですよ!」

シャロは満面の笑みを浮かべる。

「もしかしてシャロって、すごい大貴族の人だったりする?」

「あ……すみません。わたしのことは秘密なんです」

「いや、無理に聞こうとは思わないよ。それにしても……あの刺青の男は、本当に知らないんだね?」

「はい。わたしは……その、とある事情で街に来ていたのですが、突然あの方たちに襲われたのです。でも護衛の方たちが守ってくれて、わたし一人で逃げ出すことができました」

(護衛付きで街に来てる……それでも襲ってくるってことは、奴らは一筋縄じゃいかないようだね。少なくとも、武器をちらつかせて大人しく帰るような連中じゃない)

「襲われる心当たりは?」

「ありません。……あの、リンネさんは刺青の人を知っているんですか?」

「いや、刺青男自体は知らないんだが、あいつの持ってた武器が気になる」



「あの細い剣ですか？」

「あれが、僕の遠い故郷の武器に似ているんで、気になったんだ。もしかしたら同じところから来たやつなのかなって」

「あれは、突くものなのですか？」

「突くこともできるけど、切ることもできる。あれの刀身が僕の知ってるものなら、すごくよく切れるはずだよ。でも剣自体はすごく脆いから、使い方が悪いとすぐに折れる」

「リンネさんもその剣を持っているんですか？」

「僕は……武器は全部故郷に置いてきた」

シャロは、輪廻の言葉の端ににじみ出る哀しみに気がついていった。

シャロは大人しく輪廻の後をついて来ているように見えたが、ところどころで街に興味深げな視線を送っている。

輪廻はその度に立ち止まりシャロにさりげなく街を紹介する。

そのことに気づいたシャロは決まって先を急ぐように言うが、輪廻が無理やり寄り道させると、シャロは目を輝かせて輪廻の説明に聞き入っていた。

そうして王都をぐるりと半周回ったとき、

突然輪廻が、歩きながらシャロの手を握った。

「リ、リンネさん!？」

シャロが上ずった声を上げる。

輪廻がちらりと横目で見るとシャロの頬が桜色に染まっている。

輪廻は小声で話しかける。

「まっすぐ前を見て歩いて。後ろに刺青男がいる」

「え!?!」

「向こうは、まだこっちが気づいてないと思ってる。だからまだ後をつけているだけだ。僕がカウントするから、ゼロになったら一気に走るんだ。この道をまっすぐ走れば、多分城につく」

「でも。リンネさんは?」

「5、4」

輪廻がカウントを始める。

そのとき、背後の気配が動いたのを感じた。

「シューッ!」

輪廻はシャロの背中を前に押した。

それと同時に、踵を返して赤刺青の方に突進する。

赤刺青は両手を交差させて二本の刀を腰の鞘から抜き放った。

両側から迫る剣先は輪廻の首を狙っている。

輪廻は刃が首を刎ねる直前に身を低く沈めた。

赤刺青の目には輪廻の体が目の前で突然消えたように写っている。

直後、赤刺青は顎に強烈な一撃を受けて後ろにぶっ倒れた。

「ゼロ!」

輪廻が大声で叫んだときには、シャロはすでに走り始めていた。

赤刺青とは別の男が輪廻に迫る。すでに取り囲まれていた。

相手はナイフを取り出している。

輪廻は無用心に突き出されたナイフの、その手首をつかんだ。

男の顔に掌をぶつける。

ひるんだ隙にナイフを奪い、反対側の男の腹を横に切った。

男の腹が切り裂かれ、中から血と臓物が飛び出す。

輪廻はその匂いに懐かしさを覚える。

なるほど、世界は違ってても、人の中身は同じか。

別の男が長剣で輪廻に斬りかかる。

男が近づく前に、輪廻はナイフを投げて男の胸に刺した。

男はうめき声を漏らして数歩後ろに下がったが、すぐに力尽きて動かなくなる。

輪廻があっという間に二人の男を殺したのを見て、無事な男たちも怖気付いて逃げ出した。

「ふう……際どいところだった」

殴り倒した赤刺青に輪廻が視線を戻す。

それとほぼ同時に、切り上げる刀の切っ先が輪廻を襲った。

「いー」

すんでのところで後ろに下がる。頬がバツクリと切られて血が垂れる。

赤刺青はさらに刀を振った。

まともに相手はできないと、輪廻はさらに勢い良く後ろに下がる。

二人は距離をあけてにらみ合う。  
突然の刃傷沙汰に、市民たちがざわついていた。

「……手前え、一体誰だ？」

「緒神輪廻」

輪廻が名前を名乗ると、男の表情が固まった。  
しばらく輪廻を見つめていたが、やがて大声で笑い始める。

「そうか！ お前も落ちてきたクチか！ 八八八八八！ まさか俺以外にもいるとは思わなかったぜ！」

「ということは、あんたも……」

「ああ。あんたも越後か？」

「わたしは江戸よ」

「ああ？ 手前、女か？」

「女を切れなかったのが悔しい？」

赤刺青の顔が殺意で歪んだ。

輪廻は、自分が無意識のうちに後ろに下がっているのに気がついた。

（まずい……こいつ、強い！ わたしが最高の状態でも五分つてところだろうが、素手じゃあ天地がひっくり返ったって勝てっこない）

しかし赤刺青は、やがて殺気を納めて、とたんに機嫌の良さそうな表情に戻った。

「俺の名前は九条愛型<sup>くじょうあがた</sup>。次はあんたの腸<sup>はらわた</sup>を見せてくれ」

ニヤリと不気味に笑うと、九条は人混みの中に飛び込んで姿を消した。

輪廻はポロポロの状態で宿舎に戻った。

九条と別れてから、憲兵に追われたり人目を忍んだりで、やっと宿舎に戻ったときには真夜中で門が閉じており、見張りの目を盗んで何とか宿舎に戻ることに成功したのだ。

手についた血を洗い、そのままベッドの上に倒れて力尽きる。

シャロとはあそこで別れたきりだった。

結局彼女が何者だったのか、彼女を追いかけていた九条たちが何者なのかは分からず仕舞いである。

「無事に城まで辿りつけたのかな」

王国軍の兵舎は王城の中にある。

宿舎に戻るとき、輪廻はそれとなくあたりを調べてみたが、特に変わった様子はなかった。

「それにしても……九条愛型か」

九条の刀さばきを思い出した。

(しかもあいつ、まだ手の内を全部見せたわけじゃない)

この世界には自分や九条のような異世界からの転生者がまだいるのだろうか、輪廻はまだ見ぬ同胞たちのことを思った。



## 5・一日だけの逃避行（後書き）

九条「当カジノは誰でもウエルカム」

## 6・特別な配慮

輪廻にとっては長い休暇が終わり、訓練が再開する。  
そのころには頬の傷もすっかり塞がっていた。

「なあ教えるよ……その傷一体どうしたんだよ」

「だから訓練で怪我をしたって言うてるじゃん」

「馬鹿言え。お前に剣で傷を付けられるやつが訓練生にいるかよ」

ヴィセンテが輪廻に疑いの目を向ける。

輪廻は笑ってごまかす。

ヴィセンテがこれみよがしにため息をついた。

宿舎の前で話している二人の元にゴアーシュが近づいてきた。

「やあ。君たちは休暇を有意義に過ごせたかい？」

「まあな」

「人生は無為だよ」

「ふっ……それは結構。僕はこの休みは南の海まで行ってたのさ。」

軌道車両に乗ってね」

「軌道車両って…あれか？ 鉄道のことか？ あんなもん、乗れるのか！？」

ヴィセンテが驚いた声を上げる。

輪廻も少なからず驚いていた。

その反応を楽しんで、ゴアーシュは満足気に頷く。

「そりゃ、平民はもちろん、貴族だって無理だろうね。乗れるのは王女殿下に顔が利くごく一部の名門貴族だけだよ。もちろんシュト



ラウス家は乗ることができない。いやあ快適だねえ、鉄道つてやつは南の海岸までひとつ走りだからねえ」

「ありや軍事機密だろ？ んな贅沢に使っていいのか？」

「優雅さを失った文明に一体何の価値があるというんだい？ 東部クラミア

のヴィセンテ」

「はっ… そんなことばかりしてつと、いつか帝国に線路ごと奪われるぜ」

「そうならないように君たちが戦いたまえ」

と、ゴアーシユは他人ごとのように輪廻たちに言った。

それもそのはずで、一般的にこの国ではゴアーシユのような名門貴族の人間が前線で剣を持って戦うことはまずない。

軍では建前上、平民も貴族もみな平等であるし、実際訓練期間は平等に扱われる。

しかし訓練期間が終わり実戦に配備されると、力のある貴族、名のある貴族の人事には特別な「配慮」がなされ、司令官待遇、もしくは戦死の危険の少ない内地の警備任務か、悪くても前線の補給部隊に回されるのが普通である。

後方とはいえ実際に軍で活躍するのはまだ良い方で、貴族の多くは訓練期間を終えた時点で貴族ノブレス・オブリージユの責務を果たしたとして除隊する者が後を絶たない。

結局のところ、サントラン王国の戦線を支え、命を落としているのはほとんどが平民階級の兵士たちなのである。

「そついえば俺たち、もうそろそろ正式に着任になるな」

「ゴアーシュは軍に残るの？」

「僕としては一刻も早く天使たちの元に帰りたいんだけどね、ほとぼりが冷めるまでもうしばらく軍隊暮らしさ。半年後には君の司令官になっているだろうね。そのときはせいぜい働きたまえ」

「おいラディ、上官侮辱にならない今のうちに思いっきりいじめておこっぜ」

「か、階級が違って僕たちの友情は永遠だよ、君たち……」

くだらないことを話している三人の元にヴァージニアが近づく。

三人が声をかけるとヴァージニアが返事をした。

相変わらず彼女の目は輪廻に釘付けになっていた。

ゴアーシュもそれがわかつていたので不愉快を隠そうともせずに顔に出している。

「ヴァージニアは？ 実家はとうだった？」

「特にどうということはない。…いつもと同じだ」

「そういえば、ヴァージニアはどうして軍に入ったの？」

「お前こそ、どうして軍に入ったんだ？ お前ほどの腕なら道場を開いても食べていけるだろうに」

ヴァージニアは伏し目がちに問い返す。

家や、自分の過去に触れられたくない気持ちは、輪廻にも分かる。

（まあわたしの場合、ボロが出やすいつて理由なんだけどね…）

「あはは。道場からは嫌がられて追い出されちゃったし、新しく道場を開くお金もないしね」

「よしよし。これも運命だと思うことだね。ラディの剣は僕が將軍になったときに存分に使ってあげよう！」

ゴアーシユは気障っぽく答えた。

それをヴィセンテがからかう。

ヴァージニアは気難しい顔で二人のやり取りを見ている。

輪廻はヴァージニアの横顔を見ながら、果たして彼女は後方で大人しくしているような人間だろうか、その内にくすぶっている大種の種を見出していたのである。

いずれにせよ、訓練期間の終了はもうすぐである。

それから間もなくして輪廻たちの訓練期間が終了した。正式な軍人になるにあたり、王城で就任式が開かれる。

「おい、知ってるか？」

「知らない」

「まだ何も言っただろ……」

謁見室の前で訓練生たちが並んでいる。

全員が、自分の持っている鎧の中でもっとも上等で上品なものか、そうでなければ軍から配給された鎧を夜中までピカピカに磨いたものを身につけている。

待合室に正方形に並んだ訓練生たちの中には、待たされるのに飽きてヒソヒソ話を始める者もいる。

ヴィセンテもその一人だった。

輪廻の後ろから、こそこそと話しかけている。

「今からお目見えする女王陛下はものすごい美女らしいぞ。この間

亡くなられた先代のシドニー国王も、若い頃は美男子だったらしいし」

「ヴィセンテは見たことあるの？」

「いや、ない。多分、訓練生は誰もお会いしたことがないんじゃないか？ ああ、ゴアーシユやヴァージニアはあるかもな。女王陛下は最近まで南の保養地にいたんだよ。体が悪いらしくてな。それが国王が亡くなったもんで、慌てて戴冠式を済ませてこちらに戻ってきたんだ」

「じゃあ美女って噂は誰が流してるんだよ」

「さあ」

「もしそれで実際は微妙だったらどうするのさ。素直に感想を言ったら不敬罪だよ」

訓練生たちの顔には不安以上に、期待と、希望が浮かんでいる。

一方の輪廻は、期待以上に不安と恐怖が上回っていた。

王族の前に出て万が一の無作法があれば首をはねられるかもしれない。他の訓練生たちのように呑気な気持ちではいらなかった。

「……ラディ。もしかして、怖がっているのか？」

斜め前に立っていたヴァージニアが振り向いて輪廻に言った。

「ヴィセンテとの会話に聞き耳を立てていたのだ。」

「そりゃ怖いよ。身分と権力を持つ人間はみんな怖い」

輪廻が答えると、ヴァージニアはふつと頬を緩ませた。

「お前にも怖いものがあるんだな」

「そりゃあるよ。ヴァージニアにはなさそうだけど」

「私を何だと思っているんだ……」

「そりやおめえ、鉄の女だろう」

「お前後で鍛え直してやる」

ヴィセンテの軽口にヴァージニアが返す。

ヴィセンテは黙った。輪廻から表情は見えないが、きっと顔を青くしたに違いない。

ヴァージニアはもう一度表情をわずかに緩めて前に向き直った。

（あの子も大分…トゲが抜けてきた感じだね。根はいい子なんだけど、どうしてあんなにひねくれちまっただんだろうかねえ）

式典が始まる。

謁見室への巨大な扉が開かれた。

訓練生 否、兵士たちは、一糸乱れぬ行進で、女王の前に向かった。

女王は若い少女だった。

背は謁見室にいる誰よりも小さく、玉座が大きいのでつま先だけが床についていた。

目や唇に化粧が施してあり、肌は陶器のように真っ白にされている。衣装の豪華さと巧みな化粧のせいで、輪廻は既視感に襲われたものの、その正体にしばらく気がつかなかった。

女王のそばに控えた大臣たちが形式的な言葉を述べて、事前に取り決めたとおり、訓練生たちが一斉に膝を折って女王に頭を垂れた。そのとき、輪廻は女王と目が合う。

「あつ！」

輪廻は思わず小さな　しかしもしかすると謁見室中に響いたかもしれない声を上げて、みなが屈む中で一人だけ立ったままであった。

輪廻はいきなり大ポ力をやらかした。

しかし勘違いというわけではなかった。

輪廻の方だけではなく、女王の方も、輪廻と目があつてわずかに口を開けていた。

（あれはシャロだ！　そうか…あれが女王陛下か…けど…女王陛下が何であんなところにいたのかしら）

大臣に睨まれて慌てて輪廻も膝を折った。

しかし長い式典の最中、女王はまっすぐ前を見ているふりをして、ちらちらと何度も輪廻の方に視線を送っている。

結局、式典は滞りなく終わり、輪廻たちは謁見室を後にする。

式典中、女王が何度も何度も輪廻の方を見ていたので、謁見室を出た途端に質問攻めに遭った。

兵舎に戻ってから、上官から輪廻たちにそれぞれ赴任地が言い渡される。

輪廻の赴任先はやはり前線だった。

サントラン王国とグリストバル帝国は現在交戦状態にある。  
サントラン王国は大陸の中央部と、南方の島国を領土に持つ国家である。  
特産品はフェルミナという金属で、これを加工するには魔女の持つ雷の魔法が必要になるため、サントラン王国だけがその金属を取り扱うことができた。  
大陸で唯一鉄道を持っているのも王国だけである。もともと、鉄道の起動にもやはり魔女の力が必要なので、その効果は極めて限定的であったが。

一方グリストバル帝国は王国の北と東に国境を面した大陸でもっとも大きな国家である。  
帝政を布いてはいるが、皇帝は有名無実化して政策などはすべて中央議会が行っている。  
サントラン王国とは東部にあるフェルミナの鉱山地帯を巡って二十年前に開戦した。  
当初は王国軍に逆侵攻されていた帝国であったが、政治の効率化と工業化に成功してからは王国東部の領土を大きく奪うことに成功している。

輪廻の赴任先は東部戦線であった。  
「黒の森」と呼ばれる場所に展開する部隊である。

宿舎の談話室で指令書に目を通して、輪廻にラデイが声をかけた。

「ようラデイ。お前はどこだった？」

「東部戦線」

「あー。もしかして黒の森か？」

「うん。ヴィセンテは？」

「俺も東部だった。砦の守備部隊だ。………そうか、黒の森か」

「……言いたいことがあるなら、ちゃんと言ってみよ」

輪廻が強くとくと、ヴィセンテは苦しそうに頷く。

「俺は東部出身だからな、黒の森の話聞いたことがある。あそこは…激戦区だ。あそこに行った兵士の半分は帰ってこない。補給は悪いし、木が多いから待ち伏せや奇襲がしょっちゅうある。それに……」

ヴィセンテは声を潜めた。

「一番悪いのは、指揮官が無能だったことだ。でも名門の貴族だから政府もクビにできない。だから、死んでもいい平民ばかりが前線に送られる…って噂だ」

「そう…か…」

輪廻は返す言葉を失いかけた。

ヴィセンテは輪廻の目をじっと見つめている。

「……俺が黒の森に行けと言われてなかったのは、俺が貴族だからなのか。くそっ、こんなことってあるかよ、あいつら」

そう呟いたヴィセンテの目には、輪廻以上の怒りが渦巻いている。しかし輪廻は、ヴィセンテの言葉を、片手を上げてそっと制した。

「でも、大丈夫。わたしはきっと生きて帰るから。生きて帰って、もう一度あなたに会える」

「……そうか」

「……僕のために怒ってくれて、ありがとう」

「何だ、やめろよ、気色悪い」



ヴィセンテはそう言って笑った。

その後、輪廻は他の仲間たちと指令を教え合った。ヴィセンテの言ったとおり、平民出身の者は前線、それも死亡率の高い場所への赴任が多かった。

「まいったなあ。俺、寒いのは苦手なんだけど…」

「クリムは北部？」

「最北端だつてさ。まともに戦闘も起きてない超田舎。なんで俺がこんなところに…」

赤毛でひよる長のクリムがぼやいていた。

他にも、父親がいる部隊に編入になって顔を青くしているリッケスや、南の沿岸部帯に配属になりこれで毎日魚釣りができると喜んでいるジュリアンなど、悲喜こもこもであった。

そして意外なことに、ゴアーシュの表情は険しかった。

「そつえば、ゴアーシュは？ 王都に残るの？」

「僕は…前線送りだった」

「え」

「そんな…まさか…僕が…お父様は…」

ゴアーシュの人事に「特別な配慮」は働かなかつた。シュトラウス家はよほどきつい灸をゴアーシュに据えたいらしい。

(まあ、もつとも、この世界にお灸なんてないんだけどさ)

「ちなみにゴアーシュはどこに配属になったの？」

「……黒の森」

「僕と同じだ」

「戦友よ！」

ガシツ、と抱きついてきたゴアーシュを、輪廻は少しドキドキしながらひっぺがした。

(にしても、こいつも黒の森とは……。灸を据えるっていうより、このまま前線に送って殺してしまおうって考えてるんじゃないかね、ゴアーシュの家の人達は)

「おい、ヴァージニアはどこだったんだ？」

ヴィセンテが、部屋の隅にいたヴァージニアに声をかける。

ヴァージニアはゆっくりと顔を上げた。

「私は……王城勤務だった」

「ああ、やっぱりそうか」

「……………」

「ヴァージニア？ どうしたの？」

「私は いや、いい」

ヴァージニアは憂鬱な顔で首を振ると、輪廻たちに背を向けて立ち去った。

## 6・特別な配慮（後書き）

ファンタジーはアメリカで生まれました。日本の発明品じゃありません。我が国のオリジナルです。しばし遅れを取りましたが、今や巻き返しの時です。異世界召喚がお好き？ 結構。ではますます気になりますよ。さあさどうぞ。異世界チートリップのニューモデルです。無双でしょう？ んああ仰らないで。文章が台本形式、でも地の文なんて見かけだけで読むと疲れるし、よく目が滑るわすぐ文体が変わるわ、ろくな事はない。空行もたっぷりありますよ、どんな斜め読みの方でも大丈夫。どうぞ一読してみて下さい、いいハーレムでしょう。余裕のカップリングだ、ヒロインの数違いますよ。

## 7・意地と偏見

式典の日の夜、兵士たちは宿舎でささやかなパーティを開いていた。酒を飲んで羽目を外している者もいる。

一番人気だったのは訓練教官のディオル・バールトンである。兵士たちは口々にディオルに感謝を述べていた。

輪廻も食事をしながらしばらく談笑に加わっていたが、外の空気を吸いたくなって、こっそりと宿舎を抜けて外に出た。

輪廻は少しの間、ぼんやりと夜空を見上げ、故郷の村に思いを馳せていた。

なぜか輪廻は、前世の故郷である日本のことではなくて、ラディ・ダールトンの故郷である北部の村が懐かしかった。

(もう14年…そろそろ15年。それだけいれば、愛着だってわくだろうさ)

ガサリ。

近くの茂みから物音が聞こえた。

輪廻は身構えた。

じっと息を殺してそちらを伺う。

誰かが隠れているのは明白だった。

「そこにいるのは誰？」

声をかけると、相手の動きがピタリと止まった。  
侵入者だと確信する。

輪廻はそろりと足音を忍ばせて近づいた。武器は持たなかったが、相手の気配はただの素人である。

輪廻が跳びかかる機会を伺っていたところで、侵入者の方から姿を現した。

「リンネさん！」

暗闇の中でも輪廻の目は相手の顔を鮮明に捉えていた。

輪廻のことをそう呼ぶのはこの世界でたった一人だけである。

「女王様……どうしてこんなところに」

「はい。リンネさんに会いたくて、こっそりと抜け出してきました」  
「僕に会うために？」

「……リンネさんの名前、本当はラディさんっていうんですよね。わたし、あなたにお礼が言いたくて、ずっと探してたんですよ？ どうして嘘の名前を教えたんですか？」

「嘘ではありません。ラディ・ダールトンの方が嘘なんです。僕のわたしの本当の名前は緒神輪廻といいます。ここではない、遠い世界から来ました」

「リンネさん。あのときは助けてくれてありがとうございます」

「いえ。女王陛下の下僕として当然のことをしたまでです」

「あの……その言い方、やめてくださいませんか？ わたしはいつもの……一緒に街を歩いたときのリンネさんがいいです」

「でも……女王様は」

「いいんです。あなたの前では、ただのシャロでいたいのです」

「そう わかったよ、シャロ」

輪廻が親しみを込めてそう呼ぶと、シャロは嬉しそうに微笑んだ。

「にしても女王がこんなところにいていいの？」

「本当は駄目ですね。見つかったら怒られてしまいます」

「女王様でも怒られるんだ」

「はい。大臣たちや教育係にいつも小言を言われています」

輪廻が笑うと、シャロもつられて笑った。

「そういえば、リンネさんって」

「ああ、シャロ。輪廻ってのは本当の名前だけど、ここではラディってことになってるんだ。だから、僕を呼ぶときは」

「わかりました。ラディさんですね」

輪廻は頷いた。

しかし、シャロはうつむいて、恥ずかしそうに言う。

「……ですけど、ふたりきりのときは、リンネさんと呼ばせてください。駄目、ですか？」

「いいよ」

「はい！ありがとうございます、リンネさん！」

シャロは表情を輝かせた。

輪廻とシャロは宿舍の裏で、ベンチに腰掛け星を見ながら話していた。

不思議とシャロには、転生のことを話してみたくなくなった。最初に本

名をぼろりとこぼしてしまったからだろう。

輪廻が生まれ変わった話を聞いて、シャロは口を開けて驚いていた。

「輪廻さん…故郷が恋しくありませんか？」

「今はもう、こっちが第二の故郷みたいなものだけだね」

そして話題は、輪廻のこれからのことに移った。

「そういえば、リンネさんはずっと王都にいるんですか？」

「いや、正式な配属先が決まったんだ。黒の森の部隊」

「黒の、森」

シャロは顔をこわばらせてゆっくりと繰り返す。

即位したての女王とはいえ、その悪名高き戦場の名は耳に覚えがあった。

長い沈黙の後、シャロが口を開いた。

「……リンネさん。わたしが軍務省相に言っつて、あなたの人事を

「

「ラデイー！」

シャロの言葉を遮って誰かが輪廻のことを呼んだ。

そちらを見ると、ヴァージニアが走ってやってくるところだった。

「ラデイー、こんなところで何をしている」

「ちよつと風に当たりたくてね」

「……シャロ？」

ヴァージニアがシャロを見て眉をひそめる。

シャロの方も、ヴァージニアを見て立ち上がった。

「ジニー！」

「シャロがどうしてこんなところに……ラディ？」

「あ、うん。えっと。二人は知り合いなの？」

輪廻はにわかに混乱しつつ質問した。

ヴァージニアとシャロは互いに顔を見合わせる。

「幼なじみだ。昔、よく王城に遊びに来た」

「ええ。わたしが病気がちになって、南の方で暮らすようになってから、しばらく会っていなかったのですが……」

（そういえば、ヴァージニアの家は名門貴族だったね。その繋がりが。昔から優秀な軍人を輩出してるって聞くし）

「さっきの式典、私はずっとシャロのことを見ていたんだぞ。なのに……」

「ごめんなさい。気づきませんでした」

「それはいいとして……どうしてラディとふたりっきりなんだ？」

「あの、リ……えーと、ラディさんに会いたくて、部屋から抜けだしてきたんです」

「ラディに、会いに？」

シャロは無邪気に言ったが、ヴァージニアはじろりと、睨みつけるようにシャロと輪廻を見る。

彼女の視線の鋭さに輪廻はたじろいだが、シャロは気にもとめずに輪廻に言っ。

「あの、ラディさん。さっきのお話ですけど」



「ああ、黒の森の」

「ちよつと待て。私の話はまだ終わってないぞ。二人の関係は一体何だ？ どこで知り合った？」

「ジニー、なんでそんなに怖い顔を？」

「いや…それは…ゴ、ゴホン。ラディと私はともに剣を習った仲だ。その、女王陛下と深夜に密会していたとあつては、事情を知りたくなるのが人情だろう」

「なるほど。ジニーはわたしじゃなくて、ラディさんのことが気になるわけですね」

「そうじゃない。もちろん、シャロのことが一番気になる」

「あのー。別にそんな事情があるわけじゃなくて、たまたま、この間の休暇の時に、街で会ったつてだけの仲だから。…そういえば、シャロは何で街にいたんだ？」

何気なく質問した輪廻だったが、それを持ちだした途端、シャロがしまったという顔をした。恐る恐るヴァージニアの方を見る。ヴァージニアが低い声でシャロを呼んだ。

「シャロ。またあなたは」

「ゴ、ごめんなさい！」

「また抜けだしたのか！」

「ひいっ！ そんなに怒らないで！」

「みなに迷惑がかかるからと、あれほど言っていたのに！ シャロはもうただの姫じゃなくて、女王陛下なんだぞ！ もし何かあったらどうするんだ！」

「で、でもちゃんと護衛も何人が連れて行つたし」

「そうやってお忍びで外に出ること事態が軽はずみだと言っているんだ！ 女王の権力をそうやって濫用して」

以降数十分の説教について、輪廻は完全に蚊帳の外であった。

言いたいことを言い終えたヴァージニアが満足気に頷いた。  
シャロはげっそりしている。

ちなみに街で謎の剣士に襲われたことはヴァージニアには黙っていた。

言えば街で人を切り捨てたことまで言わなければいけないし、それにこれ以上シャロの説教を長引かせるのもかわいそうだと思うた。

「ぐすつ……もうしない」

「当たり前だ。……おいラディ、このことは秘密にしてくれ。女王陛下が、幼なじみとはいえ、一介の新兵に説教されてることが知られたら、その、土気にかかわる」

「分かってる。好き好んで言いふらしたりはしないよ」

「うむ。よろしい。……で。話を戻すが、シャロはラディに一体何の用だ？」

「はい。式典でラディさんの姿を見かけて、単にもう一度お会いしたいと思ひまして」

「私のことは目に入らなかったのに、ラディのことはすぐに見つけたわけだ」

「……ジニー？」

「別に？ さあ、要件は済んだら？ 早く城に戻れ」

「あ、まだ終わってないです」

「何？」

ヴァージニアの声があつという間に不機嫌になる。

普段から不機嫌そうな声なので他人ならあまり変わらないように感じるだろうが、輪廻は最近になってヴァージニアの機嫌不機嫌がなんとなく読めるようになっていた。

が、輪廻よりもずっと付き合いが長いはずのシャロはヴァージニアに背を向けて輪廻に向き直る。  
この少女も大概マイペースである。

「わたしが軍務省相に言つて、あなたが黒の森に送られないようにします」

「ちよつと待て。それはどういうことだ」

「だって……黒の森のことは、ジニーだって知ってますよね？ だからわたしは」

「それはもちろん知っているが……しかし……」

ヴァージニアは慎重に言葉を選んでいた。

「それでラディを前線に送らなかつたとしても、ラディの代わりに誰か別の人間が送られるだけだ。王たる者がそれでは」

「わたしにとつてラディさんやジニーは大切な人です。それを守るのが悪いことなのですか？」

「しかしシャロは女王なんだぞ。シャロの権力は個人的な希望を叶えるために与えられたわけじゃないんだ」

「ジニーはラディさんが死んでもいいの？」

ヴァージニアが言葉を詰まらせる。

言い返そうとしたが、結局、何も言えなかつた。

輪廻はヴァージニアを手で制した。

「シャロ。僕一人だけが逃げることはできないよ」

「どうして!？」

「僕が行かなければ、仲間の誰かが戦争に送られる……。一応、一緒に訓練した仲間だしね。愛着も、わいてるし。弟子に先に死なれたらたまらない」

輪廻はちらりとヴァージニアを見た。

彼女の表情の意味を輪廻は考える。それは憐憫か、齒痒さか。

「それに他の奴ならいざしらず、僕なら戦場でも生き残れる。僕は剣の達人だよ」

「ラデイ……」

シャロが輪廻の目をじっと見つめていた。

本当の心を見透かされそうで、輪廻は目を逸らしたくなる。

まるで尋問されているかのような時間が過ぎた。

やがてシャロはため息をついた。表情を和らげる。

ほっとしたのは、むしろ輪廻の方だった。

「わかりました。変なことを言っすみませんでした。わたし……

女王失格ですね」

「大丈夫…シャロなら良い王様になれる」

輪廻はシャロの頭を撫でた。

撫でてしまっからはっと我に帰った。女王陛下の頭を撫でるなど不敬にも程がある。

シャロの頭が丁度いい位置にあったのと、女同士の気安さでついやってしまったのである。

「はっ」

しかしシャロは輪廻になされるがままで、手が撫でる度に可愛い妙なうめき声を上げて顔を真赤にしていた。

しかしすぐに、ヴァージニアの機嫌がさらに悪化したのを感じて慌

てて手を引っ込める。  
シヤロは自分の頭に触れて、少し不満そうに唇を尖らせながら、上目遣いに輪廻を見た。

出発の日になった。

輪廻は家族への手紙を投函してから、荷物をまとめて宿舎を出た。転生してから輪廻は、物を所有することへの欲求が甚だしく低下していた。荷物は着替えが2、3着ある程度だ。

輪廻と一緒に訓練を受けた仲間たちを大切に思っているのは事実だ。輪廻が自分なら戦場でも生き残れると思っっているのもまた事実である。

しかしながら、輪廻の根底にあるのは、異世界から来たことに対する引け目である。

もし生き残るのなら、異世界から来た自分ではなく、この世界の間でありべきだと輪廻は考えていた。

(まあ…死にたいってわけじゃないんだけどさ)

自分に言い聞かせるように輪廻は思った。

東部戦線までは馬車で向かう。

輪廻と同じ境遇の新兵たちが、輸送用の巨大な馬車に乗って移動するのである。

馬車の発着所に兵士たちが集まっている。

出発の時刻までゴアーシュと二人でぼんやり待っていると、輪廻は突然、誰かに後ろから肩を叩かれた。

「ラデイ、早いな」

「ってヴァージニア!? どうしてここに!？」

「どうしても何も、私も黒の森の部隊に配属になった」

「ええ? だってヴァージニア、王城勤務だって……」

「うむ。きつと何かの間違いだったのだろう。人事に間違いはつきものだからな」

「嘘つけ、キャスカート家の名前を使って圧力をかけたんだろうが」

「ヴィセンテも!? なんで!？」

当たり前のようにヴィセンテが輪廻のそばに立っていた。

さっきまで落ち込んでいたゴアーシュが、予期せぬ二人の登場に言葉を失っている。

「まあ多分、そこのお嬢ちゃんと同じ理由だろうな」

ヴィセンテが笑いながら言うと、ヴァージニアはそっぽを向いた。

「ちなみに俺は家の権力なんかないので、素直に上官に直談判に言った」

「よく許してもらえたね」

「なあに、上官の奥さんの悪口を大声で言ってやったら、喜んでこっちの部隊に移してもらえたよ」

「無茶するなあ、もう……」

輪廻は呆れて言った。

「しかし君たち、本当にいいのかい? こんな聞いたことがない

よ。特にヴァージニア、君が死んだら、キャスカート家の方々が  
「少しでも早く戦争を終わらせ、国に勝利を与えることが貴族たる  
私の責務だ」

「まあ、どうせ人間はいつか死ぬからな、いつ死ぬかとどこで死ぬ  
かと誰と死ぬかくらいは自分で選んでみたくなったのさ」

ゴアーシュに対して、ヴァージニアとヴィセンテがそれぞれの哲学  
で答えた。

ゴアーシュはなおも不満そうだったが、二人の意志が固いことを確  
認して、それ以上は何も聞かなかった。

仲間たちを載せて、馬車はゆっくりと走りだした。

王都から黒の森まで半月はかかる。

移動の最中、輪廻は15歳の誕生日を迎えた。

## 7・意地と偏見（後書き）

シャロ「リンネさん、出発の準備はいいですか」

輪廻「うん。荷物はこれだけだし」

シャロ「リンネさん、剣はお餅でしょうか」

輪廻「えっ」

シャロ「王国軍の剣はお餅ですか」

輪廻「いや知らない」

シャロ「えっ」

輪廻「えっ」

シャロ「まだお餅になってないということですか」

輪廻「えっ」

シャロ「えっ」

輪廻「変化するってこと？」

シャロ「なにがですか」

輪廻「剣が」

シャロ「ああ戦い続ければ階級が上がって剣が変わりますよ」

輪廻「そうなんだすごい」

シャロ「ではお作りいたしましょうか無料ですよ」

輪廻「腐ったりしない？」

シャロ「えっ」

輪廻「えっ」



## 8・黒の森

帝国軍カリナ・エーデル中將は、軍務省長官との会議を、帝都にある帝国軍参謀本部の自分のオフィスに設けた。

ジョーン・グレイス長官は齡60の老人だったが、眼光のねちっこさと人の弱点を即座に見抜く才能は噂に違わず健在であった。

カリナは軍務省長官を油断ならない人物だと考え、オフィスに入れてからも自分の一挙一動に細心の注意を払わなければならなかった。

「それで。私は東部方面の担当になるのですか？」

無駄な会話をしたくない一心で、カリナはすぐに本題を切り出す。

王国の側から言う場合の「東部戦線」と帝国の側から言う「東部戦線」は同じものである。

帝国は王国の北側と東側を囲むように領土を保有している。ちょうどコの字の下の一画を隠したような形だ。

そして東部方面の戦いとは” ”の領土の右の一画を争う戦闘であった。

カリナ・エーデルは帝国軍参謀本部では珍しい、女性の士官である。さらに珍しいことに、彼女は帝国軍最年少の中將であった。

彼女の生まれは一般の商人の家である。

父の死後、野心を胸に秘め士官学校に入学し、その後は実力のみで現在の地位に上り詰めた。

人は彼女を天才用兵家と呼ぶ。

肩まで届く銀色の髪と鋭い眼光、それに真っ白な肌は、厳しいながらも気高く生きる美しさを秘めている。

…と、帝国のゴシップ紙は彼女のことを表現した。

しかし実際は肌の手入れをサボるあまり最近ではガサガサだし、髪は内地にいるときも3日も4日も平気で洗わないときがある。

何より致命的なのは、カリナは部屋を片付けるのが苦手だった。

さきほどから長官がカリナの話には上の空で、しきりに部屋の中を眺めては嫌そうな顔をしているのもまさにそれが理由だろう。

長官は、ソファの上に散らばっていた、本と下着と書き損じの書類を丸めたものと、鼻をかんだちり紙とこぼした紅茶を慌てて拭いたまま忘れていた雑巾を手でさりげなくどかした。

ちなみにカリナの同僚たちは、一度彼女のオフィスを訪れると大抵は二度と来ることがなかった。

「…とにかく、冬に向けて我が国は北部に物資を集中せざるをえない。首脳部はそういう結論に達している」

「でしたら、私も北部戦線に行くべきでは？」

「いや、最近は東部戦線への圧力が高まってきている。それに南方の部族の反乱もある。あそこの反乱政府と王国が結びつくのは厄介だ。ここはどうあっても、王国のこれ以上の浸透を防がなければならない」

「なるほど……。それで、私の地位はどのようになるのですか？」

「君には第3師団を任せる」

カリナの眉がひくりと動いた。

北部戦線では一個連隊の指揮を任せられ、奇策を用いて王国軍に対して大きな戦果を上げた経歴があった。

それがいきなり師団相当の軍隊を任されるのは、奇抜な人事だと言えた。

「……期間は？」

「冬が明ければ、再び軍の再編成が行われる。そのとき、我が軍は東部戦線に戦力を集中し、一気に方をつける」

（なるほど。つまり、試用期間というわけね……。その間に成果を挙げなければ切られる、というわけか）

カリナは頷いた。

もとより正式な任務である。承諾する他はない。

「補給も制限されるし、増援もそうは送れん。だが切り札を一枚与えよう」

「切り札？」

「入ってきたまえ！」

長官が大声で呼ぶと、オフィスに一人の男が入ってきた。

一目見て、手と足のバランスがおかしいと思った。どちらも長い。

そして髪は錆色の赤である。筋肉質で、無精髭に、長い髪を後ろで縛っていた。

「この方は？」

「よう。俺の名前はイー ルズだ。あんたが俺の主人か？」

不遜な態度でイー ルズは名乗る。

名前を聞いた途端にカリナに衝撃が走った。

「蛇槍イールズ……」

その名前には心当たりがあった。

南方の反乱軍に対する軍事作戦での活躍は耳にしていた。

民兵上がりのこの男は、たった一人で、中隊規模の敵を壊滅させたという英雄だ。

否、この男が英雄などであるものか。

この男は 毒蛇にたとえられる忌み者。

「切り札というには切れすぎですよ、長官」

カリナは思わず笑いがこみ上げていた。

イールズは主の様子を見て満足そうに頷く。

オフィスを出る際、長官が言った。

「それから君、出発前に部屋を片付けておきなさい」

「……はあ。あの、今日は長官がいらっしやるので、一応片付けておいたのですが」

「……………」

長官はなんとも名状しがたい表情を浮かべて、それ以上は何も言わずに帰った。

輪廻たち新兵が黒の森に到着したとき、季節はすでに秋だった。

湿った真つ黒の地面。背の高い木が空を覆い隠しているかのようだ。基本的に舗装された道などなく、柔らかな土と、落ち葉に、張り巡らされた木の根が大部隊の進行を困難にしていた。

馬車から降りて、輪廻たち新兵は部隊のテントに挨拶に行く。黒の森の戦線にはたくさんの兵士が参加しており、訓練所の仲間と輪廻と同じ隊に配属されたのはヴィセンテ、ヴァージニア、ゴアーシュの三人だけである。

白い円筒形のテントの中が隊長のための部屋になっていた。部下の一人がテントの中に新兵の到着を告げると中から「入れ！」という威勢の良い声が聞こえる。

中に、猿のような顔をしたいかつい男が仁王立ちしていた。銀色の胸当てのころどころが錆び、切り傷がついている。

ヴィセンテが、度胸試しとばかりに一番最初に口を開く。

「隊長！ 俺たちは本日からここの隊の」

「私は隊長ではない」

という短い答えが返ってきた。

「あのう……それでは隊長はどこにいらっしゃるのですか？」

ゴアーシュが恐る恐る尋ねた。

男が視線を向けると怯えたゴアーシュが体をこわばらせる。

「……隊の中で、一番威張っている女が隊長だ」

ぶつきらぼつにそれだけを答えた。

隊長はすぐに見つかった。

テントを出て外を歩いていると、屈強な男たち数名に罵声を浴びせ腕立て伏せをさせている女がいた。

「た、隊長！ もう限界っス！ 腕がぶるぶるしてます！」

「馬鹿野郎！ 切り込み役がそんなんでどうする！ そんなひ弱じやスプーン一本持てねえぞ！」

「ひいっ」

弱音を吐いた兵士の背中を踵で何度も踏みつけていた。

「もしかして、あなたが隊長殿ですか？」

ゴアーシュが真っ先に声をかけたのは、ひとえに隊長が美女だったからに他ならない。

黒い短髪のスラリとした体型の女だった。

一見してか弱いほどの瘦躯だったが、よく観察すれば全身を無駄のない筋肉が覆っているのが分かった。

重い剣を振り回すためではなく、長い時間動き続けるための最適化された体だ。

その隊長が、ゴアーシュを見て、加虐的な表情でニヤリと笑う。

しまった、声をかける相手を間違えた と、ゴアーシュが後悔したのが輪廻には手に取るように分かった。

「そうかそうか、お前たちが雛鳥か！ 待ちかねたぞ。ふふふ、安心しろ、このオレが精一杯鍛えてやるからな。立派な雄鶏に育てて

やるぞ喜べ」

「アブリル・ヒルマン王国軍東部方面軍二番隊隊長殿。女王陛下の命を受けてただいまより我々四人が貴官の指揮下に入ります」

「あーあー、よしなに。オレのことは隊長か神様と呼べ」

真面目に形式ばったことを伝えたヴァージニアに対して、ヒルマン隊長は型破りである。

「うちの隊のルールは簡単だ。第一に仲間を見捨てないこと。第二に国を見捨てないこと。第三に自分を見捨てないこと。お前たち雛鳥は何かあればすぐにくたばる出来損ないの鳥だ。だから雄鶏になるまでは絶対に生き残れよ。オレの命令に従っていれば生きて故郷に帰らせてやるぜ。そういえば補佐官のリンドには会ったか？ あいつ顔は怖いが腕はそれほどでもない。まあ隊の中じゃ二番目だ。一番は間違いなくこのオレだぜ」

「ここにいるのが王国軍の全軍ですか？ 記憶では、黒の森には五個隊が展開しているはずですが」

「一番隊と三番隊は森の北部で作戦行動中。総司令部と、それから四番隊と五番隊の一部は偵察行動中。ここにいるのはオレたち二番隊と、五番隊の後詰めだけだ」

ヴァージニアの質問に隊長が答える。

ヴァージニアの言う通り、大部隊が展開できないことを差し引いても森にはずいぶんと人気がない。

(なるほどね、わたしたちの部隊は留守番か…)

「それで、僕たちはこれからどのようにすればいいのですか？」

「今は待機中だから何も無いが、普段から鍛錬だけはしておけ。毎日のためめ努力こそが生存率を上げるのだ。隊の細かいルールは

補佐官から聞け。以上、解散！」

輪廻たちは寢床の確保と細かい事務手続きを済ませる。

最前線であるので、すぐに防具と剣が支給された。

動きを制限される鎧は輪廻の望むところではなかったが、新兵が部隊の決めた方針に逆らえるはずもなかった。

それにしても初日はやることがない。

輪廻たち四人は外で待機している先輩たちに挨拶をして回っていた。

「それにしてもヴァージニア、君も来るなんて珍しい」

「そうか？」

ゴアーシユの疑問に気のない返事を返した。

それにヴィセンテも同意する。

「だって最初に会ったときなんか、まともにも利かなかったんだぜ」

「うっ、うるさいぞ！」

「別にいいじゃねえか。今の方がいいと思うぜー。まだ取っ付きにくいけどな」

「…勘違いするな。単に、仲間に対しては、もう少し交流を持った方がいいと思ったただけだ。その方が戦場で生き残れるしな」

ヴァージニアはそう言うてからちらりと輪廻の方を見る。

輪廻は意味が分からなかったが、とりあえず無難に微笑み返しておいた。



ヴァージニアは機嫌を損ねて輪廻に背を向けて離れて行った。

そのとき、見回りに行っていたはずの兵士が走って戻ってきた。木々の間を走って、輪廻たちの目の前に飛び込んでくる。

「て、敵襲！」

そう叫んだが最後、その男はぼったりと前のめりに倒れて動かなくなった。

背中には矢が刺さっている。

直後、輪廻の耳は複数の矢音を聞いた。

一番近くにいたゴアーシュを強引に地面に倒す。

「痛っ！ 何だい突然！」

ヴァージニアはヴィセンテが木に押し付けて背中をかばっていた。

少し遅れて矢が山なりに飛来する。

咄嗟に対応できなかつた者、対応したにもかかわらず運が悪かつた者が何人かその犠牲になつた。

輪廻の伏せているすぐそばにも矢が刺さっていた。

次に輪廻に聞こえたのは仲間たちの怒声と、敵軍の突撃する音。

「狼狽えるな！ 体勢を立て直せ！ 押し返すぞ！」

それからは一気に白兵戦になだれ込んだ。

輪廻はすぐにスイッチを切り替えると、剣を抜いて敵の中に突撃した。

「おいおいマジかよ…！」

ヴィセンテがそうぼやきながら輪廻の後に続いた。

8・黒の森（後書き）

愛型「俺の出番まだ？」  
シャロ「まだですー」

## 9・雛鳥たちの戦場

雨のような矢の攻撃を受け混乱した二番隊だったが、なんとか体勢を立て直してかろうじて敵の突撃に対応していた。

熟練兵たちが先陣に立ち敵の隊列に斬り込んでいく。

輪廻はその最前列に飛び込んでいた。

熟練兵たちが、ただの新兵である輪廻が最前まで出ていることに驚きを見せていた。

輪廻は素早く目の前の男に斬りかかった。

剣を打ち合おうと構えていたが、防御の隙間を狙って胴を斬る。

が、輪廻の剣は相手の鎧とぶつかって、傷を与えるに至らなかった。

（鎧！ 面倒なものを着込んでやがる）

しかし輪廻の鷹のような動体視力は返す刀で鎧の隙間、相手の喉を狙って適切に切り捨てていた。

「うっ…」

相手がうめき声を上げて倒れた。血が吹き出している。

人体を切断した感触と血の匂いで、今まで眠っていた輪廻の心が激しく騒ぐ。

高揚感。

命の危険と隣り合わせの場所で未だ自分は生きているという充足感。

輪廻は熱狂的に戦闘に没頭した。

輪廻が狙ったのは首と手足である。

帝国軍と王国軍兵士が身につけている鎧は全身を覆うものではなく、胸の前面と肩の傷を防ぐための簡単なものであるのが幸いした。

しかし二人目、三人目と切って捨てたところで、輪廻は違和感を覚えた。

(こいつら、突撃してきた割にはずいぶんと防戦的だね…一体何を企んでるのかしら)

輪廻は敵と一度も剣を打ち合わせていなかった。

これは打刀を使っていたころの戦闘経験による癖であったが、他の味方たちは斬り合うばかりで一進一退であった。

輪廻と対した敵も、輪廻がたちまち三人を切り殺したのを見てまともにも切り結ぼうとせず仲間が固まって剣先で輪廻を牽制し続けている。

(時間稼ぎ…かしら?)

ということは、撤退を前提に戦っているのか?

奇襲を受けて混乱していた王国軍だったが、帝国軍が奇襲をした割には攻勢の意志が薄いことと、帝国軍の数が王国側よりも少なかったことで、両軍は互角の戦闘を繰り返していた。

輪廻の読みは当たった。

帝国軍が後退を始めたのである。

しかし混乱し乱戦状態にあった王国軍は、そのままずると引きずられるようにして帝国軍の追撃を始める。

輪廻も、戦列の隙間を作らないために積極的に敵に前進し続けた。た。

いや、前進せざるをえないという状況である。

ただでさえ乱戦状態で王国軍は陣形の体を成していないのだ。

下手に後退すれば帝国軍が反転攻勢してきて隊列をずたずたに引き裂かれるおそれがあった。

やがて帝国軍が完全に撤退し、姿を消したところで、王国軍は追撃を止めた。

反転攻勢はなかった。

ヒルマン隊長はほっと安心して、全隊に部隊の再編を命じた。

「ラデイ、大丈夫か？」

輪廻が振り返るとヴァージニアが立っていた。

鎧が半分泥だらけだったが、一見したところ怪我はなさそうだった。

「ヴェイセンテとゴアーシュは？」

「分からんが無事だろう。あのとき前に出てきたのは私たちだけだ」

「君は？」

「斬り合いの最中に木の根に足を取られて転んだだけだ。今はもう落ち着いた。大丈夫だ」

ヴァージニアは輪廻の鎧と剣についた返り血を見ていたが、何も言わなかった。

その時である。

二番隊の斜め左前方から矢の一斉射撃が飛んできた。

三回の射撃の後、そちらの方向から最初のものとは別の帝国軍部隊が突撃してきた。

臨戦態勢にあつた王国軍は最初ほどの混乱はなかつた。

しかし今度は、輪廻は冷静に戦場を眺めつつ、味方の援護をするように最前列を縦横無尽に駆け巡る。

「ヴァージニア！」

敵と鏝迫りになったヴァージニアの背中を守って敵と斬り合う。すぐに翻ってヴァージニアと相対していた者の腕を切り捨てる。

「ラデイ、すまない！」

「あんまり前に出ないで！」

先ほどのこともあつて、輪廻は敵の追撃には消極的だった。

一度最前線から下がり、戦場全体を見渡す。

数の上では王国軍が有利であるが、戦況自体は互角である。

(……いや、互角じゃない)

何故なら帝国軍には、最初に遭遇した部隊がまだほとんど無傷の状態で残っているのである。

いや、それどころか敵に増援がないという保証はない。

森の中は見通しが悪く、仮に伏兵が隠れていたとしても見つけるのは困難だろう。

輪廻は帝国軍の攻勢をその中心部で支えているアブリル隊長を見た。右手にロングソード、左手に短剣を持ち二人の敵と同時に斬り合っている。

「ひるむな！ 持ちこたえろ！」

隊長の怒声が森に響く。

それに呼応する形で、隊長の腹心たちが一気に前進する。

一部の仲間が前進することで、戦線自体が帝国領側へ押し上げられていた。

「隊長！」

輪廻は隊長の元へ走ると、周囲にいた敵をすれ違いに素早く切り捨てる。

一人目、二人目と切ったところで、三人目はレザーアーマーが致命傷を防いだ。

罅迫りになりかけたところで、輪廻は三人目を蹴り飛ばし、喉に剣の先を突き刺した。

「隊長！」

「やるな新米！」

隊長は敵と激しく剣を打ち合わせ、敵の剣が跳ね上がったところで、短剣を振って急所を狙った。

輪廻と隊長は、共に敵の返り血で真っ赤になりながらも、焦ることなく、ゆっくりと敵の方へ前進を続けた。

「隊長、このまま前に行くのは」

「うるさい。新米は自分のケツだけ見ている」



隊長はそう答えながら、敵兵が剣先を向けて走ってくるのを軽くいなしていた。

隊長が一步踏み込んで斬りかかろうとしたところで、敵が剣を合わせながら大きく後ろに下がる。

やがて、敵軍全体が後退を始める。

改めて、実に統制された後退であると輪廻は思った。

アブリル・ヒルマンが前線で戦うようになってからすでに五年。

黒の森の戦場など自分の家の裏庭のようなものだ。

アブリルは士官としての高等教育など受けてこなかったが、軍隊を動かすためのいろはは実戦での先任の隊長の手腕を見て学んでいる。

それゆえに、帝国軍の動きが王国軍を誘うための罠であることは今さら輪廻に指摘されるまでもなく理解していた。

（んなこたあ分かってるんだよ、分かってるんだが、こつするしかねえだろうが…！）

一見すると王国軍の方が多勢であったが、実のところ、アブリルが把握できているのは二番隊だけで、五番隊との命令系統の統一が未だにできないでいた。

このような状態では軍全体に統制のとれた作戦行動を命ずることができず、その結果王国軍は戦場のあちこちで遊兵を生んでいる。

王国軍の実数は帝国軍と同数か、ひよっとするとそれ以下かもしれない。

ないのだ。

このようなバラバラの状態では撤退すらままならない。

犠牲を出さない撤退こそ、用兵においては極めて高度な作戦行動のひとつだからである。

二番隊だけならばともかく、今の状態でそんなことをすれば、五番隊との連携の隙を突かれて多大な出血を強いられるだろう。

否、もしも今すぐに撤退できるのならばその出血は払うべき代償である。そう考えることもできた。

しかし敵の行動は悪辣である。

敵は常に、王国軍が前進することがもつとも出血が少なくなるような状況を作り、王国軍を帝国領の奥深くまで誘い込んでいたのである。

今のところ前進することそのものの兵の損失は少ない。

だから、このまま敵を追撃してゆけば、いつか敵が隙を見せるのではないか。

撤退のリスクを考えれば、どうしてもその希望が目の前にちらつくのだ。

それゆえに、アプ ril は撤退を命じられずにいた。

（くそつ、どうかしてるぜ。戦場に楽観主義なんか通用しねえ。こ  
うなったら部隊の二割は犠牲にする覚悟で全力で後退するしかない  
！）

そもそもこれは、軍をあちこちに分散し、各隊隊長の面子を守るために命令系統の統合すら嫌った王国軍司令官の失点であると言えた。

しかしながら、司令官の行動を止められなかった自分にも責任がある、とアブリルは思っていた。

「留守番部隊」と揶揄される二番隊とはいえ、隊長は隊長であり、部下を守れない士官に上層部の責任を追求する資格はない。

王国軍の斜め右前方から最初にぶつかった敵軍が現れて、弓の斉射の後に突撃してきた。

王国軍がそれも退けると、今度は斜め左前方から、二番目の敵軍が再び現れて、またしても弓の斉射の後に突撃を仕掛けた。

帝国軍が後退する度に王国軍が前に引きずられる。

四度目の突撃を退け、アブリルが撤退命令を出す直前。

隣で一緒に戦っていた輪廻が、たった一人で敵の部隊に突撃した。

帝国軍少将、ベニード・ウォルコップは作戦の成功を確信していた。副官の忠告を受け、敵が想定外の行動をとった場合、直ちに作戦を中止して撤退する準備ができていたが、どうやら杞憂に終わったようである。

少将の立てた作戦は単純である。

まず王国軍へ諜報活動を行い、帝国軍の動きについてのデマを流す。狙い通り、王国軍はその真偽を確かめるための偵察部隊を派遣した。また、以前から帝国軍は継続的に森の北部の拠点に圧力をかけており、そちらに王国軍の二個部隊を釘付けにすることに成功した。

これで、王国軍を各個撃破する準備が整った。

戦略目標としては王国軍の戦力を削ぐことにある。

まず帝国軍の部隊を3つに分ける。

1つは王国軍の偵察部隊の攪乱と陽動を行う部隊である。狙いは偵察部隊が本部に引き返すのを妨害することにある。

残りの2つが右翼部隊、左翼部隊として、敵本部の右前方、左前方にそれぞれ位置する。

一方が射撃、突撃、後退を行い、敵部隊を引っ張ると、その側面からもう一方の部隊が射撃突撃そして後退を行う。

つまり2つの部隊が交互に王国軍とぶつかり、敵軍を精神的に消耗させつつ、補給線の届かない帝国領内へと敵を引きずり込むのが最終的な目的である。

ウォルコップ少将の計画では、ある程度帝国領内への誘導が完了した後は、最初の攪乱陽動部隊とも合流し、敵を孤立無援にし包囲殲滅することになっていた。

だが当初はウォルコップ少将の部下においてもこの作戦の脆弱性を指摘する声があった。

ウォルコップ少将は士官学校上がりで実戦経験に乏しく、本作戦も言うなれば「机上の空論」であると見る向きが強かったのだ。

しかしながら、アブリル・ヒルマン率いる二番隊と五番隊後方部隊との不和や、二番隊が兵員補給をした直後で練度が低かったことなどの幸運が重なり、ウォルコップ少将の「机上の空論」は空想がそのまま具現化したかのような理想的な効果を示していた。

「王国軍恐るるに足らず！ 未だに王族にかしづくだけの下等文明よ！」

ウォルコップは喜色満面で部下に漏らす。

自分の作戦がどのような幸運のもとに成功したのかは知る由もない。

ウォルコップ自身は左翼部隊にて全軍の指揮を執っていた。

右翼部隊の後退を確認してから、長弓部隊に射撃の用意を号令する。

「構え」

そのときである。

まだ若い、男の王国軍兵士が、たった一人で飛び込んできた。

「て、敵襲　！」

帝国軍の左翼部隊が輪廻の単身突撃を確認したとき、すでに長弓兵を2人斬り殺していた。

素早く視線を動かして、敵兵の分布と、大将の位置を確認する。

「う、撃て！　撃てえええ！」

敵の大将と思しき男が叫ぶと、部隊の前方に展開していた弓兵たちが一斉に輪廻に弓を射った。

雨のような矢を、輪廻は斬り殺した弓兵の死体を盾にして防いだ。

「あ……」

第2射をつがえるよりもずっと素早く輪廻は飛び出している。疾風のように帝国軍の隙間を縫って走ると、その後ろには斬られて血を流した兵士たちの屍が並んでいる。

戦場は地獄などではない。地獄を作るのは輪廻である。

「重歩兵隊前へ！」

帝国軍部隊の司令部へ肉薄する寸前に、後方に下がっていた歩兵隊が前に出て輪廻を囲む壁になった。退路を完全に塞がれたが、それでも輪廻の動きによどみはない。四方八方からの切り込みを蝶のようにかわしつつ、少しでも隙を見せれば容赦なく切り捨て、隙がなかったとしても、輪廻の剣技の前には裸で立っているも同然である。

「困め！ 押しつぶせ！ たった一人で戦局を変えられてたまるものか！ 右翼部隊を呼び寄せ」

そう叫んだ司令官ベニード・ウォルコップはその瞬間意識をねじ切られた。

輪廻に続き単身で飛び込んできたアブリル・ヒルマンが、帝国軍が輪廻に気を取られている隙に一瞬で司令部まで滑り込むと、司令官の頭蓋を一太刀で半分にスライスしたのである。

倒れた司令官の死体からは異様な匂いが立ち込めている。もはやそれが司令官だったのかどうかも分からない。

上官の脳髓が地面に撒き散らされたのを見て、副官たちの間にどよめきが走った。

やがてそれは、アブリル・ヒルマンへの恐怖に変わる。

「さあどうした。頭を叩き割りたいのはどいつだ!？」

それから1時間後、帝国軍は全軍が敗走し、王国軍もそれを追撃することなく王国領内への帰還を果たした。

たった二人で帝国軍の左翼部隊に致命的な傷を与えた輪廻とアブリルだったが、ほぼ無傷の状態で本部に帰還し、戦友たちを驚かせた。帝国軍も王国軍も同数を減らし、全体の戦果としては王国軍がかかるうじて収支が正になる程度であったが、この先王国軍が支払わされていた出費を考えれば十分すぎる結末だと言えよう。

また、輪廻だけではなく、ヴァージニアたち三人もこの戦闘では一命を取り留めた。

雛鳥たちは、無事に初陣を生き延びたのである。

## 9・雛鳥たちの戦場（後書き）

アヴリル「なぜ私を連れて行ってくださらなかったのですか……夜  
一様……」



## 10・修羅のうとく

帝国軍を撃退した夜、二番隊と、偵察から戻った四番隊と五番隊とが合流した。

偵察部隊と行動を共にしていた東部方面軍総司令のマイルズは、二番隊の奮戦を聞き、興味のない素振りでも頷いた後、日課の入浴のために湯を沸かすよう部下に指示した。

東部方面軍の家を守った二番隊の戦闘の、戦略的な価値を理解できていなかったのである。

よってアブリル・ヒルマンが推薦したラディ・ダールトンに進級について実現することはなかった。

「何が特進か……新兵をむやみに進級させては秩序が保てぬ。たかが引き分けただけの戦闘の何が功績か」

マイルズは風呂のための専用の小屋（いわゆるスチームサウナ）を建てさせていた。

戦場では貴重な水を使い、風呂に入り、補給部隊に特別に発注したぶどう酒を飲み、自分の地位を噛み締めていた。

着任初日の新兵が、敵襲のさなかにあつて軍神のごとく活躍したことは二番隊の話題をさらった。

たった半日でラディ・ダールトンの名を知らない者は二番隊にはい

なかった。

ちなみに輪廻の活躍をもっとも喜んでいたのはヴィセンテである。下級兵用のテントで休んでいるとヴィセンテが輪廻の肩を力強く叩いた。

「強い強いとは思ってたが…ここまでとはさすがに思わなかったぜ」「かなり、際どいところだったけどね」

輪廻はそう言っつて、ヴィセンテに自分の右腕の袖をまくって見せる。包帯に血の赤がにじんでいた。

敵の部隊に突入し乱戦したときの傷である。いつ致命傷を受けてもおかしくない。決して安全な戦いではなかったのだ。

「しかしまあ、生きてて良かったな」

「そういうヴィセンテはどうだったの？」

「どうすればいいか分からなくて、おろおろしているうちに終わっちまったよ」

そこにゴアーシュがやって来て、二人の隣に腰をおろした。

「大活躍だったそうじゃないか。さすがラディ・ダールトン。僕の親友だ」

「おいお前いつから親友になったんだ？」

「そついえばゴアーシュは？ ずっと見なかったけど」

「貴族たる僕の役目は後方から戦場全体を眺めることさ」

「そりやつまり後ろでブルってたってことじゃないか」

ヴィセンテが冷めた口調で言うと、ゴアーシユは顔を真赤にして声を荒げる。

「ししし失礼な！ ぼ、僕はシュトラウス家の人間で、5歳から剣の英才教育を受けた競技剣術のチャンピオンだぞ！」

「じゃあお前一体何してたんだよ」

「だから後方で」

「剣士が後方にいてどうすんだよ。お前の剣はそんなに長いのかよ」  
「まあいいじゃないヴィセンテ。誰だって初めてはうまくいかないよ」

輪廻が何の気なしにそう言うと、ヴィセンテとゴアーシユが同時に振り向いてぎょっとする。

「っーかお前がおかしいんだろ。何でいきなりそうぽんぽんと人が斬れるんだよ」

「そ、そうだよ。君、本当に一体どこで剣を習ったんだい？」

「というかお前、絶対初めてじゃねえだろ」

「そ、そんなことないよ。ほら、ヴァージニアだって、初陣なのにちゃんと前で戦ってたじゃない。ねえ、ヴァージニア！」

輪廻は部屋の隅で足を拭いているヴァージニアに声をかける。

ヴァージニアはちらりと三人の方を向いてから、何も言わずに視線を戻してしまう。

「……ご機嫌斜めなのか、疲れてるのか、俺には分からん」

「本当に ただの偶然だよ。たまたま軍神が降りてきたんだ」

「ふっ。そういうことにしておいてあげるよ」

ゴアージュが金色の髪を掻き上げる。  
ヴィセンテはその仕草を胡散臭そうに見ていた。

夜中、輪廻は一人で基地の外に出ていた。  
空は真つ暗で、駐屯地のあちこちに並んだ松明がぼんやりと森を照らしている。

ときおり見張り番の兵士たちが基地の周囲を巡回しているのが見える。

常に誰かが起きていて、敵の襲来に備えているのだ。

本来ならば昼の任務に備えて夜はすぐに寝るべきであったが、輪廻はなかなか眠れる気分になれない。

木の根元に腰を下ろしてぼんやりとしていた。

輪廻は自分の剣を抜いて刃を月にかざした。

曇った夜を背景にフェルミナ金属の刀身がぬるりと光っている。

世辞にも名刀とは言いがたい。

魔女の力で大量に加工されるフェルミナの剣は、切れ味を犠牲に、奇跡的な軽量化と大量生産を実現した。

生まれ変わる前に使っていた懐かしき愛刀とは比べるまでもないが、しかしこうして夜月に照らすとそれなりに美しく見えるものである。

異世界の月は、一見して故郷の月と何も変わらないように見える。

(……月だけじゃない。わたしがここでやっていることだって、前と何も変わっちゃいない。ただの人斬りだ)

気配がして輪廻は剣を鞘に収める。

振り向くとヴァージニアの姿があった。

「ここで何をしている？」

「別に何も」

ずいぶん深く心の奥に沈んでいたので、輪廻の声色は意外なほどにそっけなくなつた。

ヴァージニアは輪廻のそばに立ち、視線をしばらく輪廻と森の間でうろつると彷徨わせてから切り出した。

「ゴホン……ここ、いいか？」

「何が？」

「隣に座ってもいいかと訊いたのだ！」

「ど、どござい」

そうか、と満足そうに頷いて、ヴァージニアは輪廻の隣に腰を降ろした。

しばらく無言の二人。

「あの……」  
「な、何だ？」

輪廻が話しかけるとヴァージニアはびくりと反応する。

暗かったが、輪廻の目はヴァージニアの顔の細かな部分まで鮮明に捉えている。

「お前、ずいぶん活躍したな」

「……そうかな」

「古参兵たちもみなお前の話をしているぞ。初陣でああも活躍できる奴はいないだろう」

「ヴァージニアだって」

「私は……何もしていない」

搾り出すような声である。

「初めて敵と剣を合わせたとき手が震えた。恐怖で逃げ出しそうになった。……結局私は、一人も殺せなかった」

「そう……」

「だがお前は違った。何故だ？」

「何故、って」

「どうしてためらいもなく人を斬られる？」

「僕だって、人を斬るのは怖いよ」

輪廻は嘘を吐いた。

人を殺して感傷に浸ったことはない。

しかしヴァージニアはそれ以上の追求はしなかった。

(見透かされてるのかしら…)

「ラデイ。私は、人を斬るのが怖い。今までずっと軍人になるための努力をしてきた。剣の腕も、誰にも負けないつもりだった。お前に会うまではな。だが今、私はたまらなく怖い。どうすればいい？

どうすればこの恐怖はなくなる？」

「…無理に人を斬る必要はない。その時が来れば、斬らなきゃいけなくなる。だから今は」

「ラデイ！ 私はお前と一緒に戦いたいんだ。私はお前の背中を守る戦士になりたいんだ…だから…」

輪廻はヴァージニアの手を握った。

彼女はハッとして輪廻を見る。

もはや輪廻は、自分が今は男の体であることを忘れていた。

「…たとえヴァージニアが人を斬らなくても、君は僕の仲間だよ。だから」

(どうせだから、あんたはそのままでもいいさ)

輪廻はヴァージニアの手を離して立ち上がる。

「それじゃ、おやすみ。ヴァージニアも早く寝た方がよいよ」

あくびをかみ殺しながら輪廻はテントに戻った。

翌朝輪廻は隊長のテントに呼び出された。

アブリルは立派な木の机に行儀悪く尻を乗せて足を組んでいる。

すらりと伸びる長い足は陸戦の兵士としては不思議なほどに色が白い。

一年中太陽が陰る、黒の森で戦う兵士の特徴である。

隣には補佐官のリンドが控えていた。

「リンド。下がっている」

リンドは黙って一礼するとテントを出た。

アブリルとは不釣り合いなほどに寡黙である。

すれ違うとき、リンドが輪廻の横顔をちらりと見たのが分かった。

リンドが出ていったのを確認して、アブリルは口を開いた。

「さてラディ・ダールトン。何はともあれ、まずはお前を褒めてやる。昨日はよく戦ったな」

「それは何度も聞きました」

「人が褒めてやってるのにもうちよつと嬉しそうにしたらどうだ」

「……恐縮です」

「くふふふ。オレは嬉しいぞ。お前は雛鳥なんてシヨボい鳥じゃないな。巨鳥グイードかドルホルノか。どちらも伝説の鳥だ。お前は  
お前を何にたとえられたい？」

アブリルは嬉しそうに笑っているが、輪廻はどんな表情をすべきか分からない。



愛想笑いでもすればいいのか？

「あの、話が見えないのですが」

「ああ？ お前人の話聞いているのか？ 喩え話だよ。お前は少なくとも雛鳥じゃあない。じゃあ何なのかということ、オレはお前に聞いているんだ」

「何なのかと言われても、ただの兵士ですよ」

「はっ。つまんねー男だ。でもまあそういう簡潔なところは嫌いじゃないな。軍司令部の貴族共に比べれば」

「……あまり軍を批判するようなことを言うと、反逆罪で捕まりますよ」

「ここにはオレとお前しかいねえじゃねえか」

「いえ、僕がいるから、言っているんです」

なははは、とアブリルは爆笑した。

「ねーよ。お前はオレを売らない。それとも、オレを売って、二番隊の隊長になりたいか？」

「なりたいた言ったらどうします？」

「お前を殺す。…というのは冗談にしても、お前に隊長としての能力があれば、お前が望もうと、嫌がろうと、お前を隊長にするさ。

軍つてのはそういうところだ。オレだって、なりたかったから隊長になったわけじゃねえしな。たまたまオレが最強だったただけだ」

「そうですか……。では隊長は、どうして軍人になったのですか？」「借金取りから逃げてきた」

（ああ…なるほど）

思わず納得する。

何がどう「なるほど」なのか、輪廻自身うまく説明できなかったのだが。

「隊長なら軍人でなくとも何でもできそうですね」

「そりゃどういう意味だ？」

「才能に溢れている、ということですよ」

「褒めてるんなら不要だぜ。強いつてのは聞き飽きたし、当たり前すぎて何の意味もない。お前、『あなたは人間ですね』って言われて嬉しいか？」

「強いだけじゃなくて、隊長はすごく可愛いですよ」

ズテン！と隊長は盛大に机の後ろに倒れた。

頭から床に落ちて、足だけが見えていた。

やがて立ち上がると真っ赤な顔をして輪廻の方を見た。

「な…な…な…か…う…く…」

パクパクとアブリルの口だけが動いて言葉が出ていない。

驚いたのは輪廻である。

まさかここまで過剰に反応されるとは予想外すぎた。

（この女に言いくるめられるのが嫌で反撃してみたっていう軽い気持ちだったんだけど…こ、効果覲面ね）

輪廻は自分が、客観的に見て女たらしそのものであることを自覚し始めていた。

（昨日のヴァージニアといい、今日のこの女といい、わたしは一体何をやっているのかしら）

とはいえ、アブリルの外見が可愛いことは事実である。  
輪廻がいささか嫉妬を覚えるくらいには。  
せめて剣の腕だけでは勝りたいものだと言った。

それから長い時間をかけて、アブリルは普段の自分を取り戻した。

「ん。悪かったな。さて、何の話だ？」

「いえ。本題にはまだ……」

「そうだった。本題だな」

アブリルはじつと輪廻の顔を見つめる。

「喜べ。今日からお前はオレとチームだ」

黒の森のずつと北の平原で、帝国軍中将カリナ・エーデルとイー  
ズが話していた。

二人はそれぞれの馬に乗り、イーイズは荷物を載せたもう一頭の馬  
を手綱と逆の手で握っていた。

カリナはずつと地図を睨みつけている。

ときおり顔を上げては地平線の方を見つめる。

「……………おい」

イーイズが低い声で話しかける。

カリナはイーデルの方を向いて彼の疑問に答えた。

「道に迷いました」

「三日も馬で歩き続けて未だに草原しか見えないことを考えれば子供でも分かる事実だな」

「おかしいですねえ：この道で良かったはずなんですが」

「どこがだよ！ ていうか道ねえよ！ 見渡すかぎりの草原だよ！ 森どこだよ！」

びゅうと冷たい風が吹くと、二人のいる草原が波打った。正しい道のりであれば通るはずのない草原である。

あはは、とカリナは乾いた笑い声を上げる。

イールズは頭を抱える。

「……っ！ かなんで二人だけなんだよ」

「ただの交代人事なんですから仕方ありません。それに私の護衛はあなたがやってくれます」

「あなたがふらふら変な道を進むから、もう何回も盗賊に襲われたしな」

「あなたの活躍はしっかりと見せてもらいましたよ。戦略兵器の名に恥じぬ腕です」

「お前はただ立ってただけだったな」

「自慢ではありませんが私は剣で鶏肉を切ることもできません。ちなみに教練では剣の成績は最下位でした」

「ほら、地図を寄越せ。ここからは俺がガイドをやる」

「あ、だめですよ。進路を決めるのは私の仕事ですから。戦闘も先導も部下に任せてしまつては上官としての立場が」  
「いいから寄越せ！」

帝国軍の新しい士官は、未だ黒の森に到着していなかった。



10・修羅のごとく(後書き)

輪廻「また、つまらぬ者を斬ってしまった」

## 11・アンアデール要塞攻略作戦

アブリル・ヒルマンと輪廻、ヴァージニア、ヴィセンテ、ゴアーシユの五人は、同じチームとして活動することになった。

これは、新兵三人を、実力者であるアブリル、輪廻の二人がカバーすることを狙っていた。

アブリルの経験上、二番隊の死者の半数は配属されたばかりの新兵である。

普通は新兵をひとつのチームに固めたりはせずに、それぞれのチームの古参兵が新兵の面倒を見るといふ形になっていた。

だがこのところの戦闘で古参兵の戦死と他の部隊への転属命令が続出し、もはや従来の編成が破綻しかけているところであった。

ところが今回は、輪廻という超の付くほどの技量の持ち主が二番隊に来たため、このような配置を思いついたのである。

「 というわけだ、ラディ。お前はオレの補佐をやれ。副班長だ。せいぜい役に立てよ」

「 いいんですか？ 隊長自らが前に出て」

「 オレが死んだらリンドが指揮をとる。それにオレとお前の腕だ。そうそう死ぬことはないだろ」

「 ……そんなに楽な話じゃないと思います。殺し合いですから」

「 殺し合いなんて甘いもんだぜ。それが分からねえからお前はまだ

成鳥になれねーんだよ」

翌日、アブリルは二番隊全員に対して、正式にチームの再編成を宣言した。

ちょうどその日、王国軍東部方面軍に対して、帝国軍の拠点であるアンアディール要塞の攻略作戦が発令されたのである。

二番隊のチームリーダーたちに対して作戦の概要を説明した後、アブリルは自分のチーム全員をテントに集めた。

輪廻は他の仲間の表情を横目で見る。

ヴァージニアはいつもの通りの無表情だったが、ゴアーシユは美女二人と同じチームで戦えるのが嬉しいのか喜色を隠せていない様子である。

ヴィセンテは二番隊の隊長を目の前にして居心地悪そうにしている。基本的にヴィセンテは上官とか上司の類が苦手なのである。

「まあ簡単に説明すると」

アブリルは机に地図を広げる。

ちなみに隣では補佐官のリンドが書類仕事を黙々とこなしていた。



「オレたちは陽動部隊だ。まっすぐ前進して、敵部隊と交戦して釘付けにすればいい。要塞の攻略は別の部隊がやることになってる。別に難しいことじゃねーだろ」

アブリルの口調は投げやりだ。

要塞攻略の仕事を精鋭の四番隊に取られて機嫌が悪いのである。

「本当ならこのチームでの特訓をするべきなんだろうが、あいにく時間がない。お前たちは一応、一度は実戦を経験しているわけだし、オレとラディがサポートにつくから、なんとかやってくれ。…何か質問は？」

「……どうしてラディがあなたの補佐なのですか？」

質問したのはヴァージニアである。

「何だ？ オレの人事に不満か？」

「いえ、そういうわけでは……」

「理由なら別に難しいことじゃない。オレがこいつを気に入ったからだ」

「『気に入った』」

機嫌が悪いのでなおざりな答だった。

気に入ったというよりは、単に輪廻の剣の腕を買っての人事である。

しかしヴァージニアは、アブリルの中途半端な説明を聞き、ぎりりと唇を噛み締めている。

「ふふ、隊長のご期待に添えられるよう誠心誠意戦います」

と、威勢のいい返事をしたのはゴアーシュである。  
だがアブリルの反応は冷たかった。

「戦いに誠意なんざいらん。とはいえお前の噂は聞いてるぞ。競技  
剣術ではそれなりに鳴らしたらしいな」

「はい。隊長の背中はこの僕がお守りいたします」

「それはラデイがやるから必要だが……ま、あまり己の腕を過信  
するな。お前みたいなのが一番死にやすいんだ。オレの経験上な」  
「はい……」

「シュトラウスね……名門貴族がなんでこんなところにいるんだ？」

「あ、あの……それには色々と事情が……」

「ま、オレにはどうでもいいことだが」

「すみません……」

ゴアーシュの熱がどんどん下がっていくのが見て分かった。  
そういえば、とアブリルはヴァージニアに視線を向ける。

「キャスカート家のご令嬢もうちのチームだったな。ははっ、よく  
考えたらすげえチームだ。お坊ちゃんにお嬢様か。政治力だけは百  
点だな」

「家は関係ありません」

凜としてヴァージニアは言った。

アブリルがヴァージニアの顔をじっと覗き込む。

「あん？ 何だお前、家出してきたのか？」

「違います。それに、お嬢様などと呼ばれるのは心外です」

「ははっ。プライドを傷つけちゃったかな？ しかし悲しいかな、  
プライドってもんは力がなきゃ守れねえものなのだ。お前はどうか  
？」

「力で示せとおっしゃるのですか？」

キツ、とヴァージニアはアブリルを睨んだ。

はっはっはとアブリルは可憐な外見に似合わぬ豪快な笑い声をあげる。

「いいぜ。だったら今から臨時訓練だ。お前たちのプライドを

へし折ってやる。全員、装備を整えて表へ出る！」

「隊長！」

事態がとんでもない方向に行きかけて、輪廻は慌てて声を上げる。

しかしアブリルは一顧だにしなかった。

「いいんだラディ。というかオレは、お前と一番やってみたかったんだぜ」

凶暴な笑顔を向けて、アブリルは小声で輪廻に答えた。

カリナ・エーデルが第3師団に合流したとき、王国軍はすでに不審な動きを見せていた。

着任早々カリナは会議室に部下を集めた。

司令部は、黒の森の後方の安全な地帯のとある古城に置かれていた。配下の斥候と諜報員から集めた情報を地図の上に並べる。

第3師団の幹部たちがカリナに向ける視線には、好奇か、嫌悪か、軽侮かのいずれかが含まれている。

それを敏感に感じ取ったイールズが敵意を剥き出しにしかけたが、カリナはさりげない仕草でそれをたしなめる。

その程度の反応はこれまで何度も経験済みだった。

(…アンタがそうしろっていうなら、俺は何もしないぜ)

イールズはやれやれと手を上げて、部屋の壁にもたれて腕を組む。

「なるほど…王国軍のこの部隊に、森を進軍する兆候が見られると  
いうことですね」

「当面の我々の仕事はこれを撃退することにありますよ」

下士官の一人が穏やかな口調でカリナに言った。

しかしカリナは眉を寄せて黙って考え始める。

やがてポンと手を打ち、次に発した一言が一同を驚かせた。

「うちの師団から他所に増援を送りましょう」

「お待ちください！ 要請もないのに増援を送るなど……それに増援を送ったら、森の王国軍はどのようになるのです!?!」

「ああ、どうせ森の部隊は陽動なので、それほど気にしなくても大丈夫だと思いますよ」

「なぜそう思われるのです?」

簡単ですよ、とカリナは退屈そうに答える。

「森に進行してきた場合の、敵の戦略が意味不明です。仮に戦術的に森を攻略、制圧したところで、王国軍の補給線の関係上、維持することができないからです」

「しかし陽動であるという確かな証拠は」

「そう考えた場合の敵の真の狙いは、戦略上の要所であるブリックス街道か、補給の拠点となるアンアデール要塞のどちらかです。この二つは、こちらの部隊が森に釘付けにされたとして、わたしたちが陽動に気づいて引き返しても、ぎりぎり陥落までに間に合わない距離にあるからです。逆に、それよりも遠い場所を狙っているのであれば、わたしたちに対して陽動を仕掛ける意味がありません。他の師団が駆けつけますからね」

「こことここ、とカリナは地図を指さす。

事実、王国軍にはそれら帝国の拠点を攻撃するだけの兵力が近辺に存在する。

「大穴でこちらの司令部を直接衝いてくる可能性もありますが、向こうにそんな大博奕を打つ兵力はないでしょう。仮に失敗したら東側の防衛線が崩壊、帝国軍の大軍が王国領になだれ込むわけですから」

「しかし」

なおも異を唱える老下士官を無視してカリナは続ける。

「私の勘ではアンアデール要塞の方に来ると思いますが。ここを落とせば補給線の問題が解決して、王国軍は黒の森を占領、維持し続けることができるようになりますから。戦況によっては黒の森の陽動部隊をアンアデール要塞の補給路を断つのに使うこともでき

ますしね」

「勘だけで持ち場を勝手に離れるなど」

「もちろん勘だけでそんな危険は打てません。用兵というのは安全に勝つことを目指していますからね……だから第3師団は、ブリックス街道とアンアディール要塞の両方に部隊を送ります」

「そんな暴挙が許されますか！ それでは王国軍の陽動部隊をどのように対処するのです」

若い下士官が大声で怒鳴った。

はあ、とカリナは曖昧な声で頷く。

「それについてはご安心ください。ポイントは、王国軍には最初から森を占領する意志がないということですよ」

「大体……あえて他の部隊の手助けをすることもありません。それでは我が部隊の功績が」

「森に足止めされると第3師団がまるごと遊兵になってしまいますよ。それでは戦場全体で帝国軍が数の上で不利になってしまいます。仮に要塞が落ちたら、森への王国軍の大攻勢の引き金になりかねません。そんなことになるよりは、ずっと良いと思いますよ」

他に質問は？ とカリナは一同を見る。

皆いずれも納得の行かない顔であったが、異論はすべてカリナが受け流してしまった。

最終的には、

「……司令官殿がこうおっしゃられているのだ。仕方がありますまい」

というニール大佐の言葉に一同が頷き、カリナの案で部隊を動かすことが決定した。

不承不承な様子で下士官たちが退室してゆく。  
会議室にはカリナとイールズだけが残された。

「…いいのかい？ そんなことをしたら、手柄を他所に取られるぜ？」

「良いも悪いもないでしょう。軍人が、最善と思える采配をしなければ、それは罪です」

「いいのかなあ？ アンタ、春までに手柄をたてないとまずいんだろ？」

「…出世争いのために部下を無駄死にさせたら、私は地獄に落ちるでしょうね」

「敵を殺すのは大丈夫なのか？」

イールズが意地悪な顔で質問する。

カリナは、イールズがただ自分の味方をしてくれるだけの人間ではないことを理解していた。

さらにイールズは続ける。

「用兵つてのはいかに効率良く敵に血を流させるか、ということに知恵を絞るもんだ。あんたは優秀な用兵家らしいな？」

「それしか能がないものですから」

「あんたは部下を殺したくないという人道的な理由から、自分の出世を犠牲にする覚悟でいる。そのことと、敵の命を奪うことに、どうやって折り合いをつけているんだ？」

「……あなたが私なら、どうしますか？」

「俺は人を殺せればそれでいいんだ。まだ答えを聞いていないぜ。で、どうなんだ？ 敵は殺していいのか？」

「…帝国の皇帝陛下と国民を守るために、私は王国の人を殺します。その罪から逃げるつもりはありません」

「 上出来だ。安心しろ。アンタの手柄は俺が代わりにあげてやる」

イルズは何度か頷いて、飄々と部屋から出ていく。

その背中に向かって、カリナは、

「生意気」

と、幼稚な悪態をついた。

輪廻の目の前では、輪廻とアブリル以外のチーム全員が地面に倒れていた。

ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返している。

「へっ……お前たちまだまだ鍛錬が足りん……が……思った以上にはやるな。その点は認めてやるぜ」

訓練は熾烈を極めた。

というか、ヴァージニアとアブリルがやたらと張り合って勝手に自滅したというべきか。



ちなみにゴアーシュとヴィセンテはそれに巻き込まれた形だ。

輪廻は一步引いたところから訓練を眺め、力をほとんど抜いた状態で参加していた。

「ふう……さてダールトン。次はお前だ」

ふうと深く息を吐いて輪廻の方に向き直る。

あれだけ走りまわり、斬り合い、それでもなお訓練を続けるのだから恐ろしい。

輪廻は剣を鞘に戻し両手を上げた。

「……変わった構えだな」

「降参します」

「なぜ？」

「隊長の方が強いからです」

「嘘をつけ」

「いえ、本当」

輪廻が言いかけた瞬間、アブリルが一息で踏み込むと、下段から輪廻の顎に向けて剣を振り上げた。輪廻はそれを自分の剣で受ける。

鏢迫り。

アブリルと至近距離で見つめ合う。

「てめえ……何が降参だ。オレが斬り込むよりも、両手を上げてたてめえが鞘から剣を抜く方が早いじゃねえか……こんなデタラメや

つておいて、隊長の方が強いです、だと?」

ふぎけやがって、と苛立ちを見せつつも、アブリルは大人しく剣を収めた。

警戒しつつ、輪廻もそれに続く。

そのとき、ヴァージニアが体を起こした。

「……参りました。やはり隊長は、強い」

「当たり前すぎて何の感想も出てこないが……まあ、そう落ち込むな。お前は新兵にしてはやる方だ」

「今は勝てませんが。いつか必ずあなたに勝ちます!」

「良い気合いだ。楽しみにしてる」

「そして……必ず取り戻します」

ちらり、と輪廻の方を見たのは、果たしてどういう意味だったのか。

その三日後、陽動作戦のため、二番隊と三番隊は黒の森への侵攻を開始した。

対するは、カリナ・エーデル率いる帝国軍東部方面軍第3師団。

そして 毒蛇。

## 11・アンアディール要塞攻略作戦（後書き）

輪廻「いい加減ヴァージニアを恋人と勘違いしている奴うぜえ。恋人じゃないし。シャルロットの方がよっぽど恋人」

ゴアーシュ「恋人じゃなかったらなんなのよ」

輪廻「戦友…かな？ 俺はヴァージニアには萌えなんて感情は抱かないけど剣の筋に魅入られた」

ゴアーシュ「うわぁ……」

アブリル「（；；）……」

ヴィセンテ「（ノ、）」

## 12・共鳴

帝国軍の二度目の襲撃を受けて、一番隊と二番隊は密集隊形を組みこれを凌いだ。

散発的な射手による攻撃。

その後突撃の気配を見せるが、王国軍側が前進を始めるとすぐさま後退する。

「よつし止まれ！」

三番隊隊長、グレン・コールナーが遠くまで響くバリトンの声で部下に指示を飛ばした。

コールナーは三番隊の中でも頭ひとつ飛び抜けるほどの大男である。まるで丸太のような筋肉の塊の腕を振るえばひ弱な人間なら二、三人は簡単に吹き飛ばしてしまう。

しかしそうした外見とは逆に、戦場でのコールナーは常に慎重を期する性格だった。

むしろ、自分本来の攻撃性を知っているからこそ、理性の部分では全力でそれにブレーキをかけるようにしているのだ。

「二番隊の隊長を呼べ」

しばしの黙考の後、副官にそう命じる。

数分後、アブリル・ヒルマンが戦場には似つかわしくないスレンダーな体躯と美貌をコールナーの前に見せた。

アブリルはコールナーより一回りも年の若い女だったが、コールナー自身は他の三番隊の隊員たちとは違い彼女を高く評価している。

「ヒルマン。前進をやめて後退するぞ」

横柄にも聞こえる言い方は、コールナーの癖である。

アブリルは極悪人のように表情を歪める。

「異論はあるか？」

「……ま、ねーよ」

「不満そうだな」

「異論はねーけど不満っつーか、疑問はある。敵がこちらの進撃を誘ってるのは明らかだ。ちよくちよく現れて攻撃してくる割には、こちらが近づくとすぐに下がる」

その点は今さら指摘されるまでもなく互いに分かっていることである。

「気になるのは敵の数が少なすぎることだ。こっちは陽動で、全軍の半分もいねえつてのに、それより少ないんだぜ？ この間の戦いみたいに伏兵がいるって考えるのが当然だろ」

「同感だ。…それで、何が不満なんだ？」

「あからさますぎるだろうが。これじゃあ疑ってくれと言っているようなもんだ。前の戦闘であいつらを追い返してから何日も経って

ねえのに、まったく同じ手で来るって、そりゃいくらなんでもオレたちを舐めすぎだ」

不機嫌なアブリルの言葉を、コールナーは腕を組んで考える。

「…しかし、だからと言って、このまま前進するのは敵の思っ壺ではないか？ 仮に敵が伏兵を敷いていないとして、では敵の狙いは何だ？」

「それが分からねえからイラついてんだよ。大体、こっちの攻略作戦のタイミングに合わせて敵が妙な動きをしているのが気に入らねえ」

「敵にこちらの作戦が漏れたと言いたいのか？」

「…分かんねーけど」

「とにかく、このまま前進するのは犠牲を覚悟しなければならん。それに考え方を換えれば、敵がずっとこちらを狙っていてくれるのは陽動の上では好都合だ」

「……そうだな」

渋々といった様子でアブリルは同意する。

「後退すれば敵はこちらの後退に合わせて突出してくるはずだ。それに対して逆撃を加えて一気に敵を殲滅する」

「王国軍は後退際に突出したこちらの部隊に逆攻勢をかけるつもりです。無理な突撃は避けて、距離を取って射撃を続けましょう」

カリナ・エーデルはのんびりとした口調で部下に指示した。

王国軍の予想は核心に触れかけていたのである。

帝国軍東部方面軍第3師団は兵員の多くを他の師団へと派遣しており、現在黒の森で戦っているのは、師団の残存勢力のほぼ全軍である。

当然、王国軍が警戒するような、伏兵などの小細工を弄するだけの兵力も時間的余裕もなかった。

しかし陽動を行う王国軍の心理として、畏がないと確信するまでは無為な突撃は行わないだろうとカリナは予測していた。

万が一にも賭けに負けて王国軍が全軍を持って攻勢に出れば帝国軍は為す術もなく敗走させられていただろう。

もちろん最悪を避けるための第二案は用意していたが、王国軍の動きを見る限り当分の必要はなさそうである。

「なあおい。俺の出番はいつ来るんだ？」

槍を肩に載せ、退屈に耐えられないといった様子でイールズがカリナに話しかける。

「不測の事態が起きなければ、あなたの出番はありません」  
「ああそうかい。アンタがへボ用兵家であることを祈るぜ」

イルズはふてぶてしく言い返す。

イルズの槍は「暗黒」と表現する他ない、真っ黒な槍であった。槍先から柄まですべてが一色である。

特殊な塗料を使っているのか、その黒は光を反射せず、影のように見える。

イルズは立ち上がり、「影」を横に薙いだ。

カリナは槍の素人だったが、その姿にはわずかな違和感を覚える。

(なんだろう……まるで……「偽物」みたいな……)

イルズは準備体操のようにいくつかの格好で槍を扱った後、カリナに背を向けて歩き始めた。

「ちょっと待ってください！ どこに行くんですか」

「俺は俺でやりたいようにやらせてもらうぜ。敵の数が減るのはアンタにだって悪いことじゃないだろ？」

「司令官はわたしです。勝手に戦場を」

「戦場はアンタだけのものじゃない」

カリナに片手を上げて別れの挨拶をして、やがてイルズの姿は森の奥に消えていた。

小細工も虚しく、王国軍の誘いに帝国軍は乗らなかった。

その後、帝国軍が前進しないことに焦れた王国軍が反転して再度攻



勢をかけたところ、それに合わせて帝国軍が擬似突出を行い、王国軍が慌てて後退しようとした混乱に乗じてしたたかに打撃を加えていた。

もともと王国軍は陽動であり負けないための戦いをしなければならぬ以上、行動は慎重を極めるのは必至である。

帝国軍はその慎重さを逆手に取り、自軍の不利な点について罫と思わせることにより王国軍の行動を完全に縛ることに成功していたのだ。

これは帝国軍の指揮官であるカリナ・エーデルが王国側の思惑を完全に読んでいたからこそ可能となった芸当である。

王国側の指揮官も決して無能というわけではなかったが、戦略面での裁量を与えられていない以上、目の前の敵に対して戦術的に対処するしかなかったのである。

結果的に、王国軍は帝国軍の数倍の兵員を黒の森に釘付けにされたことになる。

この遊兵の差が、要所での戦場に必ず形となって表れるだろうということをカリナは確信している。

その後も王国軍は帝国軍を誘い出そうと、あるいは罫を看破しようとして躍起になっていたが、そのたびにカリナは王国軍の一手先を読み、のらりくらりとかわしつつも積極的に新たな局面を引き起こすことにより王国軍に全面攻勢の機会を与えなかった。

王国軍と帝国軍の膠着状態が続く中、アブリル・ヒルマンはリンド

より、部隊の一部と連絡が取れなくなつたと報告を受けた。

「2度も伝令を送りましたが帰ってくることはなく、3度目には斥候を送りましたがこちらにも消えました」

「…最左翼のチームか。敵の別働隊 って可能性は、ねーよなあ」

「いくら森の中と言えど、別働隊の襲撃があれば捕捉できます」

「見えない軍隊…か」

「あるいは敵の特殊部隊」

たとえそうだとしても、誰一人逃がすことなく隊の兵士を全滅させたとしたら、その戦力は尋常ではない。

二番隊の仲間が殺された以上、アブリルはその「幽霊」を討伐する方法を考えなければならなかった。

「……とりあえず、左翼の部隊を中央に呼び戻せ。いくつかのチームでグループを作り、密集して動くように。それから念のため三番隊にも警告してやれ」

「こちらから左翼に部隊を送りますか？」

「そうしたいんだが……」

アブリルの返事は歯切れが悪い。

こちらの部隊を左側に向けさせることが帝国軍の狙いである可能性もあった。

帝国軍の狙いが未だに分かっていない以上、ここはみだりに部隊を動かすことはできない。

「隊長」

そのとき、アブリルとリンドの会話を聞いていた輪廻が声を上げる。

「隊長、僕が偵察をしてきます」

「おいラディ」

止めようとしたヴァージニアを輪廻は手で制した。

「大丈夫。見てくるだけだから」

「しかし……」

「ちよつと待て。お前らだけで話を進めんな。隊長のオレがまだ許可してねえだろっが！」

「許可しないんですか？」

「うむ……。よし、許可する」

「隊長！ 私も行きます」

「俺も行くぜ」

「それは駄目だよ」

輪廻がやんわりとヴァージニアとヴィセンテに言った。

「これはあくまで偵察だからね。僕一人で身軽に動ける方がいい。

それに、みんなでここを抜けると戦列に穴が開く」

「けどよ、ラディ」

「そう心配するな」

輪廻の代わりにアブリルが言う。

「こいつで駄目なら、お前たちが行ったところで意味がない。本当ならオレも行きたいが、ここを動くわけにはいかんしな。……ダールトン、必ず戻れよ」

「ラディ！」

「大丈夫だよヴァージニア。…それでは」

輪廻は剣を取り、防具は軽いレザーのアーモアだけで、単身乗り込んだ。

「……っ！かあいつ、オレが言ったのを無視しやがって、キャスカートにだけ返事してたな。…まあ別にいいんだけど。…ん？ 何だこれ。 ああっ、やめやめ」

アブリルは頭を振って意味のない思考を追い出した。隊長として考えなければならぬことが山積みだった。

輪廻は味方の消息が消えた地点にたどり着いた。

広い間隔で王国軍兵士の死体が倒れている。顔を確認すると、二番隊で何度か顔を合わせた男たちだった。

死体はいずれも一撃で殺されていた。心臓に小さな傷。

剣を刺したか、あるいは別の得物か。

銀色のプレートメイルに穿たれた穴の周囲に乾いた血がべっとりとこびりついている。

どのような武器を使ったにしろ、フェルミナの鎧越しに心臓を一撃で貫くのは容易ではないだろう。

深呼吸をして剣を抜いた。

臨戦態勢。

居合とは、刀を鞘に収めた不利を埋めるための術理。  
たとえ輪廻に居合の心得があるとはいえ、この敵に対してそれで互角に渡り合えるとは思えぬ。

最高の条件、状態で戦って、果たして勝てるだろうか。

死体が野ざらしにされているということは、三度も送った伝令と斥候は死体を見ているはずである。

であれば、彼らは死体を見て逃げ出したはずである。

そして、「敵」は彼らを逃さなかった。

(つまり……わたしも、敵に見つかっていると考えるべきだわ)

いつどこから襲ってきてても不思議は。

輪廻の思考はそこで途切れる。

自分以外の人の気配を感じて、そちらに飛び込んで斬りかかろうとした。

ヒュン、と風を切る音。自分の剣ではない。

それが一瞬、細長い影に見えた。

(槍　　！！)

その突きをとっさに剣で払う。

火花が散って、互いの武器の向こうに、相手の顔が見えた。

手足の長い錆色の髪の男。

予想外に出会えた輪廻を好敵手と認めたのか、男の顔には喜悦がわずかに浮かんでいた。

一見して獣のように獰猛な男であった。

しかし獣の皮の下にある、どうしようもなく理性で人を殺す部分を、輪廻は敏感に嗅ぎとっている。

鼓動が一瞬で沸騰する。

(こいつは……危ない)

ヴァージニアには偵察してくるだけだと言ったが、この男から戦わずに離脱できるとはとても思えない。

そして戦ったが最後、この男に殺されるか、この男を殺すか、どちらかにひとつだろう。

おそらく引き分けはない。

余計な感情は一瞬で機能を停止する。

輪廻の中にも存在する、どうしようもなく理性で人を殺す部分が、男の武器を瞬時に観察した。

まるで影をそのまま持ち歩いているような、光のない槍。

材質は不明だが、さきほど打ち合わせた感覚ではおそらく何かの金属。  
属。

形状は直線的で、長さも、通常の槍とほぼ同じ。槍先は反りのない両刃で、枝はない。使い方を見ても、特殊な用途はないと判断できる。

輪廻は柄に力を込めた。

槍に対する剣は、長さの違いだけで著しい不利となる。

相手は構わずに攻撃を続ける。

輪廻は二回目の突きを上から切り落とすようにしていなし、その隙をついて相手に肉薄した。

剣士の槍兵に対する勝機は得物の振れない懐に入ることである。

しかし。予感。

(あ　　まずい)

緊急脱出。

輪廻は体をひねり、とにかく相手から離れようと、姿勢を低くして横に飛び出した。

頭上を槍先がかすめる。

剣を振り上げて打ち合わせ　　剣戟が響く　　さらに後退した。

相手の追撃はない。

輪廻は汗をかいていた。半分以上は、冷や汗である。

(あのまま行っていたら、死んでいた)

あの構えは「剣士殺し」である。

わざと隙をつくる一撃を放ち、敵が槍の懐に入ろうとしたところで、槍を短く持ち替え、相手が剣を振るよりも早く二の槍を放つ。

（けど、この技は、あの男の　　）

戦慄した。

相手も同様だったのか。輪廻の方を見て、かろうじて槍を構えてはいるものの動かない。

いくつもの可能性が頭をかすめ、結局、ひとつを除いてすべてが死んでしまった。

「斧原一心……団長」

か細い輪廻の声を聞いて、男は穂先を地面に向ける。

「お前、緒神輪廻か」

言葉よりも、打ち合わせた得物の手応えが、互いの正体を雄弁に証明していた。



## 12・共鳴（後書き）

輪廻「僕が偵察に行くよ」

ヴァージニア「いや私が」

ヴィセンテ「俺が行くぜ」

アブリル「隊長のオレが行くしか」

ゴアーシュ「…じゃあ僕が」

一同「どつぞどつぞどつぞ！」

王国軍の要塞攻略作戦は失敗した。

要塞に対する襲撃と包囲には成功した王国軍であったが、帝国軍の数が予想以上に多かつたことと、帝国軍の別働隊が王国軍の補給線に度々の奇襲を仕掛けたことで、王国軍のマイルズ司令官は作戦の続行を断念した。

この判断には王国軍内から反対意見が噴出した。陥落させるには至らずとも、前線での戦術レベルでの優勢は未だに王国軍にあったのだ。兵士たちの士気も高かった。

実は総司令官のマイルズも継戦を望んでいたのだ。しかし作戦会議で、このまま要塞を陥落させられずにいれば、黒の森が突破された場合、帝国軍に王国領内に侵攻されて二正面作戦を強いられる可能性があることを部下に指摘され、やむなく中止を命じたのである。黒の森に残してきた陽動部隊には、帝国軍の攻勢を長時間支えられるだけの兵員も補給もないと考えられたためである。

実際のところ、黒の森の帝国軍には陽動部隊を突破するだけの戦力はなく、包囲部隊が対峙していた要塞の駐屯軍がこの方面における帝国軍のほぼ全軍であった。王国軍は帝国軍の戦力を過大評価していたのである。

マイルズは、王国軍の退却に、要塞内部の帝国軍が沸き立つ声を聞いた。

王国軍がもう少し帝国軍よりも多勢であったならば、最初の襲撃で速やかに要塞を陥落させていたかもしれなかったのだ。

マイルズ司令官の握りしめた拳が屈辱に震える。

作戦失敗の報を受けて、黒の森の二番隊と三番隊も攻勢を中断し大きく後退した。

戦死者の数自体は少ないものの、戦場の状況が刻一刻とめまぐるしく変わるため、いちいちそれに対応させられた王国軍は休むこともままならず、後退を完了した際には安堵のために倒れる兵士が続出した。

今度こそ活躍しようと思気込んでいたヴァージニアだったが、そもそも今回の戦闘はまともな敵と斬り合う機会すらほとんどなく、この戦闘はただの徒労だったというのが実感だった。

ヴィセンテも、自分の内に秘めた戦意を爆発させる機会を失って、その日の夜は興奮が冷めずに眠れぬ夜を過ごした。

もどかしさを感じているのはゴアーシユも同様で、苛立ったヴィセンテとの間で何度も不毛な衝突を繰り返すことになった。

喧嘩のたびにヴァージニアに諫められた二人である。

帝国軍に弄ばれるかのように右往左往させられたことで、二番隊隊長アブリルの不機嫌は頂点を極めていた。いや、不機嫌の理由は帝国軍だけではない。輪廻の報告である。

「姿の見えない部隊」の偵察から戻ってきたときの輪廻は様子がおかしかった。敵とは遭遇せず、という報告もどこかぎこちない。その点を追求したアブリルだったが、輪廻は何もなかったの一点張りで、そういう普段と違う強情なところがまた怪しい。

(くそつ、一体何だよ……)

アブリルは不機嫌だった。自分が不機嫌である理由がよく分からないことも機嫌をさらに悪くしている。

輪廻のことを考えると顔をぶん殴りたくなる。

しかし一方で輪廻の腕を完全に認めている自分もいる。

(…何でオレに相談しねーんだよ)

結局のところ、アブリルが不愉快なのはその一点なのである。

帝国軍は勝利に沸き立っていた。

このたびの戦場では、カリナは王国軍をほぼ完全に統制下に置くことができ、帝国の勝利のために自分はほとんど満点に近い働きができたと自負している。

カリナに反抗的だった一部の参謀たちも、勝利をもたらしたカリナに表立って逆らうことはしなくなった。

また、援軍を送った要塞の司令官に貸しを作ることもできた。今後はいろいろなことが今よりもずっとやりやすくなるだろう。

(そう、問題は王国軍じゃない)

もし自分に帝国軍の全権を与えてくれるなら。  
カリナは一年以内に王都を制圧する自信がある。

もちろんそのような根拠のない自信は凡庸な無数の用兵家たちですら抱くものである。  
そして国家はそのような個人の幻想に無制限に権限を与えてくれるわけではない。

しかし何はともあれ、第一の課題は帝国軍内の掌握なのである。  
自軍の掌握すらできない者が外敵に勝てるはずもない。

カリナはそこまで考えて、やはり頭に浮かんでくるのはイーブルズのことであった。

今回の戦場で、カリナが認識している範囲で最大の不確定要素がイールズであった。

そのイールズが、一度の出撃から帰ってきたきり、亀のように大人しくなってしまったのだ。

出撃前にぎらつかせていた闘争心もまるつきり失っているように見えた。

あれだけ自分の出番を欲していたイールズが、帰還してからは何一つカリナに要求しなくなった。

戦闘中、カリナは王国軍を統制するのに時間と知恵のすべてをつぎ込まなければならず、イールズの態度を不審に思いつつも彼を問い詰めることはできなかった。

しかし頭の片隅では常にイールズに対する不審と不安が渦巻いていたのだ。

戦闘が終わった夜、黙って自分の寢床に引き下がろうとしたイールズをカリナが呼び止めた。

「待ってください」

カリナは自分が驚くほどの不機嫌な声を出していた。

イールズは形だけの笑いを浮かべて振り向く。

「ずいぶんと機嫌が悪いんだな、アンタ。勝ったってのにその仏頂面は何だ」

「あのとき、あなたは単独で王国軍に乗り込んだ。そこで何があったんですか？」

「別に何もねーよ」

「そうでしょうか。『毒蛇のイールズ』。あなたの噂はたくさん耳

にしていますよ。その噂と、今日のあなたの働きには、大きな隔たりがある」

「噂には尾ひれがつくもんだ。それに敵の小隊を二つばかり皆殺しにしたんだ。兵士ひとりの働きとしちゃあ十分だろう」

「ええ、もちろんその通りです。しかしあなたに求められているのは兵士ひとり分の働きではないし、ましてやあなたはこれまでも求められた分の働きをこなしてきたはずですよ」

それは、戦略兵器としての。

「……あなたを帰還させ、その後一切出撃させなかったものに、あなたは王国軍で出会ったのですね。それは一体何ですか？」

イールズはばつが悪そうにわずかにうつむいた。

長い長い沈黙が続いたが、しかしイールズは決してカリナの追求からは逃げようとはしなかった。

「……昔の知り合いに会ったんだよ」

「王国軍に、ですか？ 見逃したのですか？」

「だったらどうする？」

別にカリナはそのことでイールズを責めようとは思わなかった。

もちろん利敵行為は許されないことだが、一人の敵を見逃したところで大勢に影響はない。

カリナがそう言うと、イールズは豪快な笑い声を上げた。

「はははははっ。アンタは本当に変な女だ。普通の軍人ならこの場で俺を取っ捕まえて即席の軍法会議にかけてるところだ」

「あいにくとわたしは会議が嫌いなもので」

「そうだな。作戦会議のアンタはいつも面倒くさそうだ」

カリナの場合、作戦会議は作戦を話し合う場になることはほとんどなく、単にカリナの考えた作戦を参謀たちに披露する場になっている。

それゆえに、カリナにとつての作戦会議は、自分の提案した作戦に反対する人間をいかに説得するか、というだけの面倒くさい場になっているのである。

イールズに揶揄されて、カリナはすました顔をして咳払いをした。

「安心しろ。別に知り合いだからって見逃したわけじゃない。まあ、半分くらいはそれだが」

「もう半分は？」

「見逃してもらった」

こともなげにイールズは答える。

「俺は昔そいつとずっと一緒に戦ってたんだ。だからそいつの技量はちゃんと分かってた。手加減をして勝てるようなやつじゃない。

無論、俺の槍がそいつに及ばないとは思わなかったがな。全力でやりあえば十中八九俺が勝つだろう。しかし確実に勝てる保証なんてものはない。十回やって、一回か二回は、負ける可能性があった。だから俺は、そいつを見逃すのと引き換えに、俺のことも見逃してもらったわけだ」

「ずいぶん弱気なんですね、蛇のイールズ」

「だから俺は今まで生き残ってこれたんだ。それにそいつは、そんなに簡単なやつじゃない。十回のうち一回しか勝てなかったとしても、最初にその一回を引き当てちまうような、わけのわからない部分があるんだ」



「…面白い人ですね、あなたをそこまで慎重にさせるなんて」

「そいつは女だよ。でも剣の技術なら一級だ。俺とまともにもやりあえるのは、俺の知ってる限りじゃそいつを含めて片手で数えられる程度しかないだろうな」

「その人は、どうして剣の道に？」

「……まあ、色々と込み入った事情があるんだ」

イールズは言葉を濁す。

他人の事情を勝手に暴くのを嫌ったのだ。

この男は意外とそういう細やかな部分での気遣いができるのだ。

「もしその人と戦うのが嫌なら、これからは」

「いや、変な気遣いは無用だぜ。久しぶりに会えて懐かしいとは思ったが、戦場で会ったら殺し合いをするのがルールだ。やつを見逃したのは情でも何でもなく、単に今は戦うべきじゃないと判断したからだ。……次に会うときは、確実にやつを殺せる方法を用意するつもりだ」

そう答えるイールズの顔に、カリナは獣のような本能と人間ならではの殺意が同居しているのを見た。

それじゃあおやすみ、と言い残して、イールズは大あくびをしながら去って行った。

真夜中、輪廻はテントの中で目を開けた。

意識は完全に冴え渡っている。

兵隊仲間たちの寝息を聞いて、全員が眠っていることを慎重に確か

めてから寢床を抜け出した。

夜の森の空気は湿気を含んで重厚感がある。

土を踏む音が静寂の中で非常に鮮明に聞こえていた。

空は木に覆われ、月明かりは届かない。

仲間たちのキャンプのはずれ、外と内を隔てる木の柵に輪廻は腰を降ろした。

どうせ暗闇ならば、目など閉じても開いても同じだ。

しばらく目を閉じて自分の呼吸音に聞き入っていた。

やがて、輪廻のものではない足音が森の奥から聞こえた。

暗闇の中でも、その男の気配だけはしっかりと認識できる。

「久しぶりだな、輪廻」

「そうだね、団長」

イルズが槍を肩に載せて立っている。反対の手に、布でくるんだ細長いものを持っていた。

輪廻は笑顔でイルズを迎えた。

それから二人は、隣同士仲良く並んで森を眺めながら語り合った。

「にしても驚いたぜ。お前、よりによって男か」

「そりゃ驚いたのはわたしだってそうだよ。おぎゃあと生まれてみれば股に見慣れないモノがついてるんだから」

「俺はてつきり、男に見えるだけの女かと思っただぞ。前のときのお

前もそんな感じだったしな」

「失礼なっ。緒神輪廻が歩けば町ゆく男どもはみんなハツとして振り返ったもんさ。だろ？」

「振り向いたやつなんかいなかっただろ。すれ違いざまにお前がみんな斬り殺していた」

「いくらわたしでもそこまで見境なしじゃありませんっ」

「へへっ…喋り方は昔のまんまだな」

声は男だから気色悪いつたらねえが、とイールズが続けて、輪廻がその脇腹を小突く。

輪廻が江戸で更場武術団として活動していたときと同じように、団員の緒神輪廻と団長の斧原一心は互いに軽口を叩き合った。

しかしイールズの片方の手はあの影のような槍を常に握っていたし、輪廻の腰には鞘に収まった剣がある。

輪廻は剣の柄に手を乗せるようなことはしなかったが、居合の達人である輪廻ならばイールズが奇襲しても十分に防げる速度で抜刀することができる。

それは逆もまたしかり。

輪廻が奇襲してもイールズはそれを槍で受けるだろう。

互いに心を許しても、自分の身の安全だけは決して明け渡さない。腹の底では常に仲間を敵に回す覚悟を。

それが、斧原一心が率いる更場武術団の在り方なのだ。

「それにしても驚いたよ。日本からこっちに生まれ変わった奴には会ったことがあるけど、まさかわたしの知り合いもこっちに來てるとは思わなかった」

「他にも江戸から飛んできたやつと会ったのか？」

「まあ、正確には江戸じゃないんだけど……」

輪廻はシャルロット女王を襲った九条愛型のことを話した。すべて話し終わらないうちにイールズはぼんと手を打った。

「ああ、あの五本差しのことが」

「知ってるの？」

「前に会ったことがある。同じ陣営だったかな」

「……確かそいつ、自分以外にも生まれ変わったやつがいるって知らなかったみたいだけど」

「そりゃそうだ。俺も生まれ変わりだってことはそいつには言っていないからな。お前も気をつけるよ。特に九条みたいなヤバい男には、あんまり自分の素性をべらべら話すようなもんじゃねえ」

「九条って一体何者なのさ」

「魔導同盟の実行部隊さ」

魔導同盟。

魔女の保護と魔女の力による国家間の均衡を目的に結成された組織である。

現在大陸に残っている組織の中でもっとも古い起源を持つとされている。

当時、大陸の覇権を争っていた七大国の部分的な同盟によって結成され、莫大な資金と人員が提供されたという。

現在もその流れを汲み、魔女の力が一国に集中しないよう国家間の調停を行ったり、魔女の力を持つ者が不当に扱われないように保護するといった活動を行なっている。

「でもあいつ、バリバリの武闘派だったよ？ あんなのが魔導同盟

にいるっての？」

「魔導同盟は表向きはただの調停機関だが、実際はああいうのをいくつも飼って暗躍しているらしい」

「嫌な話だね」

「それから、魔導同盟は魔女の力で作られた道具の回収もやってる。もし回収に応じないやつがいた場合は子飼いの武闘派を使って無理やり奪わせる。ちなみに俺が奴らと一緒にいたときは魔導具の回収が仕事だった。と言っても、魔導具は途中で俺が頂いたわけだが」

「え？」

「影の槍だ」

イルズが槍を持ち上げた。

天に突きあげたところで、槍は夜暗に溶け込んで鮮明には映らない。

「おかげで俺も魔導同盟に追われる身だがな。しかしこれはただの槍じゃない。魔女の力で作られた槍だ」

「普通の槍と、何が違うの？」

「それは言えん。戦場で会ったとき、確かめてみればいい」

イルズは不敵に笑った。輪廻もそれに応える。

「そうだ、忘れるところだった。お前にこいつを渡そうと思っていたんだ」

イルズは布でくるんだものを輪廻に手渡す。

輪廻は受け取り、布を取った。

わずかに反りのある黒い鞘。剣のように見える。しかし鍔はない。輪廻は剣を抜いた。

「これは……打刀……」

「に、見えるだろう。特注だぜ。俺がこの槍をいただく前に使っていた剣だ。九条も似たようなのを使っていたよな。やっぱり俺たちは昔の武器を忘れられねえんだ」

「もらつていいの？」

「俺はもつと良い武器を持っているからな」

輪廻は素早く刀を抜き闇の中に突き出した。

その抜刀の速度と剣筋の正確さに、イールズが口笛を吹いて囃し立てる。

刀を鞘に戻すと、なめらかな感触で滑るように収まる。

「すごいわね、これ。見た目はちょっと違うけど、手応えは刀そのものだ」

「それを使えば、多少は前の腕を取り戻せるんじゃないか？」

「ここの世界の剣は重すぎる」

「お前も槍を使え。槍は良いぞ」

イールズはそう言ったが、そう簡単に槍術家に転向できればそんなに楽な話はない。

斧原一心は剣、槍、弓、全てに秀でた武者だった。

そのとき、輪廻はキャンプの方から駆け寄るひとつの足音を聞いた。

「ラディイ！」

ヴァージニアの声だった。

走りながら剣を抜き、一飛びで柵を越え、イールズに斬りかかる。イールズは余裕を持った動作でその剣を槍で受けると、ヴァージニアが跳びかかった速度よりもずっと素早く後ろに下がった。

イールズが構える。

ヴァージニアは彼我の実力差をまだ理解していない。危険だ、と輪廻は思った。

輪廻はヴァージニアの前に立った。

剣は抜いていない。無防備な体をイールズに晒す。

「ラデイ！？」

ヴァージニアが戸惑った声を上げる。

イールズは構えを解くと、来たときと同じように槍を肩にかけた。そのまま別れの挨拶もなく、イールズは森の奥に跳躍した。

### 13・蛇（後書き）

よしわかった、説明しよう。

これは影の槍だ。

魔女が創り出した知恵のひとつ。いや、武器か。

人類が決して辿り着くことのできない魔女の英知として、魔女が我々に与えたものだ。

昔大陸で起きた大きな戦争の時に。あの時は本当…まいったよ。

さあ、まずは振ってみるか。

…ふっふっふ。

見ての通り、継ぎ目すらない美しいフォルムだろ？

懐かしいなあ…私も見るのは久しぶりなんだ。

一体どんな素材でできているのか調べればわかるだろうが、すまない、私には興味がないんでね。

詳しいことはまた魔女たちにも聞いてみるんだな、誰か知ってるんじゃないか？

神はこれを爪楊枝に使っていると噂を聞いたことがある。私はそんなところは見たことないがね。



#### 14・深淵に臨む者

「そうだ。ひとつ聞いておきたいことがあった」

「何だい？ 昔のよしみだ、スケベな話じゃなきゃ答えるよ」

「お前、どうして軍に入った？」

「そりゃ決まつてるじゃない。生活のためよ。生まれた家が思った以上に貧乏でね。金を稼ぐには、盗みをやるか、それこそ軍に入るしかなかったのさ。盗みはもうまっぴらだったからね、残った方を選んだのよ」

「そうかな。生まれ変わってまでお前が金に執着するとは思えんが。それにお前なら、金を稼ぐのにもっとマシな方法をいくらでも思いつくだろう」

「……何が言いたいのさ」

「お前は人を斬るために軍に入ったんじゃないかねえか？」

「まさか。あんたと一緒にしないで欲しいわ」

「いや、お前は俺と同じだ。お前は前の人生で一体何人殺した？」

お前の剣術は一体何を犠牲にして手に入れた？ 俺たちは自分の人生をすべて費やして殺しの技術を研鑽した。寝ているときも覚めているときも人を殺す方法を磨き続けた。そういう人間が集まっているのが更場武術団だったんだ。俺もお前も、ただ人を殺すこと、戦うことだけのために向かって生きていたんだ」

「……………」

「人を斬ることが全てだった俺たちが、人を殺すことを辞めてしまつたら、そのあとに一体何が残るっていうんだ？ 俺もお前も、未だに前世のことを忘れられねえのさ。だから殺し続けるしかねえ。」

斧原一心という人間が成したことは、人を殺す技術だけなんだから  
な」

「違う」

「お前も人を殺したときに高揚感を感じているはずだ」

「違う」

「人を斬るたびに昔を懐かしんでいたはずだ」

「だからって、わたしは」

「認めるよ。俺たちは人を斬ることしか、自分を証明できねえんだ」

わたしは 。

イールズの姿が消えてから、宿舎に戻ろうとする輪廻の腕をヴァー  
ジニアが掴んだ。

「待て！ ラデイ、今のは一体どういうことだ。なぜ帝国軍の兵士  
がこんなところにいたんだ」

「ヴァージニアこそ、どうしてこんなところに」

「ずっと眠れずにいたら、遠くから話し声が聞こえて見に来たんだ」

とんだ地獄耳だ、と輪廻は思った。

ヴァージニアはただの少女ではないのだと今さらながら思い知る。

彼女にだって、自分や、団長と同じような素質がある 。

暗い想像を振り払った。彼女にそんな生き方は似合わない。

「ラデイ。お前はこんな夜に何をしていた？ 誰かと待ち合わせか？」

「それは……」

「お前、あの男と一体何を話していたんだ？ その剣は一体どうした？」

「……ごめん」

輪廻は顔を伏せ、ヴァージニアの腕を振り払おうとした。その進路にヴァージニアが立ちちはだかる。

「答えてくれ！ お前は一体何を隠してる！？ どうして何も話してくれないんだ！？」

「ヴァージニアには関係ない！」

ひたり、と。ヴァージニアの表情が固まった。

その目に溢れそうなほどの悲しみを見て、輪廻は底なしの後悔をした。

「……ごめん。少しの間、一人で考えたいんだ」

ヴァージニアとすれ違い、輪廻はひとりで歩いてゆく。

彼女の足音を背中越しに聞く。

ヴァージニアが輪廻の背中を抱きしめた。

ヴァージニアの体温を感じて、じわりと温かいものが輪廻の内こみ上げてきた。

しかし心の底は驚くほど冷えている。人を斬り殺した後に感じるあの感覚だ。

「どうすればお前に近づけるんだ」

自分の背中に押し当てられた彼女の表情は見えない。  
しかし声には隠しようもなく涙が混ざっている。

たまらない愛しさが込み上げてくる。

この世界に生まれてきて初めての感情だったかもしれない。  
いや きつと前の人生でも、こんな思いは……。

(違う。わたしは、これを捨ててきたんだ)

「私はただ、お前のそばにいたいだけなんだ」

大切な硝子細工を壊さないように。

無垢なるものが闇に染まらぬように。

背中のぬくもりに未練を感じながら、輪廻は何も答えずに、何も漏らさないよう必死にこらえて、走り出しそうになるのを懸命に抑えて、ゆっくりとヴァージニアから体を離れた。

「ラディ！」

ヴァージニアの悲痛な叫びを無視することは、戦場で敵を斬ることよりも難しかった。

輪廻との真夜中の逢瀬の翌日、自室で休んでいたイールズはカリナ

に会議室に呼び出された。

イールズを連れてきた兵士が下がり、部屋の中でイールズとカリナの二人だけになる。

「あなたに確認しておきたいことがあります」

「何だア？ またあの話か？」

「そのことではありません。昨晚のあなたの行動についてです」

ずばりと本題に入り、カリナはイールズの表情をじつと観察する。

しかしイールズの表情に一毫の揺らぎもない。

前世において、彼はすでに鉄壁の精神を手に入れていた。

「昨晚、あなたがここを抜けだして、王国軍の野営地に向かったという複数の証言が寄せられています」

「つまり密告か。で、その目撃者とやらは夜中に一体何をしていたんだ？」

「…それはあなたには関係ありません」

図星か、とイールズは思った。

作戦会議の際、参謀の一部がカリナに向けていた悪意をイールズは敏感に感じ取っていた。

「答えてください。この間の件は見逃すこともできましたが、正式に報告が上がっている以上、曖昧な決着はできません」

「…単に偵察に行ってきただけだ」

「それでわたしが納得すると思ってるんですか？」

「俺の神とアンタの神に誓って、俺は誰のことも裏切っただけ」

「…分かりました」

沈痛な面持ちでカリナは頷いた。

「迷惑をかける」

「本当にそうですよ。ここに来てから神経を使いつぱなしです。あまり自由に動き回らないでください。いくらわたしでも庇いきれなくあります」

「いざつてときは俺を切り捨ててくれたって構わないんだぜ」

「まさか。あなたはわたしの命を守ってくれているんです。その分のお返しはしますよ」

「……アンタは本当、よく分からない人だ。出世欲の人かと思えば自分の手柄を簡単に他人に譲るし、かと言って無欲な平和主義者というわけでもない。そのくせ妙に義理堅いところがある。アンタは矛盾の塊だ」

「……わたしはただ、自分の信念に従って生きているだけです」

「けど、俺を助けるためにアンタも沈むっていうなら、そんな気遣いは不要だぜ。そりゃ俺の信念に反する」

「分かりました。考えておきます」

「ああ。それから」

イルズは声を潜めてカリナの耳元にささやいた。

「俺だけじゃなく、多分あんたのことも嗅ぎまわってる奴がいるぜ」

「分かっていますよ」

「そうか。不要な忠告だったな」

じゃあな、と手を振って、イルズはあえていつもの飄々とした態度を作って、会議室を出た。

基地の中をふらふらと歩いて、何者かの監視がついているのを確認した。

「ふん……少々深く関わりすぎたか」

監視者は問題ではない。

問題は常に、自分が何を求めているか、というところにある。

(自分の信念　か)

ゴアーシユはテントの中で故郷への手紙を書いていた。

本日は二番隊の隊員全員に休暇が言い渡されている。

多くの者は先日の疲れを癒すために体を安め、一部の者はさらに自らを鍛えるための訓練に励んでいる。

ヴィセンテは後者の人間で、朝から古参兵を相手にずっと剣の稽古を続けている。

剣の腕はともかく、体力と闘争心は人一倍あるヴィセンテは休むことなく稽古を要求し、古参兵たちを辟易とさせていた。

もちろんゴアーシユは、せっかくの休日のような汗臭いイベントで消費するつもりはなかった。

しかしここは前線である。王都のように娯楽施設など存在しないし、軍内でのナンパなどは憲兵に目を付けられる恐れがある。

というかすでに目を付けられているのである。

過去に、他の隊の女性兵士に言い寄ったところを目撃され、嚴重注意を受けたことがあった。

ゴアーシュが手紙で父に向けて、どうにか自分を前線勤務から後方勤務に変えるよう書いていると、テントの前をヴァージニアが通りかかったのが見えた。

ゴアーシュが声をかけるとヴァージニアは無言で振り向く。

「ヴァージニア……どうしたいんだい？ 顔色が優れないけれど」

「ゴアーシュは？」

「故郷へ手紙を書いていたところさ。君もどうだい？ 王都のご両親を安心させては」

「……いや、やめておこう」

彼女の声にはいつもの覇気がない。

そのまま立ち去ろうとするヴァージニアをゴアーシュは引き止めた。

「ラデイと何かあったのかい？」

ラデイの名前を出した途端にヴァージニアは分かりやすくうつろたえる。

どうやら彼女は相当に憔悴しているらしい、とゴアーシュは思った。

「……どうして分かる」

「だってヴァージニアはいつもラデイのことを見ているからさ」

「そ、そんなことはない！」

「それはどうかな？ 僕がいくら誘ってもぜんぜん相手にしてくれないじゃないか」



「ふん。私も軽く見られたものだ」  
「僕は本気だよ」

ゴアーシュがしばらく黙って真剣な表情を作ると、最初は呆れ顔だったヴァージニアも、徐々に困惑して言葉に詰まった。

「その……私は……」

「分かってるさ。ラデイが好きなんだろう？」

「いや……そういうわけでは……」

「ちなみになぜ分かったのかというと、ラデイの様子もおかしかったからピンと来たのさ。名推理だっただろう？」

「……私はただ、共に闘う者として、あいつの力になりたいだけだ」  
「剣も教えてもらったし？」

「そうだ。……なあゴアーシュ、お前はあいつのことをどう思っている？」

「……平民の割には剣の腕も良い、度胸もある、欲目もない。変な奴だな」

思わずそう答えてから、ゴアーシュは自分の口から出たラデイ・ダールトン評に驚いた。

なるほど。自分は彼をそんなふうに思っていたのか。

「なあ、ラデイが、私たちに何かを隠していると感じたことはないか？」

「あるよ。でもそれは、簡単に立ち入って良いものじゃないと思う。君だって僕たちに知られたくないことのひとつやふたつはあるだろう？」

「そうなのだろうか」

「あの野蛮人のヴィセンテだって、自分のことはあまり話したがない。でも僕は、あの野蛮人が僕を裏切ったとは思わないし、あの

男の事情を無理に聞き出そうとは思わないよ」

そもそも興味もないしね、とゴアーシユは続けた。

「しかし信頼している仲間なら、悩んでいることや苦しんでいることを打ち明けてもらっても」

「なるほど。ラディに信頼してもらえていないと思ってるわけだ。それが君の悩みなのかい？」

ゴアーシユがからかうように言うと、ヴァージニアは真面目くさった顔で頷いた。

今日のヴァージニアはゴアーシユに対して驚くほど素直である。思わず下心が鎌首をもたげそうになるのを自制する。

「……私は、ラディと共に戦うに値しないのだろうか」

「さてどうだろうね。そもそも彼には一緒に戦う人間が必要なんだろうか」

「どつという意味だ？」

「ただの思いつきだよ、忘れてくれたまえ。……そうだな、もし君がラディを諦めたら、遠慮なく僕のところに来るといい。話し相手にも夜の相手にもなるさ」

「剣の相手は？」

「それはヴィセンテに頼むんだね。……ねえヴァージニア。別に剣の腕がないからと言って、ラディのそばにいられないというわけじゃないだろう。むしろラディは君のことを大切に思っているからこそ一人で戦うのかもしれない」

「……だとしたら、それは悲劇だ。たった一人で戦うのは、とても苦しいことだ」

君だってひとりで戦おうとしているじゃないか。

言いかけていた言葉を飲み込むゴアージュ。  
なるほど、ラディとヴァージニアは、根っこのところでどこか似た者同士なのだ。

ひょっとして、ラディの方も、今のヴァージニアのように、同じ所でぐるぐるとさまよっているのだろうか。

「君は本当にラディのことが好きなんだね」

「ち、違う！ そういうことでは」

「分かっているよ」

顔を真っ赤にして怒るヴァージニアをからかうのは、返信の希望もない故郷への手紙を書くよりもずっと楽しかった。

王国軍の駐屯地から離れ、輪廻は一人で森にいた。

イールズから受け取った刀は凶器として申し分ない。

輪廻は刀を抜いた。

鞘に収めた状態からの神速の抜刀。

刀を返し二度切ってから再び鞘に収める。

居合の技を完全に取り戻すにはまだ時間がかかりそうだった。

外からは、静かに剣の修練に励んでいるように見える輪廻は、その実、心の中には大嵐が吹き荒れていた。

自分とヴァージニアは、歩んできた道があまりにも違う。  
ヴァージニアは正道を歩む者だ。  
対して、自分は……。

（わたしは、あの子を恐れているのか）

ヴァージニアを仲間だと思っているのは事実だ。  
もちろんヴィセンテや、ゴアーシユヤ、アブリル隊長や、二番隊の  
他の者たちも。

しかしそのことと、自分の素性をすべて打ち明けることはまったく  
別の問題である。

いやむしろ、ヴァージニアを仲間だと思っているからこそ、緒神輪  
廻のことを話すのが恐ろしい。

輪廻はふと、王都で出会った、この世界の人間で唯一自分の本名を  
知っている少女のことを思い出した。

シャロの純粋な目に映る自分は果たしてどんな虚像だったのだろう。  
そしてヴァージニアの目に、自分は一体どんな嘘を映しているのか。

ヴァージニアはきつと自分の生き方を許してくれるに違いない、と  
輪廻は思った。

だからこそヴァージニアに打ち明けることは躊躇われた。

彼女は、自分のような穢れた存在に触れてはならない。

そして輪廻は、自分が穢れていることを知りつつも、この生き方を  
変えることはできないのだ。

斧原一心と再会してそれを確信したのである。

（団長が聞いたら笑うだろうな）

いつから自分は仲間を求めるようになったのだろうか。

更場武術団は個別の人間が集まっていただけの集団であった。信頼はしても、互いのことを大切に思ったことはない。

しかし、自分は。

果たして師を、斬ることができるのか。

輪廻は陽が沈むまで夢中で刀を振り続けた。

そうしなければ、不安で潰れてしまいそうだったのである。

#### 14・深淵に臨む者（後書き）

ヴァージニア

「いい友情関係ってのには3つの『U』が必要なんだ…！ 一つ目は…『うそをつかない』だ。2つ目は『うらまない』。そして3つ目は相手を『敬う』…いいだろ？ 友情の3つの『U』だ」

輪廻

「ヴァージニア…2度、同じことを言わせないでくれ。1度でいいことを2度言わなければならぬ…それは…そいつは頭が悪いって事だからね。3度目は言わせないでくれよ」

## 15・影の槍

イールズは特にやることもなく、ふらふらと帝国軍の基地の中を歩き回っていた。

すでに夜が更けており、官舎の周りに焚かれた松明が森の奥をぼんやりと照らしている。

戦場であろうと後方であろうと、影の槍は常にイールズの手元にあった。

イールズは立ち止まり、壁に背中を預けて静かに目を瞑る。

夜ともなれば起きているのは見張りの一部の兵士のみである。静かな夜だった。

空には満月。雲ひとつない。

しかしイールズは、誰かが自分のことをじっと観察している気配を鋭敏に感じ取っていた。

(……こいつ、カリナの部下じゃねえな)

昼間にイールズを監視していた者とはまるで匂いが違う。

あのとときの監視者にはもっと可愛気があった。おそらく諜報のプロではなかったのだろう。

(まあ、諜報のプロでもないやつに、抜け出すところを見られた俺が間抜けだったってことなんだろうが……)

それにしてもまいったな、とイールズは頭をかいた。

今彼を監視している者は、イールズに対して明確な殺意を持っている。

イールズの場合は他人の殺意に対して敏感であった。

もちろん人には殺意を感じ取る感覚器官などはないのだが、斧原一心だった頃に培った経験と直感が、イールズに警鐘を鳴らしていたのである。

(……来ねえな。しかし無視するわけにもいかねえ)

少し迷った拳句、イールズは一人で帝国軍の基地を出ることにした。

夜勤の兵士たちの見張りをくぐることなど問題ではない。

懸念されるのはまたカリナに迷惑をかけることだったが、今のこれは自分の生命がかかっている。

優先度としてはこちらが高いと判断した。

単身で森の奥に入る。

灯が見えなくなるまで歩き続ける。

森の木々が空を覆い尽くし、月明かりさえも届かなかった。



山道に入ったところで、尾行されているのを確認してイールズは臨戦態勢をとった。

「どうした、出てこい。ここなら人目を気にする必要もねえぜ」

囁くような大きさの声だったが、きっとこの監視者はもらさずすべて聞き取っているだろう。

この「敵」はそういう人間だ。

イールズは輪廻に対したときよりもさらに強い同類の予感を覚えていた。

木の影からゆつくりと、監視者が姿を現した。

全身を包帯で覆った人物だ。包帯の上からボロボロの黒い上着を着ている。包帯はゆつたりと全身を覆っているので体格は不明である。両手に武器の類は持っていなかったが、包帯や上着の中に何かを仕込んでいるのは明白であった。

「へえ、意外に素直だな」

イールズが口笛を吹いた。

男の目が包帯の間でギョロリと動いた。

「魔導同盟『執行者』十三賢人、”隠し盾”のツアルトリス」

聞きとるのも困難な、しわがれた男の声である。

ツアルトリスは名乗ってから、姿勢を低くして蜘蛛のようにイールズに近づいた。

イールズは槍を上段に構える。

「魔導同盟か。わざわざ槍を奪いに、戦場までご苦労なこつた」

命の奪い合いに臨む高揚感は隠し切れない。

ばやくように言いながらも、血液が沸騰しかけているように体が熱かった。

イールズも前に踏み込むと、ツアルトリスの体の中心を狙い高速の突きを放った。

敵の武器が分からない以上、懐に近づけるのは非常に危険である。近づける前に殺す。それが槍兵の鉄則である。

相手の前進に合わせたイールズの突きは、たとえ達人であろうと簡単にかわせる速度ではない。

イールズの槍を、ツアルトリスはわずかに半身を傾けただけで体に受けた。

手応えあり。

しかしそれは人を刺した手応えではない。

金属の表面をこすっただけである。

ツアルトリスの包帯の下には鎧があった。

「ふッ  
！」

瞬きをするほどの間に、二の突き、三の突き、四の突きを放つ。

狙いは眉間心臓首腎臓。

イールズの肉体はこれまでの彼の人生において最高の調子を見せて

いた。

はたして好敵手と出会えた精神の高揚がもたらした変化か、あるいは満月の魔力か。

月明かりさえ届かない闇の中で、イールズの瞳孔は限界まで拡大し、ツアルトリスの包帯の縫い目のひとつひとつもはっきりと見えている。

しかしイールズの突きは、ツアルトリスに致命傷を与えることなくすべて装甲に弾かれた。

イールズが続いて五度目の突きを放ったところでツアルトリスは横に飛び退いた。

森の中を縫うように移動し、すぐにイールズの死角に隠れる。

敵を追ってイールズは走った。

(なるほどな……面白い戦法もあるもんだ)

ツアルトリスの服装は装甲を隠すためのものであった。

しかし装甲と言っても、それは薄い、小さな金属の板を、全身を覆うように縫い合わせたものに過ぎない。

正面からイールズの槍をまともに受ければたちまち貫かれてしまうだろう。

であれば、正面から受けなければよい。

金属の板はそのひとつひとつが微妙に違う角度、厚みで縫い合わせである。

ツアルトリスは体を傾け、反らし、回転させることで、相手の攻撃

を浅い角度で受け流すように、微妙な調整を施していたのである。

しかしその事実はイールズを戦慄させた。

すなわちそれは、ツアルトリスがイールズの槍を完全に捕捉していることを意味するからだ。

（俺の槍を完全に見切るなんざ、こいつは思った以上の大物だ！）

走るイールズの横からツアルトリスが飛び込んできた。

イールズの槍を姿勢を低くしてくぐる。

ツアルトリスは手に蟹の爪のような二本の刃のある短剣を持っていた。

目の前で振るわれた短剣を紙一重でかわしながら、手は素早く槍を引き戻すとツアルトリスの体を柄の部分で払った。

常人であれば十メートルは吹っ飛ぶほどの威力で払ったにもかかわらず、ツアルトリスはすぐに着地するとイールズが次の突きを放つ前にすぐさま離脱した。

イールズとツアルトリスの攻防はその後も一進一退で続いた。

ツアルトリスは姿を隠し、死角からイールズの懐へ潜り込む。

イールズはそれを迎撃しつつ、ツアルトリスを追い、あるいは逆に

追われ、森の中を疾走した。

「くそつ、ちょこまかと　！」

渾身の突きはツアルトリスの装甲を浅い角度で擦っただけである。逃げるツアルトリスに槍を横に振るえば、ツアルトリスの短剣に槍を捕らえられる。

剣と槍の間に火花が飛び散った。

二刃の短剣は相手の武器を捕まえるためのものであった。

まるで何もかもを防御に特化させたかのようなツアルトリスだったが、その実力は決して防御だけに特化しているわけではなかった。

イルズの突きをぎりぎりのところで受け流すツアルトリスは少し見切りが狂えば簡単に命を落としてしまうが、ツアルトリスの接近をぎりぎりのところで防いでいるイルズもまた必死であった。

加えて、鬱蒼とした森の中は長槍を振るうのにまったく適していない。

不安定な山道はそれだけで槍の勢いを削いでいた。

平地の半分ほどの実力しか出せないイルズだったが、しかしその分の不利がついても、ツアルトリスと互角に渡り合っていた。

……どちらかの手元が狂えば、それだけであっけなく勝敗は決していただろう。

森の中に、金属のぶつかり合う音が響いていた。

ツアルトリスは急襲する。

もはや何度目の攻撃か。イー ルズは数えるのをすでに諦めている。イー ルズは槍の柄の中ほどを持って、払いや牽制で急襲に対応していた。

真つ暗な森の中で、影の槍は世界に溶けてしまったように不鮮明である。

しかしツアルトリスは槍の狙う先をこれまで一度も間違えることなく正確に読み取っていた。

おそらくこれからも、読み間違えることはないだろう。

(だったら あの手を使うしかねえ)

ツアルトリスがイー ルズの槍の石突きを後退して回避した。

その隙を見逃さず、イー ルズは槍を持って全力で後ろに走る。

そのまま小さな崖を飛び降りた。

下は水位の浅い、幅の広い川が流れていた。

水音を響かせながら、イー ルズは川の中央まで走る。

ツアルトリスもまた崖を飛び降りてイー ルズの後を追いかけていた。イー ルズとは対照的な、水の上を滑るかのような静かな移動である。

川の中央でイー ルズが槍を構えているのを見て、ツアルトリスの足が止まる。

「よくぞ鍛えた、ツアルトリス。では俺も、お前の強さに報いるとしよう」

ゆっくりと、槍を上を持ち上げる。

「今夜は良い月だ」

ツアルトリスはじり、とイールズににじり寄った。

両腕で上に持ち上げた槍の穂先は水面を向いている。

あのような奇怪な構えでは、大地を突くことはできても、ツアルトリスに傷ひとつつけられないだろう。

しかし槍を構え、ツアルトリスを待ち受けるイールズの気迫は尋常ではない。

月が、二人の影を水面に落としていた。

闇を見ることに特化したツアルトリスの目には少しまぶしすぎる。

攻めあぐねていたツアルトリスだったが、先に動いたのはイールズだった。

「影の槍」

ツアルトリスの任務は魔導具 「影の槍」の回収である。

影の魔女が作ったというその槍に、一体どのような特性があるのか。それを知るのは以前の持ち主を殺して槍を奪ったこの男のみ。

それゆえ、ツアルトリスは防御に徹していたのだが、もはやその必

要もないだろう。

(影の槍 恐るるに足らず！)

イールズが一步踏み込んだ。これでツアルトリスは蛇の間合いに入った。

ツアルトリスは弾丸のような速度で突進した。

姿勢は低く。進路は直線に。

どのような一撃が来ようと致命傷を回避する自信があった。

あの構えから放つことができる一撃は非常に限られる。

イールズが槍を突いた。

上段に構えた槍を、接近するツアルトリス目掛けて突き下ろす。

しかしその槍はツアルトリスの体をかすめ、虚しく水面の影を突いただけである。

神速の槍が川底に突き刺さる。

ツアルトリスは勝利を確信した。

イールズが槍を抜くまでの一瞬で密着して短剣を突き立てる。

イールズを五回は殺してありあまるほどの致命的な隙。

しかし。



「  
」  
イルズが、影の槍の本当の名を告げる。

そのとき感じた悪寒を、どう言い表せばいいだろうか。

すべての違和感。疑問。不信感。  
それが、その瞬間に氷解した。

次の瞬間、イルズの手に使っていた槍は影となり、それと入れ替わるようにして影の槍の「実体」がツアルトリスの胸を貫いていた。

「ぬ うっ」

気道に血があふれる。

自分の胸を貫いたのは、真っ白な槍。  
刺さる瞬間を見ていない。まるで最初から刺さっていたかのように、そこに存在したのだ。

ツアルトリスは絶命する手前、わずかに唇を動かした。

しかし口からは血が吹き出るばかりで、結局は何事も漏らさずにツアルトリスの意識は闇の中に連れ去られた。

影の槍。

それは虚と実を入れ替える魔法の槍である。

通常の槍は、相手の肉体を貫いた結果として、「槍が相手を貫いた」影を大地に映しだす。

すなわち影は、実体を映し出すだけの残滓でしかない。

しかし影の槍は、その因果関係を真逆にする。

すなわち、槍の影が相手の影を貫いた結果として 否、その原因として、実体の相手の肉体を、実体の槍が貫くのである。

影の槍は、真実、影そのものだったのである。

影を用いた実体の召喚。それこそが槍に施された影の魔法の仕掛けであった。

影を貫くこの槍は、硬軟に関係なく相手を突き刺す。

条件は単純であり、相手の影を突き刺し、影の槍の本当の名前を告げるだけで良い。

その瞬間、槍の影と実体とが反転し、現実が即座に塗り替えられる。

影の魔法の魔法を具現化したかのような武器であったが、しかし実際は万能には程遠いものである。

実際、イールズは前の持ち主と対決した際、初見でこの槍の魔法を破っていた。

今回イールズが苦心したのはいかにして相手の影を引き出すかつまり明かりのある場所へ誘い込むかということである。

満月が、二人の姿を煌々と照らしている。

イールズが槍を引き抜くと、実体の槍も同時に消失し、ツアルトリスの体は支えを失って川に倒れる。

飛沫が跳ね上がり、ツアルトリスの体から流れたおびただしい量の血液が下流に帯を作っていた。

月の光に照らされた血は、どす黒い色をしていた。

ツアルトリスが敗北した光景を、遙か彼方の山頂から眺める者がいた。

長い体軀を折り曲げて木の上に座っている。腕も、足も、骨そのものように細かった。

体には木の模様を模した布をかけていた。動かなければ滅多なことでは見つからないだろう。

魔導同盟「執行者」十三賢人、”鷹の目”のユート。

イールズが獣の如き気配探知の能力を持っていたところで、数十キロメートルは離れた岩山の人影を見つけることは不可能であった。

しかしイールズにはできなかつたことを、”鷹の目”のユートは実現する。

ユートはイールズとツアルトリスの決着をすべて見通していた。

もちろん、影の槍の特性も。

槍に心臓を貫かれ、絶命する間際、震えるように動いたツアルトリ

スの唇をユートの鷹の目は鮮明に捉えていた。唇の動きから彼の言っていることを読み取るのは、ユートには容易いことである。

「……………ナ……リア……………推薦……………賢人……………」

ツアルトリスの唇はそう動いていた。

ナリアは魔導同盟に所属する若い「執行者」である。

ツアルトリスは自らが死んだ後の十三賢人の空席に、ナリアを推薦したのである。

おそらく、ユートが自分の死に際を見ているのを確信して。

「…隠し盾……………あなたの遺言は、私が確かに受け取った」

ユートは布を畳むと体を伸ばして静かに木の上から降りた。

かれこれ五時間はずっと木の上で監視をしていた。

その間、ユートの呼吸は死者のように静かであり、身動きひとつしなかった。

執行者 ……それは魔導同盟が持つ唯一の直接的な武力、諜報組織である。

十三賢人はその中でも最高の権限を与えられた異能者集団だった。

それゆえ、十三賢人を初見で破ることは非常に困難である。

それを成し遂げたイー ルズの実力が窺い知れるというものだ。ましてや彼は、影の槍をも破っているのである。

ユートは体を通常の状態に戻すのにたっぷり三十分は使い、闇の中を明かりも持たずに下山した。

15・影の槍（後書き）

イルズ「刺し<sup>ゲイ</sup>穿つ」  
ツアルトリス「それ以上いけない」

## 16・生きることをすべてを代償に

再び会議室に呼び出されたイールズは、テーブルの奥で腕を組んで座るカリナの表情を見て、恐らく事態は最悪の方向に進展しているのだろうと推察した。

(それにしても、この女も馴染んだもんだな)

最初は掃除もできないこんな小娘に戦争なぞ務まるのだろうかと侮っていたイールズである。

今はもう、会議機の中央にいるカリナがずいぶん様になって見える。もともと、片付けができないのは相変わらずで、彼女の個室は第3師団着任直後にはすでに混沌となっていた。

この会議室も、カリナが長く居座っている分、最初の頃よりはずいぶん雑然としてきている。

カリナの驚くべき侵食能力である。

「イールズ、あなたにスパイの疑いがかけられています」

「そうかい」

「……それだけですか？」

「アンタに文句を言ったって始まらねえだろうよ」

イールズは小さく笑った。

カリナの苦しそうな表情を見れば、このことでもっとも心を痛めているのが誰だか簡単に分かる。

「…………あなた、この間の晩も、ここを抜け出してどこかに行きましたね？」

「ああ？ 今度は誰のタレコミだ？」

「それは……」

「第3師団の人間じゃねエんだろ？ だと思っただぜ。俺はこの人間には一切見つかってねえ」

「報告は軍の統合作戦本部のオブザーバーからでした」

イールズは内心驚いていた。

あの晩のイールズの行動を知っている人間がいるとすればそれは魔導同盟の人間に限られるが、まさか彼らにそのようなコネクションがあるとは思わなかった。

（こいつは……。あいつら意外と、この国の根深いところに巣食っ  
いやがるのか）

十三賢者だのツアルトリスだの、彼らは思った以上に底が知れない。

しかしそのことを、何も事情を知らないカリナに話すことは躊躇われた。

今のところ魔導同盟にはイールズを狙う理由はあってもカリナを狙う理由はない。

カリナに余計なことを吹きこんで、妙なことをさせては、それが藪蛇になることもありえる。

「…………何が可笑しいんです？」

「いや。蛇槍が藪蛇を恐れるなんぞ、こりゃ面白い言葉遊びだと思っ  
つてな」

「まったく。笑いごとじゃありませんよ」



「そりやすまん。で、俺はどうなるんだ？ 軍法会議にかけられるのか？」

「まだそこまで事態が進展しているわけではありません。今はまだ外部から非公式な進言をもらっただけで、あくまでそういう疑いがあるという段階ですから」

「そいつは救いのある話だな」

しかし『今はまだ』、である。

今後、イールズの嫌疑は、魔導同盟か、あるいは反エーデル派の者たちによつてますます濃厚なものとして扱われるだろう。

「ですから今後は一切、軍法会議で不利な証拠として取り上げられるような行動は謹んでください。基地の無断外出もそうですが、王国軍のご友人に会いに行くのも我慢してください」

「悪いな。迷惑をかける」

「謝らなきゃいけないのは私の方です。…私の部下になったばかりにこんな嫌疑までかけられて…すみません。私にもっと力があれば」

「何言つてやがる。俺がヤバくなったのは俺の自業自得だ。けど前も言つたが、そのせいでアンタの立場がマズくなるってんなら、そりゃ俺の信念に反する」

「…この先、王国軍のご友人と剣を交える展開になるかもしれません。そのときは」

「そのときは刺すぜ。この槍でな」

イールズは槍を持ち上げた。

カリナがわずかに驚いた表情を見せる。

「それは駄目です。私の無力のために、あなたが友人を手にかけることがあつては」

「おいおい、まだ俺が勝つと決まったわけじゃないぞ。そういう罪悪感俺が奴を殺した後にしてくれ」

「……そうですね」

「ああ。安心しな。必ず戦果を届けてやる」

イールズは胸を張って、カリナに虚勢を張った。

王国軍と帝国軍の次の戦闘は双方にとって不本意な形でもたらされた。

最初は小隊単位の衝突だったが、その報告を受けた両陣営の下士官が独自の判断で次々に増援を戦場に送り、次第に戦場の規模が拡大し、これが最終的には黒の森を狙う両軍の全面衝突へと発展したのである。

一番隊、四番隊が次々に戦線に投入され、後方で待機中だった二番隊にも即座に出撃命令が下された。

アブリル隊長が直々に、輪廻やヴァージニアたち班員全員を呼んで集めた。

朝食の最中だった輪廻たちは食べかけのシチューをその場に残し、剣と鎧を身につけて戦場へ急ぐ。

「おい、ダールトン」

足を動かしながら、アブリルが輪廻に話しかける。

「その剣はどうした」

「えーと。問題ありますか？」

「別に問題はねーよ。武器を自前で用意してるやつは珍しくもねえ」

「これは僕の新しい剣です」

「そうか。……あの……ダールトン」

「隊長、どうしました？」

「いや何でもねえ。信頼してるゼラディ」

「え？ あ……」

何か答えようとしたが、アブリルはそっぽを向いて、直後にチームの一番前に駆け出した。

それっきり輪廻の方に顔を向けなかったので、アブリルがどんな表情であんなことを言ったのか見逃してしまった。

「幸せ者め」

と、ヴィセンテが小さな声で、しかし輪廻の耳にはっきりと聞こえる形でささやいた。

「一体何だよ」

「いんや別に。なあゴアージュ」

「そうだね。愛され上手」

「……ふたりとも、うるさい」

ヴァージニアの不機嫌な声を聞いて、ヴィセンテは笑い声を噛み殺していた。

輪廻はわけがわからず、愛想笑いもできなかった。

「まああれだ。お前は安心して戦えばいい。背中を守るぜ」

「いや逆だね。君が僕の背中を守るのさ」

「お前どこまでも自分中心だな」

「野蛮人とは違って、僕は王道を行くための教育を受けているんでね。誰かの背中を守るなんてのは従者の仕事だ」

「もやし貴族」

「……君をこの場で不敬罪で切り捨てたいところだ」

先頭を走っているアブリルが二人の会話を聞いて冗談交じりに口を開く。

「んなことしてみろ。軍事法廷じゃ普段のお前の態度をありのまま仔細違わずオレが報告してやるぜ」

それを聞いて、ゴアーシユは言葉を詰まらせて唸る。  
ヴィセンテは今度こそ爆笑した。

「あー、ゴアーシユ？ ヴィセンテ？」

「ラディ」

今日は妙に静かだったヴァージニアが口を開く。

「上手く言えないが……。わたしはここにいます。だからお前も、そこにいます」

「ありがとう」

あらゆる障壁を、過去を超えて、その感情は、至極当然のようにつぎに溢れた。

二番隊の先頭はアブリル隊である。

まずは輪廻が踊るように敵の戦列に飛び込むと、超接近の乱戦で一瞬の内に敵を混乱に陥れた。

単身乗り込んだ輪廻を圧殺するように敵の兵士が殺到するが、それをさせまいとヴァージニアたちが必死に輪廻に追いつがる。

未熟な雛鳥を守るのはアブリルの役目であった。

両翼から迫る敵の剣を、獣のように駆け回りながら必死に牽制し続けていた。

敵がヴァージニアたち後続に一切手を触れられぬ間に、輪廻が敵の小隊の陣形を瓦解させ、黒の森に血の海を流していた。

「すげえ」

自身も戦神の如き活躍を見せながら、しかしアブリルは輪廻の働きに一瞬目を奪われた。

速度が違う。

正確さが違う。

まるで最初からそう決められていたかのようについに。運命を味方につけているかのようについに。

生と死の間を、輪廻は紙一重で生き延びていた。

その光景を、はるか彼方から、毒蛇も見ていた。そして決意する。奴をこの場で殺さなければならぬ。主君のために。

輪廻は熱病に冒されたように夢中で刀を振るっていた。丸一日かけての修練の結果、すでにその刀を自分の手足のように扱える。

斧原一心は最適の武器を輪廻に届けてくれたのである。きつと、斧原一心にとっても、この刀は最適の武器だったに違いない。

輪廻が十数人を短時間の内に切り捨てたのを見て、帝国軍が徐々に後退を始める。

アブリルはその瞬間を見逃さずに大声で指示を飛ばし、輪廻と入れ替わるようにして全軍が突撃すると、王国軍帝国軍が入り乱れる激しい乱戦にもつれ込んだ。

輪廻は刀に付着した血を布で拭き落とすと、再び人を切ろうと足を敵に向けた。

その瞬間　輪廻は戦場のすべての光景が目に入らなくなった。音も聞こえない。

相手の姿だけを認識していた。きつと、相手も同じだろう。

「団長」

彼我の距離は三十間ほど。イールズと輪廻との間には兵士たちの無数の怒声、剣の打ち合う音、断末魔のうめき声。

輪廻の小さなつぶやきは誰にも届かなかった。

しかしイールズの口がわずかに動いたのを見て、彼もまた輪廻の名を呼んだのだと確信した。

そのわずかな間に、輪廻はイールズがまとわせた尋常ではない殺気を読み取った。

かつての同胞に対する容赦などもはや微塵もない。

イールズの壮絶な気迫に、輪廻の全身から冷や汗が吹き出した。

いったいどのような事情があつてあれほどの覚悟を決めたのか。

それを知るすべはないし、知ろうとも思わない。

ただ分かっていることは、今日この場で、輪廻は彼を殺さなければならぬということである。

イールズが駆け出す。

輪廻もそれに並行する。

「ラデイ！」

自分呼び止める声を無視した。

すべての神経を相手に向けている。

互いの陣営の内を、互いを強く意識しながら、二人は疾風のように木々の間を走る。

やがて二人は戦線から離れ、木のない拓けた場所に出る。  
もはや邪魔も入らない。

イルズは一呼吸の後、二度、三度大きく歩幅をとると、四度目に力強く踏み込んで跳躍した。一つ跳びで輪廻に肉薄する。距離にして三十五歩。それを一瞬で詰めた恐るべき蛇の脚力。しかし真に恐るべきは、そのような跳躍を行いながらも、輪廻の眉間を正確に狙う槍の精度である。

輪廻は後退はせず、蛇の槍を刀で受けた。

高速で互いにぶつかった刀身と穂先に火花が散る。

中空から全身の質量を乗せる槍の一撃は脅威である。

しかし輪廻はその圧力に臆することなく、イルズの槍を一步も下がることなく弾き返した。

ここで受けきれなければ自分の命ごと貫かれる　そんな覚悟の上の不退である。

「化け物……」

そう漏らしたイルズの様子は引き攣っていた。

刀と槍のぶつかる音が森に響く。

イルズの超高速の突きを輪廻はかるうじて防いでいた。

槍の穂先はもはや肉眼で捉えられる速度にはなく、その突きを防ぐ



のはまさに奇跡が必要であった。

しかし。その奇跡も9回を超えた。

輪廻がイールズの槍を防ぎ続けているのは、輪廻自身の幸運はもちろん、イールズならば間違いなく致命傷を狙うだろうという確信があつたからである。

それ故に槍の狙いは人体の急所に限定される。その予測に輪廻はすべてを賭けた。

無論、それは攻撃する側のイールズも承知していたことであつた。しかし承知しつつも輪廻の急所を狙い続けなければならぬ。

もし牽制など放てば、自分が二の槍を放つ前に、輪廻は一瞬で槍の距離を詰め、自分の首を落とすだろう。イールズはそう確信していた。

故にイールズは攻め、輪廻は守る。

奇跡を重ねて生きている輪廻は、しかしいつその幸運が終わるとも限らない身だ。

次の槍か、その次の槍か、そのまた次の槍か。いずれで絶命しても不思議はない。

そもそも輪廻とイールズでは地力に差があるのだ。

しかし、こうしてイールズの槍を捌き続けることが、輪廻にとっての唯一の勝機であつた。

か細い可能性を信じて、自分の命をチップに当てのない綱渡りを続けるのだ。

かつての緒神輪廻が殺せなかった人間は、江戸に三人しか存在しなかった。

そのうちの一人と、今こうして、異世界の森で斬り合っている。

イールズの槍が奔った。

輪廻の胴を両断せんと迫った稲妻の如き一撃を太刀で必死に受け流す。

受け流した次の瞬間には輪廻の心臓を狙った直線の一撃が迫っていた。

迫っていた、と認識したときには、すでにその突きを弾いている。次の一撃は喉を狙うと勘が告げていた。その真偽を問う暇などない喉を守った太刀が反動で弾かれる。その衝撃で、輪廻は自分が生きていることを確認するのだ。

「チッ」

イールズが舌を鳴らした。

次の瞬間に、彼は一跳びで大きく後退する。

輪廻が追撃などしようものならイールズは空中でも槍を振るっただろう。

自分がここまで生き延びている奇跡に、他ならぬ輪廻自身が驚愕している。

イールズとて、輪廻を御しやすい相手とは思っていなかった。

殺せぬはずがない相手である。

一の槍か、二の槍か、遅くとも三の槍で殺せているはずだった。

しかし実際は、輪廻はイールズの槍をすべて防ぎ、こうして生きて

いる。

(どうすればいい。どうすればこいつを殺せる?)

綱渡りをしていたのはイールズも同じである。

必殺できなければ輪廻相手に次の一手はない。

ただ必死に、自分の身を守るためだけに、イールズは輪廻を殺し続けたのだ。

(そもそも こいつは死ぬのか)

間合いをとったイールズに、輪廻は迷うことなく向かって歩いていった。

刀でイールズを討つには刀の間合いまで近づかねばならない。

だから近づく。たったそれだけの単純な理屈である。

勝つことを微塵も諦めない輪廻の在り方が、イールズは前世の頃から恐ろしかった。

しかし恐れると同時に、イールズは心の中で輪廻に喝采を送っていた。

この剣を手に入れるために一体どれほどのものを犠牲にしてきたのか。生きることのすべてを注ぎ込んだ剣が軽はずがなかったのだ。イールズの槍を退けたのは、緒神輪廻の人生そのものの重さだったのだ。

だとしたら、覚悟が足りなかったのは俺の方が。

(こいつを……殺せる……魔法……)

槍を握るイールズの手に力がこもった。  
イールズとて、人生のすべてを人を殺す技術に費やしたのだ。  
剣のために犠牲にしてきたものの重さを、今ここで比べ合う。

イールズの槍の構えが変わり、輪廻の足は影の槍の間合いぎりぎりで停止した。

槍の長さはすでに見切っている。

ましてやあの構えからは、輪廻を突くことはまず不可能である。  
しかし。

（あいつは……わたしを殺すつもりでいる）

その殺意はまったく揺ぎがない。

次に放たれる一撃は、確実に輪廻を殺すものになるだろう。

上段から槍の先を大地に向けた不恰好な構え。

上から突くにしては角度が深すぎるし、下から切り上げるにしては槍自体を持ち上げすぎている。ましてや突くなどもってのほかだ。

あれでは、せいぜい輪廻の足元、影を突き刺すことしかできない。

じり、とイールズがほんのわずか、前に出た。

輪廻は下がる気など毛頭ない。

ましてや相手のこの構え。飛び込めば勝つのは輪廻である。

しかしだからこそ、輪廻は軽々に飛び込むことなどできなかった。自分よりはるかに技量に優れた彼が、みすみす輪廻に殺されるはずがない。

何か理由がある　　必殺できる理由が。

イールズが一步、踏み込んだ。それに合わせて輪廻も腰を落とす。もはや衝突は避けられない。イールズが刺す直前。輪廻が斬り込む寸前。

その瞬間、輪廻は解に至る。

影を突くだけの構えに、必殺の意味があるのなら。影を突くことが、必殺の手段であるなら。

「っ……！」

その答えにすべてを賭けて、輪廻は横に飛び退いた。直後、イールズが槍の真の名を告げる。

「　　」

それに応えて、影の槍の能力が発動する。そして、虚と実は入れ替わった。影の槍は影となり、槍の真の姿が現れる。

「ぐっ………！」

輪廻の影を突いた槍は、しかし輪廻の心臓を貫くことはなく、輪廻の肩を中空に縫いつけただけである。

輪廻は肩に出現した白い槍に激痛と驚愕を覚えながらも、足に力を込めてイールズの方に前進した。

イールズは輪廻の姿を真正面から見ていた。

「あああああああああ！」

獣のような輪廻の叫び。

輪廻の肩にはさらに深く槍が刺さり、輪廻の背中と胸を血で真っ赤に染めていた。

スブリ、メキリと、嫌な音がする。

そしてそのまま刀の届く距離まで近づくと、輪廻はイールズを斜めに斬った。

斬られたイールズは、一言も漏らすことなくその場に崩れ落ちる。死ぬ間際にあつてなお、イールズは槍を手放そうとしなかった。

イールズは自分の倒れる音を聞いた。

斬られた傷が致命傷であることは確認するまでもない。心臓が脈打つたびに体から出血し、体温が下がっていくのが分かった。しばらくもしないうちに自分は死ぬだろう。

輪廻に、影の槍は通じなかった。

それは賞賛すべきことではあっても驚くべきことではない。

何故なら他ならぬイールズ自身が、輪廻と同じ考えからその結論に至り、以前の槍の持ち主を倒していたからだ。

（なるほど…さすが、俺の弟子だな）

誇らしさと嫉妬が入り交じっていた。

思考が鈍くなる。指先にはもはや感触が残っていない。死の感覚をイールズは初めて味わっていた。

人生を代償に手に入れた剣技だった。

もはや意味など残されていないのに、ただそれを守るためだけに、イールズは戦い続けた。

目的などない。強いて言えば、手段を続けることだけが目的だった。犠牲の供養のために生き続けていた。

しかしそれも、もはやこれまで。

不思議と後悔や恐怖は感じなかった。むしろ安堵すら感じる。

長い長い旅の終わり、それまで背負っていた荷物を初めて肩から降りしたかのような開放感。

目はまだ生きている。耳も聞こえた。

輪廻の足音が聞こえて、輪廻の姿が見えた。

（なあ、おい輪廻よ。気づいてるか）

喋ろうとして、舌がゆっくりと動いたが、声の代わりに掠れた吐息が溢れただけだった。

これ以上続けそうになると咳が出そうなので諦めた。今咳き込んだらそれだけで命が吹き飛びかねない。

(お前、泣いてるぜ )

自分を覗き込む輪廻の目を見た。

もはや輪廻はかつて自分が知っていた女ではないことを知る。

自分と輪廻が同類だなどと、思い違いも甚だしい。

イールズが同じ場所をぐるぐると回っている間に、輪廻は新しい場所へ飛び出していた。

剣のために剣を握っていた輪廻はもはやそこにはいなかった。

道理で勝てないはずだ。殺せないはずだ。

(まったく、最期の最期に、なんてものを見せてくれる)

目を閉じたつもりはなかったが、ゆっくりと何も見えなくなった。

泥のように鈍くなる意識の最後にイールズが思い出したことは、あの不器用な女用兵家のことだった。

勝利の約束は果たせなかったが、スパイ容疑などかけられて裁判にかけられるよりはマシな終わり方だっただろう。

彼女の重荷にならなかつたことを、心から喜んだ。

(……ははっ。なんてことだ)

愉快だった。

長くて不毛な人生の最期に、心から誰かのことを思うことができた。自分でも気づかないうちに、自分はその女のために生きていたらしい。

(こつこついうのも悪くない )



満身に包まれながら、イールズの意識は闇に落ちた。

輪廻が目を覚ましたとき、なぜ自分がこんな場所にいるのかとつさに思い出せなかった。

古い木の建物である。首を動かすと、自分と同じようにベッドの上で寝かされている兵士たちの姿が見える。

ベッドの間を忙しく歩き回る医者たちの姿を見て、どうやらこの建物は病院として使われているらしいと分かった。

「ラデイ、目が覚めたか？」

洗面器とタオルを持ってきたヴァージニアが言った。  
ベッドの脇に椅子を持ってきて、輪廻の方を向いて座る。

「僕は……どうなった？」

「その後、私たちはずっとお前を追いかけていたんだ。敵に阻まれたせいで遅くなったがな。私たちが見つけたときは、お前は敵の一人と相討って倒れていた。聞くと、あれが蛇槍イールズらしいな。すごい手柄だ」

「イールズは、どうなった？」

「死んだよ。ラデイも危なかったんだ。出血がひどくて。覚えていないのか？」

「ああ……」

「そうか。こちらの問いかけにもちゃんと答えていたんだが。意識が朦朧としていたのか。それじゃあ槍のことも？」

「槍？」

「ああ。イールズが持っていた槍を持ち帰るように。それから……イールズの死体を埋葬するようにと」

ヴァージニアは屈んで、ベッドの下から白い布に包まれた長いものを取り出した。

影の槍が、そこにあった。

「ついさっきイールズの死体を埋葬してきたところだ。敵の死体を埋葬するのは色々面倒だから、勝手にやったが。悪かったか？」

「いや。十分だよ。ありがとう」

痛みと出血に意識を失いかけながら、我ながらよくそんなことを言えたものだ。

輪廻は自分を褒めてやりたくなった。

これからはもう少し、ラディ・ダルトンの肉体を労ってやるべきかもしれない。

ヴァージニアはタオルで輪廻の腕や首のまわりを拭いた。

冷たい水が体を濡らしていく感触が心地よかった。

「ともかく……お前が無事で良かった」

「うん。ヴァージニアが待っていたからね。……きつと、みんなが待っていないかったら、僕は帰って来なかったと思う」

「そうか。お前の力になれたか」

ヴァージニアはゆっくりと深く頷いた。

その顔はどこか誇らしげに見える。

「なあ、ひとつ頼みがあるんだが」

ごほん、と咳払いをしてから、ヴァージニアはしばらくもじもじと体をよじらせていた。

やがて意を決して、少し顔を赤くしながら小さな声で言った。

「私のことはジニーと呼んでくれ。親愛を込めて」

「……ははっ」

思わず笑みがこぼれた。

ヴァージニアは怒ったように輪廻を睨みつける。

違う違う、と手を振りたかったが、傷のせいで腕が動かない。

「分かったよ、ジニー。じゃあ僕のこととは輪廻と呼んでくれ」

「リンネ？」

「まあ、僕の古いニックネームみたいなものかな」

「うん。分かった……リンネ」

恥じらいながら輪廻のことを呼ぶヴァージニアは、たまらなく魅力的だった。

次の日にはヴィセンテが来た。

見舞いのつもりなのか、手には果物をいくつか抱えていた。

「よっ、景気はどうだ？」

「まだ傷が痛むよ。剣が握れるようになるのはまだまだ先だね」

「まあ生きてたんだ。得したと思わなきゃあな。ほら、食うか？」

ヴィセンテは無神経に果物を輪廻の枕元に並べる。

「食べさせてよ」

「ヴァージニアに頼め」

「ヴァージニアはいつ来るの？」

何気なくした質問だったが、ヴィセンテは呆気に取られた様子だった。

「……………どうしたの？」

「いや別に。ヴァージニアと何かあったのか？」

「何も無いよ。いつも通り、仲良し」

「そうか。仲が良いのは良い事だ」

そう言っつて、見舞いの果物を自分で食べ始めるヴィセンテだった。

「ねえヴィセンテ。槍は使える？」

「まあ、剣と同じくらいにはな。つまりそこそこ半人前つてところだな」

「ベッドの下に、槍があるんだけど。良かったら使ってみない？」

「……………いいのか？ これ、毒蛇イールズの槍だろ？ お前が持って帰れっつて言った」

「うん……………でも僕は槍なんて使えないし。せつかく良い槍なんだから、誰かが使った方が、その人の命を守れると思って」

「まあ、使っつていいというのなら使っつてみたいが」

ヴィセンテは槍を持ち上げると、医者や他の傷病兵たちの目もはばからずに槍をむき出しにした。

「……改めて見ると、妙な槍だな」

「影の槍、っていうんだ」

「なるほど。確かにこれは影みたいだ」

「でも影の槍っていうのはただの通り名で、その槍の本当の名前は」

そこで輪廻の言葉が止まる。

しばらく固まったままの輪廻の顔をヴィセンテが覗き込んだ。

「本当の名前は、何だ？」

「忘れた」

「はあ？」

「うーん、確かに聞いたはずんだけど……何だったかな」

「まあ名前なんてどうでもいいさ。槍は槍だ。せいぜい練習させてもらっぜ」

「そうだね」

ヴィセンテに答えてから、輪廻は大きなあくびをひとつ漏らした。

## 16・生きることすべてを代償に（後書き）

### 【登場人物紹介】

アブリル・ヒルマン

王国軍東部方面軍二番隊隊長。輪廻の上官。

イールズ

通称「毒蛇のイールズ」。カリナ・エーデルの補佐官。

ヴァージニア・キャスカート

王国軍東部方面軍二番隊所属。輪廻の戦友。

ヴィセンテ

王国軍東部方面軍二番隊所属。輪廻の戦友。

エピナ・ユート

魔導同盟の執行者。十三賢人、“鷹の目”のユート。

斧原一心おのほらこいしん

更場武術団の団長。江戸にいたころの輪廻の仲間。

緒神輪廻おがみりんね

更場武術団の女盗賊。剣術の名手。

カリナ・エーデル

帝国軍中将。東部方面軍第3師団の司令官。

くじょうあがた  
九条愛型

通称「五本差し」。魔導同盟の執行者。

グレン・コールナー

王国軍東部方面軍二番隊隊長。

ゴアーシュ・シュトラウス

王国軍東部方面軍二番隊所属。輪廻の戦友。

シャルロット王女

サントラン王国の王女。

ジョーン・グレイス

帝国軍軍務省長官。

ツアルトリス

魔導同盟の執行者。十三賢人、“隠し盾”のツアルトリス。

ディオル・バールトン

王国軍の訓練教官。

マイルズ

王国軍東部方面軍総司令。

リンド

王国軍東部方面軍二番隊隊長付補佐官。

## 17・遅すぎた手紙

黒の森で偶発的に始まった王国軍と帝国軍の全面衝突であるが、結果として、この戦闘は異論の余地なく帝国軍の勝利で終わった。当初は両勢力とも互角　　というよりは消耗戦の様相を呈していたのだが、この機に乗じてアンアディール要塞の駐屯軍が出撃し、王国軍の後背に回りこもうとしたことで戦況は一変した。

王国軍の司令官マイルズは即座に部隊の一部を要塞方面軍に当てたが、このため王国軍は二正面作戦を強いられ、形勢は徐々に不利になり、夕方には全軍に後退を命じた。

そしてこの後退の際に事件は起きた。

二番隊隊長付補佐官リンドが帝国側に寝返ったのである。

王国軍が置かれている状況をヴァージニアから聞きながら、輪廻はリンドがどんな人物だったのかを思い出そうと務めていた。

「あの人が…。最初からそのつもりで軍に入ったということなのかな？」

「それは分からない。しかし隊長はリンドに斬られて重体だ。リンドよりもずっと深い傷を負って、今も意識が戻らない」

事務的に答えたが、ヴァージニアの声には悲しみが溢れていた。

アブリルが二番隊の頭脳ならばリンドは神経である。

突如神経が反乱し、頭脳を巻き添えにしたのである。二番隊は瓦解



し、王国軍の他の部隊を巻き込んで全軍が崩壊した。

ヴァージニアたちはアブリルから輪廻の搬送を命じられ戦場を離脱していたため、この撤退戦には参加していなかった。

「それで、二番隊の残りは？」

「今は待機中だ」

「待機？」

「黒の森が敵に制圧されて、今最前線はリルムウツドの町になっている。敵に攻勢をかけているのはリルムウツドの駐屯軍と、それから黒の森の部隊の生き残り……。二番隊はまともな戦力としては機能していない。部隊を再編する暇もないから、状況が落ち着くまでは、しばらくここで待機ということになるだろう」

輪廻が收容されている病院はリルムウツドのはずれに位置している。帝国軍が再び王国軍の戦線を突破しない限りここまで敵がやって来ることはない。

もちろん帝国軍が勝利の余勢を駆って一気に進軍してくる可能性もあるが、リルムウツドでは黒の森と違って大部隊の展開も籠城も騎兵の運用も可能だ。  
増援を呼ばない限り、黒の森の帝国軍部隊がそれほどまでの脅威になるとは考えにくい。

「それで、戦況は？」

「芳しいとは言えないな。黒の森を奪還するために何度も攻勢をかけているが、勝利はあっても決定的な戦果を上げられないでいる……。どうやら向こうの司令官は優秀な策士らしい」

（アブリル隊長が聞いたなら「うちの司令官と交換したいぜ」なんて



約束する、と嘘でも答えなかったあたりは、まだまだ修行不足であったが。

ヴァージニアの栗色の髪をゆっくりと撫でる。

ヴァージニアはしばらくの間なされるがままだった。

「分かった。私はお前を許そう」

一方的にそう言ってヴァージニアは輪廻から離れた。

いつもの彼女の顔に戻っている。視線が会つと、彼女のほうが恥ずかしそうに視線を逸した。

「そ、そうだ。お前、腕を動かさなくて不便だろう？」

「まあね。あと二週間はそのままだって言われたよ。剣を持てるようになるのは、もっと先かな。今は着替えすらまともにできない」

「だったら私がお前の体を拭いてやるうか」

「あ、じゃあ頼もうかな」

「うええ!？」

何気なく輪廻が答えると、ヴァージニアは狼狽して椅子ごと後ろに下がった。

「……………何でジニーが驚くの？」

「何で、って……………」

「あ、いや、別に無理にやってくれとは言わないけど」

「……………分かった」

ヴァージニアは意を決したように頷くと、輪廻の服を脱がしにかかった。

(う……ものすごく気軽に返事しちゃったけど、これ、もしかしてものすごく恥ずかしいんじゃない)

上半身の服をおそろおそろ脱がすと、ヴァージニアは緊張した手つきで濡れたタオルを輪廻の体に当てた。

冷たい感触がゆっくりと輪廻の肌の上を動いた。季節はもうすぐ冬である。上半身裸は少々寒い。

ヴァージニアの緊張が伝染したのか、輪廻も、だんだんと息苦しくなってきた。

心なしかヴァージニアの顔が赤い。息も荒い。

胸から背中、腕を拭き終わったところで、ヴァージニアが言った。

「そ、それじゃあ、次は下を」

輪廻はありがたく辞退した。

サントラン王国の王城にあるシャルロット女王の執務室に、軍務大臣と国務大臣が呼ばれていた。

軍務大臣が戦況を報告するのをシャルロットは深刻な面持ちで聞いている。

幼い女王には大きすぎる執務機の横に、年老いた執政官の姿があった。

部屋の入り口の隅には秘書官の机があり、若い女性の秘書官が軍務大臣の報告を書面に記録している。

軍務大臣の報告が終わると、シャルロットは慎重に言葉を選んで発言した。

「それで……結論として、わたしたちは負けているんでしょうか」  
「そう、なりますね」

いかつい顔の軍務大臣はそう答えながら、しかし執政官の顔色を伺っている。

「帝国軍の侵攻に対する対処はどうしますか？」

「現在、リルムウツドを要塞化して徹底抗戦の構えです。黒の森では遅れを取りましたが、すぐに巻き返して見せます」

「それは現実的ではありませんね」

軍務大臣の言葉に執政官が冷たく反論した。

そっけない言い方であったが、クレイ・ミラーエ執政官の言葉にはいつも人を萎縮させる何かがかもっている。

「拠点を要塞化して徹底抗戦しているのは帝国軍も同様です。それにあちらには依然としてアンアディール要塞がある。つまり補給はこちらよりも手厚い。一度奪われてしまった領土を取り戻すのはそう簡単なことではありません。軽はずみな約束はしないように」  
「……………それは失礼を」

軍務大臣の肩が屈辱で震えるのをミラーエ執政官は無視している。  
ミラーエはシャルロットの方を向いた。

「しかし軍務大臣の言うとおり、今日明日中に帝国軍が侵攻してくる、ということはないでしょう。リルムウッド以西では帝国軍といえど自由に行動することはできません。それに、こちらには列車砲がある」

王国の領土中央から南に広がる平野を鉄道が走っている。これは、王国が抱えている「雷の魔女」の力を動力源としていた。雷の魔女は世界にただ一人であり、その唯一の魔女が王国にいる。鉄道は帝国に対する大きなアドバンテージであった。

列車砲はその鉄道を使って移動させる巨大な大砲である。移動にも点火にも魔女の力を用いるため、通常の大砲には出せない、超火力、長射程を実現している。

しかし鉄道は平野の中でしか運用できないため、帝国の領土に直接大砲を撃ちこむということはできない。

列車砲の最大射程はリルムウッドの西側にぎりぎり届くあたりである。

つまり帝国軍がこれ以上の侵攻を続ければ、それは列車砲の射程に入ることの意味する。

「……しかしあまり列車砲を過信なされるのは危険かと。やはり敵の侵略から国土を守るのは兵士の力です」

軍務大臣は小さな声で警告した。

列車砲とは言えしよせんはただの大砲である。小細工を弄されればいくらでも無効化される危険がある。

「国務大臣から言わせていただけるのなら、これ以上の進軍は無益です。王国軍の軍事行動のために王国の国民には非常に大きな負担

を強いられています」

「あのー、和平の道はないのでしょうか」

シャルロットが発言すると、三人が一斉に女王を向いた。

執政官が代表して答える。

「難しいでしょうな。フェルミナ鉱山を求めて宣戦布告してきたのは帝国の方です。和平などとしては、帝国の威信に関わる。向こうは絶対に飲んではくれないでしょう」

「しかしわたしたちには共存の道が残されているはずです。このまま戦争を続ければ、いずれわたしたちも彼らも、両方が衰退してしまいます」

それに答えたのは軍務大臣だった。

「無論、それは承知しておりますが。そもそも交渉のテーブルにつくためには、こちらにその資格が、つまり力があることを示さねばなりません。その点はどうかご理解ください」

シャルロットは納得できないでいたが、これ以上議論を続けたところで三人の大人を論破できるとは思わなかった。

シャルロットが黙ったのを見て、ミラーエが軍務大臣に指示する。

「とにかく、森を奪われた以上、しばらくこちらは後手に回らざるを得ません」

「……森は必ず奪回する」

「ではその準備を。名誉挽回のチャンスです」

軍務大臣は何か反論しかけたが、言葉をぐっと飲み込んでミラーエの言葉に大人しく従った。

ミラーエはシャルロットの方に向き直る。

「陛下、他に何かございますか？」

「……リルムウッドに行つて、戦いで活躍した兵士たちに勲章をあげたいと思うのですが」

「またその話ですか。それは危険だと、何度も申し上げたではありませんか」

「しかし、王国のために命をかけている兵士を労うのは王の務めではありませんか？ それにわたしが行けば、兵士たちの士気も上がると思います！」

「しかし、陛下にもしものことがあれば……」

ミラーエに代わつて國務大臣が発言した。

シャルロットは優雅に見えるよう、精一杯虚勢を張つてそれを断つた。

「わたしの安全は兵士たちが守ってくれますよ。ですよね？」

「も、もちろんですとも！ 王国軍は、命に代えても陛下をお守りいたします！」

軍務大臣が張り切つて答える。

シャルロットが満足そうに頷くと、執政官と國務大臣がぎろりと軍務大臣を睨みつけた。

「それでは、視察に関する細かな日程の調整は國務大臣にお任せします。それから、わたしの旅の安全は軍務大臣が」

「かしこまりました」

女王が正式に命じた以上、家臣たちにとってそれは絶対であった。



軍務大臣、国務大臣、執政官が執務室を出たのを確認してから、シャルロットはため息をついた。ため息をつくだけに留まらず、シャルロットはそのままソファにつぶせに倒れる。

顔を上げると、ソファのすぐそばに秘書官が立っていた。

「うまくやりましたね」

「……がんばりました」

シャルロットは体を起こした。

秘書官のテーゼルは、王城でシャルロットが心を許して話せる数少ない人だった。

「けど、どうしてそんなに戦場を見たいんですか？」

「わたし、戦争を終わらせたいんです。で、戦場を見たら、もっとがんばろうって気になるかなーって」

「なるほど。立派な心がけです」

「それに、あそこにはわたしの大切な友達がいるんです。だからわたしは、ちゃんと見ないといけないって思うんです」

「……お茶をいれましょうか？」

「あ、お菓子もお願いしますー」

「はいはい」

テーゼルは笑いながら一礼して、執務室を後にした。

輪廻は故郷への手紙を書いていた。

故郷と言っても江戸ではない。

この世界の、ラディ・ダールトンの故郷である。

輪廻が軍に入って一年以上経っているが、これまで一度も故郷に報告を送ったことはなかった。

ダールトンの家族に嫌な思い出があるわけではなかったが、しかし故郷と呼ぶには未だに違和感があった。

今、怪我をして動くこともままならず、やることもないので、しばらく棚上げしていたこの問題に取り組むことにしたのである。

だが、輪廻は手紙の書き出しから迷っていた。

こういうとき、戦場にいる息子は家族にどのようなことを伝えるべきなのだろう。

そういえばゴアーシユは頻繁に故郷に手紙を送っていたが、あとき文面を見せてもらえばよかったかもしれない。

しばらく腕を組んでうんうん唸っていたが、とうとう観念して、当り障りのない、事実だけを簡潔に述べた質素な手紙を書くことに決めた。

自分が安全であること、しばらく王都に戻るつもりはないこと、これからも給料はすべて故郷に送ることをシンプルに書いて、輪廻はペンを置いた。

そのとき、医者の一人在ベッドの間を走ってこちらにやって来た。

メリーナという名前の女医である。

よれよれの白衣を着た、高級そうな眼鏡以外は飾り気のない女だった。

彼女が走るたびにはだけた白衣の間から豊満な胸が前後左右に激しく揺れているが見えた。

「……メリーナ、どうしたの？」

「あ、あの、えっと、ダールトンさん」

メリーナが気弱そうに視線を彷徨わせる。

慌てていたせいで、薄茶色の巻き毛が両肩にまとまりなく広がっていた。

「ついさつき、隊長さんが目を覚ましました」

「意識が戻ったの!？」

「はい。今はもうお話もできますよ」

「今からすぐに行く」

「あ、ちよっと!」

ベッドから降りようとしたところ、体に力が入らずに転げ落ちそうになった。

それをメリーナが慌てて捕まえる。

「あ、あの、わ、わたし、さ、支えていますから、えと、はい、こうして、あの」

「ありがとうございます。ほら、急いで」

「ははははいっ」

輪廻がメリーナの肩に腕を回すと、彼女は真っ赤にして何度も何度も頷いた。

ベッドの上に、包帯だらけのアプリル・ヒルマンが横たわっていた。輪廻がそばに寄ると、気配を感じたのか、アプリルがゆっくりと目を開いた。

「誰だ」

「隊長。ご無事で何よりです」

「……どこが…無事だ。これ見て無事だ、なんて…よく言えるな…え？」

ゆっくりと、弱々しい声で、アプリルが答える。

「けど…お前、生きてたんだな。よかった…」

「みんなが待っていましたから。隊長も」

そうか、とアプリルは頷いた。

一言一言を発するだけでも大儀であった。

「リンドが…裏切った」

「聞きました」

「あの野郎…いきなりオレの…腹…刺しやがって…代わりに…野郎の肩…蹴って…粉々に…してやったが…」

アプリルは咳をするみたいに笑った。まったく情けない、と言葉を続ける。

「ところで……戦況はどうなってる……?」  
「……今は、戦争のことは忘れて、ゆっくり休んでください」  
「なあ……ラディ……ひとつ頼みてえんだが……」  
「何なりと」  
「手……握ってくれ」

輪廻は、毛布の下にあった、アブリルの手を握った。  
真っ白な小さな手は普段の彼女からは想像もできないほど冷たかった。

輪廻が優しく握ると、アブリルも弱々しく握り返してくる。

しばらく手を握ったまま、輪廻たちは無言で過ごしていた。  
ときどき、アブリルのすすり泣く声が響いていた。

「……もういいや。ありがとよ」

やがて投げやりにそう答えてから、アブリルは目を閉じて静かな寝息を立てた。

「……メリーナ。戻ろう」  
「はい」

輪廻はメリーナに声をかけた。  
輪廻がアブリルと話している間、ずっと隣で待っていてくれたのだ。  
輪廻が腕を伸ばすと、黙って肩を貸してくれる。

ベッドに戻るとき、輪廻は改めてメリーナに礼を言った。治療や、肩を貸してくれたことだけではなく、彼女がくれた様々な心遣いに対して。

「ありがとう。メリーナ」

「どうえ！？ い、いえいえいえ、わ、わたしなんか、そんな、滅相もございません、というか、えーと、医者ですし、こうするのの仕事だからなんともないかなーなんて言ったりして」

「きゃっ！」

「うおっ！」

輪廻とメリーナはバランスを崩して二人で廊下に倒れた。

女のような悲鳴を上げた輪廻と、予想外に低い声を漏らしたメリーナ。

輪廻をかばおうとしてメリーナが下になり、結果として、メリーナの胸に輪廻が顔をうずめる形になった。

おかげで衝撃は免れた。

しかし輪廻は改めてメリーナの胸が羨ましかった。

「メリーナ、大丈夫？」

「いたたたた…。す、すみません。失敗しちゃいました。今起き上がりますか」

メリーナの顔が半笑いのままで固まった。

ただならぬ気配を感じて輪廻が首だけで振り返ると、そこには花瓶を持ったヴァージニアの姿があった。

メリーナを押し倒した状態の輪廻である。

ヴァージニアの手には凶器となりうる花瓶。

輪廻は慌てて起き上がろうとして、メリーナの胸に手をついてしまった。

その拍子に「やんっ」と艶っぽい声を上げるメリーナ。起き上がるうとして、予想外に力が入らず、再びメリーナの胸の上に倒れる輪廻。

泥沼だった。

ヴァージニアはしばらく無言と無表情のまま二人の様子を見て、やがて深く険しいため息をつく。

「……………うっ」

涙目になって、花瓶を持ったまま病院の外に走って行った。

17・遅すぎた手紙（後書き）

今週の後書きは作者取材のため休載させていただきます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4506v/>

---

輪廻は転生しました

2011年11月10日19時53分発行